

平凡な僕がプロデューサーになりました

夜明けの月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ごく平凡な大学生の蒼崎弘弥。あまり取り柄はなく、成績なども平凡。

そんな彼に人生の転機となる『手紙』が送られてくる。

これは、何の取り柄もない青年がアイドル達と共に進み、成長していく物語。

ー今、止まっていた時計の針が動き始め、少年少女達に魔法がかけられる。

# 目次

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| こうして僕の新たな生活は始まりまし<br>た。      | 1   |
| 初仕事が僕にとってはハードなものとな<br>りました。  | 7   |
| 顔合わせは徐々にハードなものになっ<br>ていきます。  | 25  |
| デスクワークは意外に疲れるものです。           | 44  |
| 二回目の顔合わせも波乱の幕開けです。           | 57  |
| 笑顔が素敵な少女に喜ばしい通知です。           | 73  |
| 出会いというのはハプニングと同時に<br>やってきます。 | 86  |
| 春の息吹と共に少女の決心を見守りまし<br>た。     | 101 |
| 三徹からの大ピンチです。                 | 113 |
| 黒歴史閲覧のあとに待つのは初めての体<br>験です。   | 130 |
| 頑張りすぎには注意が必要です。              | 143 |
| CDデビューの件で一波乱です。              | 158 |
| 白衣の男襲来です。                    | 168 |
| 考えは脳内に止めておくことが重要で            |     |

す。 | 180

寝落ちの後には不運なことしか待つてないようです。 | 195

新規アイドル採用オーディションです。 | 206

正しい道に引き戻してあげることがプロデューサーの仕事です。 | 217

臆病な少女は少しだけ殻を破り、平凡な青年は疲れ果てるそうです。 | 234

プロデューサーがレッスンというのはおかしいと思います。 | 242

こうして僕の新たな生活は始まりました。

どうも、僕は蒼崎弘弥あおさきひろやと申します。皆さんはアイドルというものをご存知でしょうか。

アイドル。それは、可愛い女の子の頂点という認識がある。まあそれは間違っていないし、否定する気もない。CDを出したり、テレビに出たり、ライブステージをしたりなどがあるだろう。

だが、それが成り立っているのは、その女の子たちの努力と試練を超えた賜物である。そして、その子達を支える裏方のおかげでもある。

だがなぜ、今こんな話をするかというと、僕が置かれている状況にある。

「なんでこんな事になったかなあ……」

僕は、家のダイニングでそう呟き冷や汗をかく。僕の左手に握られた封筒、そして右手に握られたその中に入っていた手紙。その一部には、こう記されていた。

『アイドルプロデューサーの選考に当選しました』

身に覚えがない事この上ない。なんだこれは。アイドルプロデューサーって何？てか選考って何なんだ？

「あら、結果来たの?」

「結果?」

そこに僕の母親が現れる。結果来たの?という不思議な反応に僕は訝しむ。

「あれ、言ってなかったっけ? 選考の募集に出したって」

うん、初耳。率直に言いたい。何やってんだお前は。

「いやあ、武内君の仕事先だと言ってたからつい」

武内君とは、母さんの高校時代からの友人らしい。僕も何回か会った事がある。あの人があつたみたいで無口になつたけど、まあ根は良い人だ。

「で、武内さんがどうしたの?まさか頼んだんじゃ……」

「まあ、できるだけ通してくれるようにね。あんた大学の授業が終わった後、する事ないのにバイトする気もないし。それにそろそろお金も稼いで欲しいのよね」

ちなみに僕は、大学二年生だ。どこにでもいる、ごく平凡な大学生だ。

「いや、働かなくて良いって……」

「それは一年生の間の話よ。あとの理由は社会見学かしら。家でダラけてないで、少しは何か学んできなさい」

そう言つてダイニングを離れる母さん。僕に断らせる気はないらしい。

「面倒くさいなあ……」

仕方なく手紙を読み進めていくと、

『二月二十日に本社までお越しください』

と書いてあった……………ん？

「あれ？今日じゃね？」

カレンダーを恐る恐る見ると、やはり今日は、二月二十日だった。嫌な汗が頬を伝う。

「くそっ！ここに書いてる『346プロダクション』ってどこだ!？」

なんか幸先悪いなあ……………。

☆♪◇

「すみません、わざわざ来てくださって」

低い声で機械的に言うのは、目の前にいる武内さんだ。だが、相変わらずでかい。体が。

僕が通されたのは、武内さんの仕事部屋だった。一人で使うにはちようど良いぐらいの大きさである。

「というより、知り合いという時ぐらいは敬語は無しにしようよ武内さん」

「……………癖、です。お気になさらず」

「いや、普通気にするって」

身内にまで敬語使われちゃ、距離取られてるみたいで怖いんだよね。

「それで、あの……プロデューサーの件ですが……」

不安そうにこちらを見る武内叔父さん。まあそこは気になるよね普通。

「受けるよ。ここで拒否して帰ったら、母さんに何言われるかわかったもんじゃないからね」

幸先悪い挙句、気に入らないので拒否してきましたと母さんに言ってお説教食らうのだけは勘弁したい。

「で、では……」

「うん。蒼崎弘矢、二十歳。大学二年生の未熟者ですが、どうぞよろしくお願いします」  
僕は頭を下げて言う。まあこれは誰でもすることだよ。

「ありがとうございます」

心底案じたかのような声を出す武内さん。どこまで心配だったのさ。

「それでは、蒼崎さんには早速ですが仕事をやっていただきます」

「え？何の？」

「私と蒼崎さんがプロデューサーとして行うプロジェクトの仕事です」

へえ、そんなのがあるのか……ってはい？



「……え？僕がプロデューサー？」

「はい。選考結果の通知にも書いていたと思われませんが」

僕は、鞆から封筒を取り出し、件の手紙を取り出す。そこにはしつかりと『アイドルプロデューサーの選考に当選』と書いてあった。

「おう……………」

「あの……………どうかしましたか？」

「いや、なんでもありません……………」

ぶつちやけ言うことやりたくないのだが……………、そうなると思われれば二つ。

諦めてプロデューサーになるか。ここで「やっぱ無理です」と言つて断り、家に帰つて母さんからの腹パン食らうか。

……………これって選択肢必要なくね？

「……………まあいいか。それで、そのプロジェクトの名前つて何ですか？」

「シンデレラプロジェクトです」

シンデレラプロジェクトか……………。なんかいい響きじゃん。

「それでは、蒼崎さんには最初の仕事を任せていただきます」

ほお、ここにきて初仕事か。初出勤で初仕事か。初めてづくしだな。

「まずはこれを」

そうやって渡されたのは、証明写真が貼り付けてある十数枚。その写真に写っていたのは、可愛く綺麗な女の子達だった。

「この子達は？」

「本プロジェクトのために募った少女達です。蒼崎君には、この子達と顔合わせをしていただきます」

……ハードル高くありませんかね？

兎にも角にも、僕のプロデューサーとしての生活が、今始まった。

初仕事が僕にとってにはハードなものとなりました。

新人プロデューサーとなつてから一ヶ月。僕は一人目の合格者に会いに行くことになつた。

なぜ一ヶ月も経つてしまったのか？単位計算間違えて補習食らつてたんだよ。まあ、補習のおかげで単位はどうにかなつたけど。

「それで、今日は誰と会うんですか？」

僕は武内さんに聞く。今は車で移動中である。ちなみに、僕は白のパーカーに黒のカーゴパンツである。普通、プロデューサーというならスーツを着るのだが、僕は着ていない。

「あとすみません、スーツじゃなくて」

「構いませんよ。それに、理由が理由ですから」

その理由とは、母さんが使うだろうと判断してクリーニングに出したのはいいのだが、クリーニングの際にどこか糸がほつれていたところがあつたらしく、修繕しなければ着ることのできない状態になつてしまつたのだ。

母さんはこれを機に新調しようと言つたのだが、補習を受けることになり、勉強に集

中していたため、サイズ合わせなどができなかつたのだ。

「ええっと、今日会うのは……」

「新田美波さんですね」

武内さんが言い淀んでいると、助手席から女性の優しそうな声が聞こえてくる。

助手席には、明るい緑のスーツを着た微笑んでいる女性がいた。

「……………この方は？」

「千川ちひろさんです。本プロジェクトの事務などのサポートをやっていたことになっています」

「どうも。よろしくお願いしますね」

「よろしくお願いします」

変わらず笑顔の千川さんを訝しむ。こんなに笑顔を保てるなんて、何か裏があるに違いない。

「ちひろでいいですよ」

「俺何も言っていないですよ……？」

駄目だ。こんなことに気を取られていたら話が進まない。

とりあえず、今から会う人のことぐらい聞いておかないと。

「で、新田さんってどんな人なんですか？」

「女性ですね」

「いや、今そういうボケはいりませんので」

真顔でボケをかましてくるkk……ちひろさん。って何も言っていないんですから、笑顔でこつち見てこないで。怖いからさ。

でもさ、男性がフリフリの衣装着て、『アイドルやってます☆』とか決めポーズして本気で言った瞬間には世界が滅亡すると言っても過言ではないと思うんだ。ある意味人類最終兵器だ。……この世の中には、そういう服装が似合う奴らもいるが。

「蒼崎さんも似合いそうですね」

「そろそろ人の思考読むのやめてもらっていいですか？そして似合いません。じゃなくて！新田さんっていう人の情報お願いします！」

終始笑顔のちひろさんが怖いです。この人絶対に僕で遊んでるだろ。

「新田さんは大学生で、ラクロス部に所属しています」

「そうなんですか。……ってそれだけですか？」

「そんなに女性の個人情報を知りたいんですか？変態さんですか？」

「そう言われると、僕が悪いことをしているように聞こえるんだが。てか変態じゃない。い。」

「気になるなら会って話してみてはどうですか？」

確かに、ちひろさんの言葉にも一理ある。ここで情報を聞くより、実際に話した方が早い。のだが、

「初対面で話せるとお思いですか？」

「大丈夫ですよ。セクハラ発言さえしなければ」

「するわけないでしょ！失礼を承知で言わせてもらいますけど、あんたはバカか!？」

「さあ？どうでしょうね」

笑顔ではぐらかすちひろさん。おそらくこの人は楽しんでる。僕を振り回して楽しんでやがる。

ちひろさんを睨んでいると、車がどこかで止まる。

「着きました」

武内さんが、無機質な声で言う。車の外に出ると、そこは小洒落たカフェの前だった。

「私たちはこの後別件で打ち合わせがありますので……」

「あ、了解です」

「それでは、お願いします」

「初仕事、頑張ってくださいね」

僕が車から降りるのを確認すると、励ましの言葉をかけて武内さんは車を発進させた。

「最初から一人とかハードル高すぎないかな……?」



僕は店内に入り、適当な席をおさえてそこで武内さんから受け取った資料を読む。

新田美波、十九歳の大学生。僕より一つ年下か……。趣味はラクロス、資格取得………つてなんかすごいなおい。広島出身か。遠いなあ………距離的に。

「ええと、志望理由は『新たな私に挑戦してみたい』……へえ」

その文を見て思わず口角が上がる。こういう志を持つている人は嫌いじゃない。あつた時に聞いてみるか。オーディションの時と変わっているか否か。

「あの、ご注文は?」

いつの間にかテーブルに来ていたウエイトレスさんに恐る恐る聞かれた。おっと、さっきの笑い見られましたかね?

「あ、え? えつと……、コーヒー砂糖多めでお願いします」

「かしこまりました」

早々に注文を終わらせて資料を読む。ちなみに僕はブラックが飲めない。甘いものが大の好物だ。他の人には辛党だとか、苦手なものなどないと勘違いされがちだが、そ

んなことはない。僕だって人間だ。苦手なものぐらいある。

注文したコーヒー待ちつつ、資料に目を通していると、いきなり声をかけられる。

「あの、すみません……プロデューサーさんですか?」

顔を上げて声が出した方を向くと、茶髪でおっとりとした感じで制服を着た女性がいた。

「新田美波さんですね。お話は武内さんから聞いています。とりあえずそこに」

「あ、はい」

僕はすぐさま立ち上がり、普段は使わないような丁寧な口調で言う。

「この度は、遠い所からありがとうございます。今回の件については知っていますよね」

「はい。アイドルオーディションの結果通知は見ました。確か、このプロジェクトの概

要ですよね」

ええ、そうですね。と言いたかった。言えるわけがない。というかなんだ概要って。

聞かされてませんよ武内さん。

「ええつと、それは「お待たせいたしました。コーヒーです」

これはグッドタイミングだろうか。言い淀んでいたところにウエイトレスさんが頼んでいたコーヒーを持ってくる。

「新田さんも何か頼みますか?」

「あ、いいんですか?」



「構いませんよ」

「あの、それじゃあ紅茶を」

「かしこまりました。少々お待ちください」

ウエイトレスさんは綺麗な礼をして去っていく。僕は咳払いをして話を進めようとする。が、

「すみません。実は、プロジェクトの事に関してはあまり知らされていないんです」

「え？そんなんですか？」

「はい。僕は一ヶ月前に採用された新人なので。自己紹介遅れました。蒼崎弘弥です」

「新田美波です。よろしくお願ひしますね蒼崎さん」

はにかみながらそう言う新田さん。同級生にいたら惚れてるな、確実に。じゃなくて、とりあえず今日の目的を言わなくては。

「今日は顔合わせという目的で呼ばせていただきました。実を言うと、僕の上にもう一人プロデューサーがいるんですけど、用事で来れなくなってしまうまして」

「そうなんですか」

「顔合わせだのためにお呼びして申し訳ありません」

「いえいえ、そこまで遠くありませんし」

「え？広島から来たんじゃない……」

「もうこつちに引つ越ししてありますので、ここからそう遠くないところなんです」

「こ、行動が早い事で……。」

「顔合わせも済んだことですし、僕がきになることを幾つか聞いてもよろしいですか？」

「はい。構いませんよ」

「まず、どうして僕がプロデューサーだと分かったんですか？」

まあふと疑問に思っただけなんだけどね。ほら、僕私服だし。それにただ紙を見てるだけだと、勉強している学生に見えなくもないのに。

「勘、ですかね。なんとなく、この人だつて分かりました」

なんとなくと言われると返し方に困る。そう思つて悩んでいると、新田さんが言つた。

「でも、それを言うとは蒼崎さんだつて私がよく分かりましたね。初対面で、いきなり声をかけたのに」

「まあ、アイドル選考の時の資料を預かってましたので。そこに写真もありましたし」

「それもそうですね」

少し緊張していたのだが、話していくうちに緊張が解け、顔が緩んでくる。そこにウエイトレスさんが来て、紅茶を置いていく。それを機に、僕は話題を変える。

「それでは、少々真面目な話をしましょう。僕はあなたに一番聞きたいことがあるんで

す」

「なんででしょうか？」

「あなたがアイドルを志した理由を聞かせていただきたいんです」

僕は真剣な表情で問う。新田さんもそれにつられ、真剣な表情に変わる。

「新しい私に、挑戦したかったんです」

『『新しい私』？』

「はい。大学に通って、ただただ趣味と勉強に打ち込んでいました。ですが、私思ったんです。このままで本当にいいのかなって。もつと、勇気を持って何かに挑戦する必要があるんじゃないかって。だから、アイドルになろうと思いました」

理由は変わっていない。僕はそこに納得はしたし、いいと思った。だけど、僕はまた疑問を持つ。

「あなたのその『何かに挑戦する』というのはアイドルでなくてはダメだったんですか？』

僕は、おそらく誰もが疑問に思うことを口にした。『何かに挑戦する』というのであれば、今までしたことないことをすればいいのではないのだろうか。しかも、それがアイドルの必要はあるのか。少なからず、僕はそう思ったのだ。

「そう、ですね。確かに、そうかもしれません」

やはり、そう答えるだろう。だが、僕の予想に反して新田さんは言葉を続ける。

「でも、何故か分かりませんが、アイドルじゃなくちやダメだつて思つたんです。なんとなくですけど、そう思つたんです。それじゃダメですか？」

はにかみながら新田さんは言う。僕は自分でもわかるほど口角が上がる。

「いや、十分だよ。なんとなく、なんとなくか。いいじゃん、面白いよ君！」

おっと、口調がいつものやつに戻つてしまった。どれだけ興奮しても丁寧口調だけはしないと。

「そ、そうですか？」

「ええ。十分です。魅力的な理由じゃないですか！それと申し訳ありません、舞い上がつてしまい」

「いえいえ！そういうえば、蒼崎さんつてお幾つなんですか？」

「二十歳ですけど、それが何か？」

「……………一つ年上だつたんですね」

何？その、『年下だと思つてたのに違つた』みたいな感じの反応は。確かに、顔立ちも幼い方かもしれないが、そう言われると癪にさわる。……まあ、顔は変えられるものでもないのだが。

「そんなに若く見えますか？」

「あ、いえ、もつと年を取っているのかと思って」

なんか複雑な気分です。

「言葉遣いとか丁寧で、仕草とかも大人っぽかったのですね」

そう言われると、何も言えなくなる。大人っぽいか言われたことなかったからなあ。

おつと、話題が逸れ過ぎている。そろそろ戻さなくては。

「ゴホンッ、とりあえずあなたの意志はわかりました。それじゃあ、探しに行きましょう。『新しいあなた』を、一歩踏み出した勇氣ある新しいあなたを」

僕は手を差し伸べてそう言う。簡潔にまとめたほうがいいと思っただけ、これはどうなのだろうか。

「はー」

すると、新田さんは笑顔で僕の手を取る。どうやら、このまとめ方で良かったらしい。こうして、僕の初仕事は幕を閉じた。

☆♪◇

話が一通り終わって、カフェの近くのバス停に来ていた。新田さんはバスで来ていた

らしい。

今日は日は傾いており、夕焼け景色がこの上なく綺麗だった。

「今日はありがとうございます。プロジェクト内容は追って連絡します」

「よろしく願います。でも、どうやって連絡を取りましょうか？」

確かにそうだ。僕は名刺なるものを持っていない。かつ、武内さんの連絡先も知らない。母さんに聞いても教えてくれないし、知ろうとしても知ることができなかったのだ。

というか、武内さんの連絡先を知っていたとしても教えられるわけがない。僕がもしそれを新田さんに教えて、武内さんが新田さんの電話番号なんかにかけたら、警察沙汰になりかねない。面倒ごとを避けたい。だが、どうすれば……。

そう思つてポケット漁ると、四角くて薄い何かがあつた。スマホだ。

「そうだ。これ、僕の連絡先です。何かあつたらいつでもどうぞ」

僕はすぐさま、連絡帳を開いて自分のメールアドレスと電話番号を新田さんに見せる。

「えつと、赤外線できますか？」

「はい。少々お待ちを」

僕は、赤外線通信を行い、新田さんと連絡先を交換する。すると、ちようどのタイミングでバスが来た。

「それでは、これからよろしくお願ひします！」

「いえ、こちらこそ」

そして、新田さんは手を振ってバスの中に入っていく、バスは発車した。

「たはあく……、終わったあ……」

一気に体から力が抜けてしゃがみこむ。緊張が途中からほぐれたとはいえ、さすがに全て取り除けたわけではないのだ。しゃがんでいると、後ろから声をかけられる。

「あの……大丈夫ですか？」

低くゆつくりとした口調。聞き間違えるはずがない。こんな喋り方をする人は、僕の知り合いには一人しかいないのだから。

「大丈夫ですよ武内さん。問題なく初仕事終わらせてきました」

「それは良かったです。新田さんは同意してくれましたか？本プロジェクトへの参加について」

「ええ。しつかりとした意志がありましたから、おそらく大丈夫でしょう」

「そうですか。押し付けてしまって申し訳ありません」

武内さんは謝るが、押し付けられたとは思っていない。むしろいい経験になったと思ってる。だが、

「プロジェクト内容は事前に教えて欲しかったです」

「す、すみません。伝え忘れていて……」

「いいですよ。武内さんも暇じゃないことは分かっていますので。でも、後で資料をください。新田さんにも知らせなければならぬので」

「はい。分かりました。それでは、送りますので車に」

そう言われて車に乗る。新田さんとの話が終わってから、脱力はしたものの、興奮は冷めなかった。

初仕事を遂行した達成感、そして胸が締め付けられるように感じたもの。それらが僕の興奮を冷まさなかった。

達成感はいいのだが、その他のやつは正体は分からない。だが、これが心地いいことだということだけは分かった。それと同時に、これは失ってはいけないものだということも自ずと分かったのだ。

そんなことを考えていると、助手席にいたちひろさんが笑顔で言ってくる。

「どうでしたか？上手くいきました？」

「ええ、まあ」

「セクハラは？」

「ええ、まああってするわけじゃないでしょうが！」

「ふふふ」



……先ずはこの人の対策案を練った方な良さそうだな。

☆♪◇

### 蒼崎弘弥活動記録①

今日は、シンデレラプロジェクトに参加する新田美波さんと顔合わせをしてきた。

当日、一人でそれを遂行すると聞いた時はどうなることかと思ったが。

案の定、思った通り緊張した。あまり女子とも話したことがないので尚更だ。

新田さんと実際に会ってみると芯の通った人だった。『新しい自分』という自分の枠から外れたものを探しに行こうとする意志は、そう簡単には持てないだろう。

その点を評価すると、彼女は面白い。少ししか話していないが、彼女にはリーダーのような素質があると思った。僕が感じたことだが。

彼女の行く末を見届けよう。『新しい自分』が見つかるまで。それが僕のすべきことだと思うから。

とにかく、初仕事は終わった。これからも頑張ろう。できる範囲内で。

☆♪◇

「ふう……」

僕は机にペンを置いて息を吐く。プロデューサーという仕事に就いたのを機に、活動記録なるものを書こうと決めたのだ。まあ、おそらく最初の方だけだと思うが。

「にしても、面白い人だったなあ。あんな目見たことないや」

新田さんの目は今まで見たことのないような、強い意志のこもったものだった。あんな目ができるのは、そうそういない。

「ふあゝあ……。そろそろ寝るかな……」

欠伸をして目をこすりながら寝床へ向かう。横になり寝ようとした時だった。軽快な音楽が控えめな音量で鳴る。

「着信音………?」

起き上がって机に置いてある携帯を見ると、そこにはメールの通知が一件あった。差出人は、新田美波さんだった。

なぜこの時間に送ってきたのか不思議に思い、メールを開く。

『From 新田美波

To 蒼崎弘弥

件名 よろしくお願いします。

今回のプロジェクトに参加させていただきありがとうございます。これから頑張りますので、何卒宜しくお願いします。』

と、丁寧な文で送られてきた。

「敬語はあんまり使わなくてもいいんだけどなあ……」

僕はそう呟きつつ文字を打っていく。そして出来上がった文章が、

『From 蒼崎弘弥

To 新田美波

件名 Re : よろしくお願いします。

いえいえ、こちらこそ新人ですが、宜しくお願いします。それともっとフランクに接してもらって構いませんよ。敬語もなしでいいですよ。』

こうなった。僕は迷うことなく送信のボタンを押す。敬語は他人行儀みたく思えて嫌だし、それに僕は敬語が使い慣れていないからタメ口の方が話しやすい。

返信が返ってくるだろうと思い、適当にスマホをいじって時間を潰す。すると、着信音が響く。すぐさまメールを開くと、

『From 新田美波

To 蒼崎弘弥

件名 Re : Re : よろしくお願いします

そんなことできませんよ！蒼崎さん年上なんですし無理です！蒼崎さんこそ、敬語は無しでも大丈夫ですの。』

「うむ、一筋縄ではいかないな……」

スマホの画面を睨みながら唸る。唸ること数十秒、書くことが決まったので打ち始める。

本文には、敬語を使われるのは苦手なので、と簡潔に終わらせて返信する。すると今度はすぐに返信が来た。

『分かりました。次からそうさせてもらいますね。では、おやすみなさいです』

というものだった。僕はすぐに、はい、おやすみなさい、と打って返信し、スマホの画面を切る。

「今度こそ寝よう……」

人生初の仕事を終えて、僕は心地よい眠りにつくのだった。

顔合わせは徐々にハードなものになっています。

カーテンの隙間から差し込む光、少し肌寒いが徐々に春が近づいているのが感じ取れる。

だが、それにもかかわらず部屋の中ではけたましいアラームが鳴り響く。

「んん……………」

僕は身をよじり、布団にくるまる。だが、鳴り止むことのないアラームに苛立ち、目の前にあるスマホの電源を落とし、目を瞑る。

やがて心地よい眠気が襲ってきて、

「いつまで寝てるの!?!早く起きなさい!」

甲高い怒声によって阻まれる。十中八九母さんである。

「あんた今何時だと思ってるの!?!早く起きなさい」

「……………ヤダ」

「ヤダ、じゃないわよ!もう八時なのよ!?!一限に遅れるわよ!」

……………今なんと言った?八時、八時と言ったのか?おいおい、ちよつと待ってくれ。ならなゼアラームはさつきなっていたのか。推測できる答えは一つ。一時間ほどなり続

けていたのだろう。

「やばい、遅刻するっ!!」

「早く支度しなさい! ご飯も用意してあるから」

この後、大急ぎで支度したことによって一限にはなんとか間に合った。この時ほど、母親という存在に感謝しきれなかったことはない。

☆♪♡◇

午前中のうちに、今日受ける授業が終了した僕は、以前のように家へと直行するのではなく、ある場所へと向かう。ある場所とは、346プロの近くにある駅だ。そこで待ち合わせをしているのだ。新規プロジェクトに採用された新人達とね。

「えっと、今回は前説明してなかったから新田さんに今回初めて会うアナスタシアさん、前川さんに神崎さん、あとは緒方さんかな」

新田さんは前回あった時に説明していない部分があったので、今回ちようどいいと思っ呼んだのだ。その他の人たちは、僕も初対面である。

アナスタシアさん。北海道から来るのだが、果たして駅前で良かったのだろうか。あちらがそれで了承したのだからどうとも言えないのだが。ちなみに日本人とロシア人

のハーフである。

前川みくさん。大阪から来るのだが、こちらも待ち合わせ場所が間違っている気がするのだ。決めた後で思った。空港にした方が良かったのではないかと。資料に書いてあるのを見る限り、この子は高校生だろう。多分。

神崎蘭子さん。こちらは熊本からお越しだ。本当に申し訳ない気持ちでいっぱいである。あの時の僕はバカだったんだろう。……そうなるも今もバカということになるのだが。神崎さんは、中学生？ だろうか。写真からはそんな雰囲気は感じないが。

そして最後、緒方智絵里さん。三重県からお越しのようです。重ね重ね申し訳ありません。僕がバカでした。この子は、写真から判断するにおっとりとした感じの子だろうか。まあ会ってみなくちゃわからないけどね。

一通り資料を読み終えて手持ち無沙汰になる。今朝、ドタバタしていたせいでスマホの充電を忘れていたため、現在電池が20%まで着々と減りつつあるので無駄なことに使うのはやめた。電池が切れて、いざという時に使えません、じゃどうにもならないからね。

「武内さんから励ましの言葉もらったけど、不安そうな声で『頑張ってください』と言われてもなあ……」

こっぴちが心配になってくるからねそう言い方。おかげでまた緊張してきた。

「僕に気づいてくれるとありがたいんだけど。スーツも着てきたんだし、分かるよね」  
ちなみに、新田さんと対面を果たしてから一週間が経っている。スーツを大急ぎで見繕ってもらい、必要そうなものは揃えておいた。その間の勉強は欠かさない。単位を落とすわけにはいかないからね。

適当に空を眺めていると、控えめな声で声をかけられる。

「あ、あの……………」

「ん？」

そこを見ると、ツインテールでスカートの裾をつかんでいる少女がいた。

「え、えつと…………プロデューサー、さん…………ですか？」

「ということは、君は今回採用された…………緒方智絵里さんかな？」

「は、はい……………」

資料の写真にあつた通りの容姿だったから、良かった。資料を事前に読んでその内容を覚えておいた僕ナイス！ここで役に立つとは思わなかった。

「きよ、今日は…………よろしく、お願い…………し、します……………」

「よろしくお願ひします。そんなにかたくならなくて大丈夫ですよ」

「は、はい……………」

と言いつつガチガチである。まあ気持ちは分からなくはないんだけど。なんという



かその、愛でたくなつた。例えば、頭撫でたりとか。まあしないけど。

「お待たせしまし……た………？」

ここで、唯一の知り合いである新田さん登場。だが、何かおかしい。僕と緒方さんを見るなり固まる。主に僕を凝視して。

「スーツなんだね……」

「え、それが何か？」

びっくりしたかのように言う新田さんに聞き返す。僕がスーツじゃいけないのだからか？ちなみに、以前メールをした時に双方敬語はなしということ合意したため、タメ口だ。

「ううん、なんでもないよ。ただ……似合ってるなあつて」

「え？なんて？」

最後の方が聞こえなかつたので、聞き直すとなんでもないと言ひ返される。隣にいる緒方さんも小首を傾げている。

「そういえば、他の人は？」

「まだ来てない。そろそろ待ち合わせ時間なんだけど」

「あ、あれじゃないかな？」

新田さんはどこかを指差す。そこには三人の少女がこつちに歩いてきていた。何か

話しているが。

だが、新田さんの読みは当たっている。あの三人は、アナスタシアさん、前川さん、神崎さんだろう。あ、こっち見た。

こっちを見た瞬間、ハツとしてこちらに走ってくる。別に走ってこなくてもいいのに。

「お、お待たせしましたにゃ!」

にゃ……………?

「『こんにちは』こん、にちわです」

んん? 最初らへんのはロシア語かな?

「現世に舞い降りた翼! (お待たせしました!)」

ごめん、ちょっと分かんないかな。

アナスタシアさんはまあハーフだから問題ないとして、前川さんは……キャラが立っている。だが、神崎さんは中二病キャラかな? 僕にもそういう時代があったからだろうか、勝手に脳内で言葉が変換されていく。うーむ、悲しいかな。ちゃんと治ったと思うんだけどなあ、あの忌々しい病気。

「どうかしましたかにゃ?」

「どうしました?」

「どうした『瞳』の持ち主よ（どうしたんですか？）」

「いや、なんでもないです」

ただキヤラが濃いなあ、と思っただけですよ。とりあえずここを移動しなければ……。

そう思った矢先に肩を叩かれる。誰かと思つて振り返ると、そこには笑顔の警官さん。あれえ？嫌な予感しかしらないぞお？

「君、こんなところで何してるのかな？」

「えっと、仕事の待ち合わせで」

「取り敢えず署まで来て「三十六計逃げるに如かず!!」ちよつと君！待ちなさい！」

身内に言われたことがある。困ったことがあつて、それが面倒くさそうなら、取り敢えず逃げる、と。

僕は体力がなさそうな緒方さんと、走りにくそうな神崎さんを脇に抱えて走り出した。新田さん、アナスタシアさん、前川さんにはアイコンタクトして逃げるということを伝えた。……伝わってるよね？

次からは、待ち合わせ場所をあまり目立たないところにしようとして心に決めたのだつた。



「つ、疲れた……………」

なんとか346プロのシンデレラプロジェクトの事務所に入り、膝に手をつく。さすがに二人を担ぎ上げて全速力はきついものがある。僕は万年文化系なのだ。運動はあまり得意な方ではない。

「えっと、あれって逃げて良かったの?」

前川さんがそう聞いてくるが、そんなの答えは分かり切ってるだろう。

「そんなのダメに決まってるじゃないですか」

「な、ならどうして……………」

まだ困惑しているのか、緒方さんが恐る恐る聞いてくる。どうして?それを聞くのは愚の骨頂というものだ。

「面倒事は極力避けたかったんです。その理由ではダメですか?」

「あ、いえ……………」

一同が困惑する中、僕に羨望の眼差しを送る人物が一人いた。

「あなたは、サムライ……………ですか……………」

「へ?」

「あなたはあの有名なサムライなんですか!？」

ひどく興奮している様子のアナスタシアさん。どうしよう、僕は言われようもない誤解を受けている気がする。

「僕は侍じゃ……」

「いえ!あの力強さ、そしてあれだけ走つたのに疲れていない様子。そして、自分の意思を曲げない強さ。やはりサムライはいたんですね!」

勘違いも甚だしいなあ。あれは火事場の馬鹿力というものだし、あと疲れていない訳ではない。普通に疲れているが、息切れをしていないからだろうか。流星にそれで侍と言われるのは、昔を生きて死んでいったお侍さんたちに失礼である。

「だから、僕はそんなんじや「日本に侍がいて、カンゲキです!」……:」

目をキラキラさせて思いにふけるアナスタシアさん。それを見るとこう思つてしまった。

もうなんでもいいや、と。

「取り敢えず、皆さん座つてください。自己紹介を兼ねて、本プロジェクトの説明などもやりますので」

諦めたかのように言う僕。諦めも肝心、だよな。



「ーという事になります、何か質問はありますか？」

「ないにや」

『いいえ』ニエツト「ないです」

「ふふ、我にそんなもの必要ではない（ないです）」

「ない、です……」

「あの、少しいいかな？」

前川さん達は質問がないのに対して、新田さんは手を上げる。

「何かな？」

「えっと、その『欠員』ってどういう事なのかなって思つて」

なるほど、その事ね。確か武内さんからの話によると、

「オーディションなんかにかかってた人たちがそれを辞退して、三人だけ枠が空いてしまったんだよね。今、武内さんがなんとかして思うから大丈夫だと思ふよ」

「ちよつと待つにや。じゃあ、その三人が見つからなければどうなるのにや？」

「うーん、最悪見つかるまで待機つて事になりますかね。まあ兎にも角にも、今決まつている人たち全員に説明はしていかなきゃなりません」

「了解にゃ」

これにて説明は終了だ。だが、どうしようか、思ったより早く終わってしまったため、時間が空いてしまった。やる事がないし……………どうしよう。

「どうした？ 『瞳』の持ち主よ（どうしたんですか？ プロデューサーさん）」

「……………いや、思ったほど時間が空いてしまって、どうしようかと」

「あ、あの……………」

僕がそう言うと、緒方さんが控えめに手を挙げる。

「どうかしました？」

「えっと……………レッスンス室とか見れますか……………？あと、敬語は無しでも構いません……………」

なるほど、レッスンス室など見せてプロダクションを探検するというのもいいかもしれない。実際、僕も把握していない部分があるからね。てかさ、なんで僕が敬語使わないほうがいいの？

「い、違和感がある、からです……………」

「お願い、心読まないで」

確かに使い慣れてないけどさ、体裁上は使わないといけない訳で……………。

「智絵里ちゃんに同意にゃ」

「我も同じ故（同意です）」

「『はい』<sup>ダ</sup>それがいい、ですね」

「みんなもこう言ってることだし、敬語やめたら？」

他の人達もそれに同意のようで、緒方さんの提案に同意する。新田さんは新田さんで僕に微笑んでそう言ってくるし。でも、ここで退ける訳が——。

「ならこうしましょう。敬語をやめてくれたら、アナスタシアさんに侍じやないと説明しましょう」

「アナスタシアではなく、アーニヤ、と呼んでください」

新田さんからの提案はありがたい。ありがたいのだが、相手を敬うというのは大事だと——

「もしやめないなら、私達も『侍』と呼ぶことにします」

「即効でやめさせてもらおう」

諦めも肝心、ではなく引き際も肝心である。これから新人のアイドルの皆さんに『お侍さん』と呼ばれた時には、おそらく死を免れない。精神的にも、社会的にも。

「それじゃあ、まずはレッスン室に行きま……行くか？」

「はい！」「は、はい！」「はいにゃ！」「承諾した！（はい！）」「『はい』<sup>ダ</sup>」

どうしてここまでバラバラなのだろう。この先が不安になるよ。





さて、そんなこんなでやって来ましたレッスン室。誰も使っていないといいんだけど。「お邪魔しまーす……………」

恐る恐る扉を開き、そーつと中を覗く。するとそこには誰もいなかった。ほつと胸を撫で下ろし、部屋に突入する。

だが、僕はここで後悔する。部屋の隅々まで確認しなかったことを。

「おっ・新人さんじゃん」

部屋の隅の方から聞こえてくる活発な声。そこを見ると、ピンク色の髪の毛のいかにもギャルという女子がいた。城ヶ崎美嘉さんだ。あらかじめ、武内さんの指摘によりプロダクションのアイドルの皆さんや、プロデューサーの皆さんには挨拶してあるので、この人は顔見知りだ。

だけど、うん、できれば会いたくなかったね。

「え、と……………城ヶ崎、さん？どうしてここに……………」

「どうしてって、今レッスン中だよ？ちようど、休憩時間入ったところ」

僕は右手で顔を覆う。ちゃんと確認しなかったのが運の尽きだろうか。最悪の展開である。

「んにゃ? 誰かいるの?」

後ろから聞こえる前川さんの不安そうな声。現在、僕が入り口のドアをふさいでるせいで他の人達には中の様子が見えていない。

「あれ? 誰か連れてんの?」

「……………」

「何その『面倒くさいけど説明しなきゃならないのか、でもそっちの方が面倒くさいなあ』って思ってたような顔は」

「……………」

「今はどうせ『なんでこの人僕の心読めるの?』とか思ってるんでしょ?」

どうして皆さんは読心術なんか取得しているのだろう。僕の心にプライバシーはないのだろうか。

「ないんじゃない?」

「訴えてもいいですか?」

「冗談冗談! からかい甲斐があるからついで」

ついでじゃないですよ。こっちもつい素が出るところだったよ。

「早く入ってくれにゃ!」

「あ、蒼崎君! 早く入って!」

「早く入れられよ、『瞳』の持ち主よ！（早く入ってください、プロデューサーさん！）」  
「ア、アナスタシアさん……お、押さないで………」

「押して、ダメなら、押してみろ、デス♪」

アナスタシアさん、それじゃあ全く意味がないよ。押してダメなのに押したらもつとダメだよ。

そして、アナスタシアさんが力一杯押すと、皆さんがなだれ込んできた。

「わぁ!?!」「きゃ!?!」「のわ!?!」

「……………へ?」

僕の上に。

「ゲボア!?!」

悲鳴とは程遠い声が僕の口から出る。女子は軽い。それはわかるのだが、流石に四人もの体重を合計して軽いとは言えるほど僕に力はない。

どっちかというとな非力な方だ。

「ぶ、あははははは！…どんな状況よこれ!」

城ヶ崎さんはこの状況が面白いのか、腹を抱えて笑っている。お願いだから笑わない

で助けてほしい。

「たす、けて……………」

今出せる力を振り絞り、声を出す。それに気づいたのか、新田さんたちが急いで僕の上から退く。

「す、すみません……………！」

「ごめんなさい！」

「すまない！（ごめんなさい！）」

「ごめんなさい！大丈夫!？」

「なん、とか……………」

今回の件で、少しは筋トレでもしようかと思った。じゃないとこういう事態に対応できなくなる。

え？じゃあ何で序盤で女子二人抱えて逃げられたかだつて？僕だつてわからない。最初に言った通り、あれは火事場の馬鹿力だ。多分だけど。

「あら？何か大きな音がしたと思つたら新人君じゃない」

「わあ、新人さんだ」

その大きな音に気づいたのか、他の人達も反応する。川島瑞樹さんと十時愛梨さんだ。

「あの、呼び方……。ていうか以前、自己紹介しましたよね僕？」

「ええ、したわよ。確か……………」

「えくと……………」

「あはは……………」

川島さん、十時さん、城ヶ崎さんは三人揃って僕から目をそらす。ああ、そういうことか。

「……………いいんですよ。僕は陰が薄いたただの凡人ですから。忘れられて当然なんですよ」

僕は蹲り、床にのの字を書く。別に落ち込んだり不貞腐れたりしてるわけじゃないんだからね！（涙目）

「ごめんなさいって！」

「からかい甲斐があるからついで！」

「落ち込まないでって！」

「でも忘れてるんでしよう？」

「……………」

僕の言葉に詰まる三人。いいんだ、僕そういうのに慣れてるから。べ、別に泣いてなんてないもんね！（泣）

「あの、Pちゃん。この人達は？いや、知ってるけど」

前川さんが尋ねてくる。で、その『Pちゃん』って何？それ僕の事？

僕は立ち上がり、咳払いをして言う。

「多分みんなも知ってると思うけど、一応紹介しておくよ。この人達は、346プロの先輩アルドルである城ヶ崎美嘉さん、川島瑞樹さん、十時愛梨さんです」

僕がそう言うのと五人が固まる。というか部屋に入って、僕の上から退いていた時から固まっていた。で、硬直が解けた顔思うと、

「ほ、本物のアイドルにやあー！」

「スゴイ、です!!」

「夢、みたい……………」

「神々の奇跡! (すごいです!）」

「信じられない……………」

感嘆の声を上げる。どうやら少しの間は、興奮が冷めない様子。まあ君達もアイドルになるんだだけどね。

そして、自分の後輩だと知った城ヶ崎さん達も笑いながら五人と話す。僕はその光景を入り口付近から見て、落ち着くまで待った。

この状況が落ち着くまで、三時間も費やしてつい寝ていたところを、城ヶ崎さんのイ

タブラで起こされ、また一騒動あつたのはまた別の話。



### 蒼崎弘弥活動記録②

今日は、新田さんを合わせた五人と顔合わせかつ、本プロジェクトの説明を行った。  
前川みく。彼女は、常時語尾がネコ語？だが、おそらく誰かを引っ張っていけるような人になるだろう。

神崎蘭子。彼女は……、まあいい子なのは間違いない。しっかりとした信念を持っている。言葉遣いは、まあ目を瞑るとしよう。

アナスタシア。もう少し落ち着いて行動してほしい。だが、彼女もまた魅力的だ。他の子にない魅力を持っている気がした。

緒方智絵里。極度の人見知りだが、それを乗り越えればおそらくもつと輝けるはずだ。

今日あつた子達は、全員根はいい子だし、それに磨けば輝ける原石だ。

まだ会っていない子達もどんな輝きを秘めている原石なのか、期待することにしよう。

デスクワークは意外に疲れるものです。

麗らかな日差し、眠気を誘う暖かい気温という中で僕はホクホク顔で街を歩いていた。

何故僕がこんな顔をしているのか。学生ならば誰もが共感するであろう事実があった。

今は、春休み。学生なら待ち憧れる長期休暇である。まあ、二週間ぐらいだけど。でも、僕にとっては二週間でも好都合なのだ。

「~~~~~♪」

鼻歌を歌いながらある場所へと向かう。

そうしているうちに目的地が見えてくる。346プロダ。

「早く仕事に慣れないとね」

僕は、気合いを入れて仕事に向かう。さて、今日も頑張りますか。

☆♪◇  
♡◇



「ええつと、ここはこうで……ここはこうで……」

僕は人生初のデスクワークをしていた。パソコンを普段あまり使わないためか、タイピング速度も遅ければ、資料をまとめるのも遅い。

武内さんに「まずは慣れるところから始めてください」と言われたので、説明書などを見ながら淡々と資料をまとめていく。うん、これなら慣れるのにそう時間はかからないね。

「うーん、ちよつと休憩」

背もたれにもたれかかり、大きく伸びをする。気づけば、デスクワークを開始してから二時間が経過していた。スーツなので座っていても結構疲れる。

「ああ……疲れた……」

集中が切れたわけではないのだが、さすがに少し気分転換がしたい。

「飲み物買いに行こうかな」

僕は椅子から立ち上がり、部屋を出て自動販売機のもとにたどり着く。

この自動販売機は品揃えが豊富で、飲みたいものが手に入りやすい。その中で、僕はエナジードリンク、通称エナドリを買う。千川さんに以前から仕事している時には飲んでおいたほうがいい、と言われたからだ。

「これ美味しいのかな……？」

ちなみに飲んだことなど一度もない。缶を開けて一口飲んでみると、口の中でシュワッと炭酸のような感じがした。味は柑橘系だ。素直に感想を言えば、普通に美味しい。僕は一気にそれを煽る。

するとすぐに中身がなくなる。飲みやすく、美味しく、そして目が覚める。三拍子揃ったいい飲み物である。

「今度もこれ買うかな……」

缶を捨てようとする、どこかから扉の開く音がした。気にすることはないと思っっていると、声が聞こえてきた。

「はあ、疲れたね」

「祝福の時間……（やつと休憩時間です……）」

「イイ汗、かきました」

「アーニヤちゃん……これ、使っているから、汗拭こう……う？」

「みんなだらしがないや！レッスンは基本中の基本！大事なことなの！疲れていたらダメなのや！」

声から判断するに、昨日会った子達だろう。だが、別段話すこともないためそそくさと与えられた事務室に退散しようとする、

「あ、ぶ、プロデューサーさん」

気づかれた。気付いて欲しくなかったのに。このまま退散して仕事に集中しようかなあつて思つてたのに……。

「……何にやその顔は？」

「……………別に」

ただ気づいて欲しくなかっただけですよ？

「そういやみんなは何してるの？ レッスン？」

「うん。初めてだから結構苦戦してて」

苦笑いを浮かべながら新田さんは言った。五人は全員息を切らしているため、相当頑張っているのだろう。

なら僕も頑張らなくては。年下の子達が頑張っているというのに、年上の僕が頑張っていないとなると示しがつかない。というか僕のプライドが許さない。

え？ 凡人にプライドなんかあるのかって？ 踏んで蹴つて犬に食われる程度のものならあるけど。つて自分で思つてて悲しくなってきた。

「そうなんだ。頑張り過ぎて無理して体壊さないように。それじゃあ、頑張つてね」

僕は笑顔でそう言つて去ろうとする。うん、これなら自然にここから退散できる。

と、僕は思つていた。

「そうだ。レッスン見ていかない？」

「はーっ」



「よし、それじゃあ基本のステップいくぞ」

「「「「はい！」「」」」」

どうやら全員かなりやる気があるらしい。返事に気迫が感じられる。

「はい、ワン、ツー、スリー、フォーって緒方ずれてるぞ。しっかりついていけ。新田は固くなりすぎだ。もつと肩の力を抜け。前川、テンポを合わせろ。アナスタシアはアレンジを入れずにちゃんとやれ。神崎、お前はキレがないぞ」

「「「「はい！！」「」」」」

でも、ミスが目立つ。まあ素人だから仕方がないよね。けれど、彼女たちにはいつもとは違う何かがあった。

「……………」

僕にはもちろんない、そして今まで知り合った女子にはない『何か』がそこにはあった。僕はそれに魅せられたのか、無言で見入っていた。

それからどれくらい時間が経ったのだろう。気づけば、外は橙色に染まっていた。

「今日のレッスンは終了だ。お疲れさん。ストレッチはきっちりやっておけよ、以上！」  
「はい！ありがとうございます！」

新田さん達はトレーナーさんにお辞儀をしてストレッチへと移る。僕はレッスンが終わったのを確認して、レッスン室を出ようとするとトレーナーさんに呼び止められる。

「おい、そのあんた」

「……僕ですか？」

「ああ、あんただ。この子達のプロデューサーだよな？」

「ええ、まあ……。って申し遅れました、蒼崎弘弥といます」

「よろしく。私はトレーナーの青木忍だ」  
あおきしのぶ

トレーナーの青木さんとの自己紹介を終えると、樋代さんが真面目な顔で言った。

「あの子達を見てどう思った？」

「……………へ？」

「私はこういう立場の人間だからな。多くのアイドル達をレッスンしてきた。だから、あまりそういうのを見たことがない奴の感想を聞きたかったんだよ。で、どうだ？あの子達は」

青木さんは僕を横目で見ながらそう言う。どうだ？と言われても僕にだって分から

ない。というより言葉にできない。

確かに僕はこういうのは見たことがないし、さっきまであの子達のレッスンしている姿を見入っていた。だけど、なぜ見入ったのかは分からない。

ただ、言葉にできることを強いて言うなら、

「普通の子達にはない、『何か』が感じられました」

「ほお？その『何か』とは？」

「……………分かりません。僕にもそれはよく分からなくて」

僕がそう言うと、顎に手を当て考える素振りをする青木さん。なんでか笑っているような気がするけど、気の所為かな？

「お前は他の奴らとは違ったものを感じ取ったんだな」

「……………どういふことですか？」

「他のプロデューサー共はレッスンを見たところでも感じていない。どうだったか？と聞いても、返ってくるのは『将来有望』だとか『成功する』だとかその子達をちゃんと見てすらいない」

青木さんはさつき見せた微笑みのような顔ではなく、眉間に少ししわを寄せている。その子達の運命を変えた身としては、樋代さんの的にも気づいて欲しいものがあつたのかな？

「だけど、あんたは違った。まあ『何か』と曖昧だが、違う答えが聞けて私は満足だ」  
「はあ……」

「とりあえず、こっちは任せてくれ。あの原石を磨くのは私たちの仕事だ」

ニツと笑って僕の肩を叩く青木さん。その笑った顔は、口調からは感じられない優しいものだった。率直に言うところ可愛い。まあ口には出さないけど。

「よろしくお願いします」

「だが、磨いた後、輝かせるのはお前だ。それだけは忘れるなよ」

「肝に銘じておきます」

僕はそう釘を刺されてからレッスンスム室を出た。そしてあることを忘れていたことに気づく。

「あ、仕事……」

良いものは見れたけど、今からは地獄を見そうだよ……。



「もう……無理……」

僕は机に突っ伏した。残っている仕事に取り掛かって早2時間、終わる気配が一向に

しない。最初の浮かれた気分は何処へやら。今は逃げ出したい気分です。

「効率が悪いのかな……?」

ようやく慣れ始めてきたとはいえ、やはり操作やタイピング速度が仕事の進行を阻害している。こればかりはマスターしないとどうしようもないんだけどね……。

「春休み早々、幸先悪いなあ……」

などとぼやいていると、目の前にあるドアがコンコンとノックされる。今の時刻は6時過ぎ。誰かが来るとしても武内さんか、せんく……ちひろさんの二人しかないのだから。あの二人、ノックなんてたまにしかしないからなあ……。

「はい、どうぞ」

と、適当に入ることを許可する。まあ誰が来るかは予想は出来てるけど。

「お兄ちゃん、様子見に来たよ」

入ってきたのは、僕の5つ下の妹、花梨かりんだった。

予想外すぎる。まさかのここで身内が出てくるとか、てかどうしてここに!?

僕はあまりのことに椅子から滑り落ちる。その際、全身を強打する。痛い、物凄く痛い。だけど今の状況の方が痛みより重大なことだ。

外は暗くなり始めている。なのにどうして僕の妹なんかこんなところにいるのだろうか。



「どうしたのお兄ちゃん？そんな盛大にこけて」

「どうしたはこっちのセリフだよ！どうしてここにいるのさ!？」

僕は息を荒げて言う。それもそうだろう。いきなり予想だにしない人が僕の目の前に現れたのだから。

「お兄ちゃん観察日記5冊目を書き……お兄ちゃんの様子見に来たの」

もう何もかも手遅れだよ。言い直そうとしてたけど遅すぎるよ。言っちゃいけないこと、さらつと言っちゃってるよ。

てか何、その『お兄ちゃん観察日記』って？しかも5冊目って言わなかった？まさかそんなものが4冊もあるの？

「それはともかく、どうして帰りがこんなに遅いの？お母さん心配してたよ?」

花梨が怒ったような口調で言った。そうか、心配かけさせちゃってるのか。なら、今日は仕事を早めに切り上げて

「サボってるんじゃないかって」

前言撤回。今日は遅く帰ってやる。

人が悪戦苦闘しているときになんていう心配かけされてくれてるんだ。僕はがっかりだよ。

「じゃあこう言つといてよ。今日の分の仕事が終わったら帰るって。少し遅くなるかも

「だけど」

「あ、いいよ。終わるまで待つから」

「なんで？」

花梨が待つとは珍しい。だけど、絶対に何か裏がある。この妹はそういうやつだ。

僕がなんでと聞くと、なぜか嬉しいような悲しいような表情を浮かべて、

「この人たちに捕まって……」

花梨が指差した所、ドアの近くを見てみると、そこには隠れようとしてあまり隠れきれない五人の姿があった。そう、シンデレラプロジェクトの子達だ。

「……………何やってるのそんな所で」

僕が呆れた声をかけると、五人は隠れて返事もしない。どういうことだろう？ 訳がわからない。

「じゃあ、事務所の中で待つてるから。終わったたら来てね〜」

そう言って出て行く花梨。さすがに長い間待たせるのは悪いから早めに終わらせられるように努力しよう。

そう決意して椅子に座ると、何やら楽しげな声が聞こえてきた。

『花梨ちゃんとPチャンって本当に兄妹なんだ』

『勿論です。私達の兄妹愛は誰にも負けませんよ！』

僕の執務室は、事務所と併設しており、目の前のドアを開けると事務所になっているのだ。なので、事務所で話していることがある程度の音量だと普通に聞こえてくるのだ。

結構あの五人とは打ち解けているようだ。多分、ここに来るまでに幾つか話でもしたのでろう。でも、何言っちゃってるんですかねあの子。そんな恥ずかしいこと堂々と言うかな普通。

『なら蒼崎君のこと、いろいろ知ってるんだ』

『ええ勿論です。個人情報から過去にあつた細かな失敗まで全て把握しています』

あれ？このままいくと、有る事無い事話されそうな気がするんだけど……流石に気のせいだよね！つと、そんな事より仕事仕事……。

『あ、メアド交換してもらえますか？未来のアイドルさんとお友達になりたいです！』

『いい、ですよ』

『くくく……我が鴉の行方を求めるか……。よかろう、ならば汝に教えてやろう！（メアドアドレスですか？是非お願いします！）』

賑やかそうに話しているのを聞いて、僕の心も和む。和みながらもキーボードを打つ手は止めない。僕はその後も賑やかな話し声を聞きながら仕事を進めていった。

仕事が終わりにかけた時に、花梨に盛大な爆弾黒歴史を落とされて、手元が狂って打ち終わっていた資料内容を一部消去してしまい、泣く泣く削除した所を打ち直したのは別の話。

☆♪◇

### 蒼崎弘弥活動記録③

春休みに入って初めてのデスクワークだった。慣れるのは大変そうだが、これはプロデューサーとして必要な事だと思う。明日からも頑張らなくては。

あと、今日はレッスンを見た。あの時の彼女達は、どうしても言葉にできない『何か』があった。それが何なのかは今考えても分からない。まあそのうち分かるだろう。

さて、明日は二回目の顔合わせだ。あとの六人を一斉にする。どんな子達なのか楽しみだ。

## 二回目の顔合わせも波乱の幕開けです。

妹により爆弾を投下されて、それにより最後の資料のデータがご臨終したため、泣く泣くやり直した翌日、僕は346プロの敷地内の入り口にいた。

何故こんなところに立っているのか不思議に思うだろう。だけど、理由はいたって単純なのだ。

「さて、そろそろ時間なんだけど………」

そう、今日は顔合わせ最終日である。ようやく初めて任された仕事が終わるのだ。どうしてだろう、やる前から達成感に満ち溢れているんだけど。

なんかこう、今の僕ならなんでもできるって気がする。……まあ、気がするだけであつて、実際にできるかどうかなんて決まっている。え？どつちかつて？勿論できないに決まっているじゃん。

そんなことを思っているうちに、約束の時刻である十四時を過ぎた。だが、誰も訪れる気配がしない。

あらかじめ、業務用のメールアドレスでメールを送っているはずなのだけだ。

送信履歴を確認すると、そこにははっきりと『集合時間は十四時でお願いします』と

書いてある。なのに何故だろう。誰一人として来ない。

「ま、まあ、遅刻なんて誰にでもあることだよねうん」

腕を組んで勝手に自己完結する。失敗しない人間なんてこの世にいないんだから。

僕はとりあえず来るまでここで待つことにしよう。

☆♪◇

「来ない……………」

時刻は現在十五時三十分。一時間半待った結果は、誰一人として来ず。僕は何ですか？ 虐められてるんですか？ 新人プロデューサー言うことなんて聞いてられないから無視しようという新手の虐めですか？

……………泣いていいかな。

「346プロまでの行き方も、メールに添付して送ったし、迷子とかの心配は必要ないと思うけど」

にしても遅すぎやしないだろうか？ というか、顔合わせでうまくいったのが、新田さんとのマンツーマンしかないんだけど……。

不安になり、辺りを見回していた時だった。軽快な機械音が、スーツのポケットから

鳴り響いた。

「メール……?」

メールの着信音? 一体誰から……?

と不思議に思いながら開くと、送り主が『三村かな子』となっていた。この子は今日の顔合わせするうちの一人でもある。

メールの文面はこうだった。

『プロダクションの前までは来たんですけど、入り口のところに怪しいスーツの男の人がいて通れないんですけど、どうしたらいいでしょうか?』

入り口にスーツの怪しい男? そんな奴いるわけない。だってここにいるのは僕だ、け………。

あれ? もしかして、その『怪しいスーツの男』って僕?

……まずい、どうにかして怪しいという認識を変えなくては。僕が大学生プロデューサーから怪しいスーツの男へとジョブチェンジしてしまう!

と焦りつつ、急いで誤解だとメールの文面を打ち込み、三村さんに返信する。

すると、帰ってきたのは返信ではなく、路地裏から聞こえてきた女の子達の驚愕した声だった。ていうかそこにいたのね……。

兎にも角にも、顔合わせの始まりだ。今回こそ、問題を極力起こさず、完全無欠に成

功させなくては。

☆♪◇

場所は変わって事務所内。僕らは備え付けられたソファに腰をかけていた。

「まずは自己紹介を。僕は、皆さんの参加する『シンデレラプロジェクト』のプロデューサーの一人を務めさせていただいている蒼崎弘弥です。先月なつたばかりの新人で至らない点もあると思いますが、よろしく願います」

僕は軽めの自己紹介を済ませる。初対面の人に最初にするここと言ったら、やっぱり自己紹介だろう。多分。

「皆さんのことは、このプロジェクトのもう一人のプロデューサーから伺っています。本日はお忙しい中、時間を割いて頂きありがとうございます」

僕は堅苦しい挨拶を終え、少しだけ肩に入っている力を抜く。適度な緊張感は大切だが、し過ぎると悪いものでしかない。

だが、慣れてきた僕に比べると、目の前の三人は少しばかり緊張しているように見える。

緊張しているのは、多田李衣菜さん、諸星きらりさん、三村かな子さんの三人だ。他





「と、とりあえず、説明を始めますので……」

この後、双葉さんには起きてもらい、説明を聞いてもらった。一人だけに楽しさせるわけにはいかなからね。



「——以上がプロジェクトの概要になりますが、何か質問などはありますか？」

難なく説明を終える。案外こっちは慣れるのが早かったからだと思ふ。

「いえ、問題ありません」

「みりあも問題ない！」

「私も——」

「質問なんてないよ。まあそっちの方がロックな気がするし」

「プロジェクト、楽しそうだし」

「面倒くさ……」

個性豊かなメンバーなこと。返答もバラバラである。このプロジェクトの子達まとめるの大変そうだな。ま、それが僕らの仕事なんだけどね。

「あ、そうだ！お姉ちゃんに会いたいんだけど、どこにいるか知らない？」

城ヶ崎さんがそう言うが、さすがに違う部署の子達のスケジュールまでは把握しては  
いない。というより、その願いは個人的にも却下したい。

城ヶ崎美嘉さんは、別に悪い人ではない。だが、必要以上に僕を弄ってくるのだ。最  
初に会った時なんて、まるで新しいおもちゃをもらったかのような目をしてたよあ  
の  
人。

そういうわけで、城ヶ崎さんのお願いを聞くことはできない。

「すみません、流石に違う部署の人たちのスケジュールまでは把握してませんので」

「なんだ、残念」

「じゃあじゃあ！」

僕の言葉に肩を落とす城ヶ崎さん。そのすぐ後に元気良く手を挙げる赤城さん。

「このプロジェクトの他の人達と会えますか？」

その質問に答えるとすると、答えはYesだ。確か、この時間は基礎トレーニングで  
レッスン室にいるはずだ。そこに行けば、顔合わせぐらいなら可能だろう。

でも何故だろう。今、無性にレッスン室に行きたくない。嫌な予感がする。というよ  
り、嫌な予感しかしない。

「……………」

「……………何その『いる場所は知ってるけど、教えたら面倒くさそうだな』みたいなこと考

「えてる顔は？」

双葉さん、お願いです。考えてること読まないでください。

「顔に出てるから分かりやすい」

どうして一言も喋っていないのに会話が成立するのかな？というか、読心術会得してる人多すぎでしょ。何してんの346プロ。

兎も角、双葉さんに考えを読まれてしまったため、レッスン室まで案内するしかない。僕はため息を吐き、立ち上がった。

「他の皆さんがいる場所まで案内します。付いて来てください」

僕が歩き出すと、6人が付いてくる。願うしかあるまい。この後面倒な事が起きないことを。

☆♪◇

「失礼します」

レッスン室のドアを開けて入る。入ると聞こえてきたのは、トレーナーの青木さんの声ではなく、楽しく談笑する声だった。

「あれ、蒼崎君？どうしたの？」

新田さんがこちらに気付いたのだろうか。首を傾げながら尋ねてくる。まあ普通に気づくだろうね。

「新人君じゃん。どうしてここに？」

ピンク色の髪の女性、城ヶ崎美嘉さんがいた。

てかどうしてあなたがここにいるんですかね？

「お姉ちゃん！」

「え、莉嘉!」

城ヶ崎（妹）さんは、城ヶ崎（姉）さんに飛びつく。すると、城ヶ崎（妹）って面倒くさい。この際、城ヶ崎（姉）さんを美嘉さんにしよう。城ヶ崎さんは美嘉さんに頼ずりをし始める。

「ちよつと、どうして莉嘉がいるの？説明してくれるかな、蒼崎プロデューサー？」

ギロリとこちらを睨む美嘉さん。ちよつと、僕は何もしてませんよ？てか、名前覚えてるんならそつちで呼んでくださいよ。

「新規プロジェクトの顔合わせですよ」

「……ちよつと莉嘉？どうということ？」

「え、えーと……後で説明するね♪」

ペロッと可愛らしく舌を出して可愛げに言う城ヶ崎さんに相反して、美嘉さんは笑顔

なのだが、背後に修羅が見える。まあ気のせいだろう。そう思いたい。

「莉嘉、帰ったらお話ししようね」

「い、いやいいよ。別に話すことなんて「いいね?」……………はい」

目に涙を浮かべてうつむく城ヶ崎さん。おそらく、美嘉さんに話していなかったのだろう。こればかりは自己責任である。とことん怒られるしかない。

「それで、どうしてここに蒼崎君が来るの? 今日って確か、顔合わせのはずだったよね?」

「うん、そうなんだけど。赤城さんが他のメンバーに会いたいつて言うから連れてきたんだ」

「へえ、そうなんだ。それで、その子達って後ろにいる子達のこと?」

僕はそう言われて、6人を紹介しようと振り返る。そして言葉を失う。

「あんたは、どうして黙ってそういうことするかな?」

「うう……………ごめんなさい……………」

「あれって城ヶ崎美嘉だよな? あのカリスマギャルでアイドルの。初日から有名人に会えるとか、超ロツクじゃない!」

「杏ちゃーん! どこ行つたのー!」

「ふふふ、脱出成功。後は、逃げるのみ……………」

最早混沌、カオスである。どうしたら目を離れた一瞬の隙にこうなるのだろうか。まとも  
まりがない、とはこういうことなのだろう。

とりあえず、まだこの事態飲み込まれていない三村さんと赤城さんに紹介する。

「二人とも、紹介します。この5人がプロジェクトの今決まっている残りのメンバーで  
す」

僕がそう言うと、先ほどまでへばっていた新田さん以外の四人が立ち上がる。

「右から、神崎蘭子さん、アナスタシアさん、前川みくさん、緒方智絵里さん、そして新  
田美波さんです」

「ふふ、新たな光か……。ともに高みへ行こうではないか。（新しい人ですか。よろし  
くお願いしますね）」

「よろしく、お願いします」

「よろしくなのにな」

「よ、よろしく、お願いします……」

「よろしくね、二人とも」

「「よろしくお願いします！」」

笑顔で話しかける五人に、頭を下げる二人。うん、こういうのが普通の顔合わせだよ  
ね。こういうのがしたかったんだよね。

「ねえねえ、プロデューサー!」

「何ですか赤城さん?」

赤城さんが服の裾を引っ張ってくる。何かあるのだろうか?

「むうー、苗字じゃなくて名前で呼んでよー」

………は? What? Why?

他のこの場にいる6人を見ると、ポカンと口を開けていた。おそらく僕も同じ表情を  
してるねこれは。

「えつと、それはどうして………?」

「んー、なんとなく!」

いや、そんな元気に言われても。だいたい、僕が女子を名前で呼ぶなんてほとんどない。あつたとしても、それは妹や親友だけだ。

「でも……」

「いいんじゃないかしら」

決めかねていると、新田さんが微笑を浮かべて赤城さんの案に賛成する。

「え、どうして……」

「この際、みんなのことを名前で呼んだら? その方が親密になれると思うの」

「い、いやそんな「い、いい案だと思います」緒方さん!」



嘘でしょ!? 反対しそうだった緒方さんが、まさか賛成側に回るなんて……。

「わ、私はその、もつと仲良くなりたいたい、です……。その、プロデューサーさんと」  
健気だ……。だとしても、さすがに名前で呼ぶのは抵抗がー。

「ならこうしましょうか。アーニヤちゃんにした説明を撤回させてもらおう」  
説明とは何のことだろうか。この頃忙しすぎてあまり記憶にないのだけど。

「蒼崎君が『侍』ってことをね」

「分かった、名前で呼ぶからそれはやめて！」

新田さんは、小悪魔めいた微笑で僕を見ながら言った。いや、小悪魔じゃない。この子悪魔だ。人の黒歴史になりかけた一件をまだ引きずろうとしている。そしてそれを僕の前でちらつかせる。これで僕が抵抗できるか。否、できるわけがない。

「ふふ、それでいいの」

「策士にや」

前川さん、それは策士とは言わないよ。悪魔って言うんだよ。

「ミナミは凄いです」

凄いいんじゃないよ。元はと言えば、僕が黒歴史レベルのことをしたからなんだよ。

「あ、悪魔の囁きが……（）、怖い………」

うん、神崎さん。その反応が一番この中で正しいと思う。味方はこんなに身近なところ

ろにいたんだね。

「蘭子ちゃん、どうかしたの？」

「な、何でもありません!!」

だがそれも束の間、一瞬で相手側に回る。僕には味方はいないんだね……。

「あ！それと、敬語もいらないうー！」

赤城さんが楽しそうに言う。まあそれぐらいならいい。いいのだが、名前で呼ぶというのはやめていただきたい。主に僕の精神などの何かがおかしくなるからね。

でも、反論すれば黒歴史が……。

悩んだ末、僕が出した結論は、

「分かったよみりあちゃん」

提案を呑むだった。黒歴史は早めに封印して、記憶の奥底に放り投げておくほうがいい。

「うん！」

僕が呼ぶと、満開の笑顔で答える赤城さん、もといみりあちゃん。うーん、この笑顔が見られるなら抵抗を捨てた甲斐があつたつてもんだよ。

その笑顔に癒されていると、周りから六人の視線を感じる。恐る恐る見ると、そこには期待するような目で見える六人の姿があつた。

………僕にどうしろと？

この後、他の六人を名前で呼ぶまで開放されなかったのはまた別の話。「そっぴやみりあちゃん」が聞きたかったことって何だったんだろう……？」

☆♪♡◇

#### 蒼崎弘弥P活動記録④

今回の顔合わせは、初っ端から波乱の幕開けだった。

時間通りに集まらなかったり、僕が不審者に見られたりと散々だった。

双葉杏。正直言つて全くわからない子だが、これからの期待したい。というより仕事する気になって欲しい。

諸星きらり。長身だが、いいキャラをしており、非常に将来が楽しみな子だ。おそらく、彼女がプロジェクトのムードメーカーの一人になるだろう。

多田李衣菜。ロックと言っているが多分にわかだろう。でも、彼女なりに考えていることがあるのだつたらそれに賭けてみたいと思う。

城ヶ崎莉嘉。姉にアイドルになることを言っていなかったことを除けば、元気のいい

子である。が、姉の美嘉さんのようになって欲しくはないと思う。主に僕のために。

三村かな子。他の人達よりふくよかだが、それも個性だと思う。性格も温厚で、いい子だ。だが、食べ過ぎには注意して欲しいと思う。

赤城みりあ。この子によって確信した。僕は年下に逆らえないらしい。まあそれはいいとして、最年少なりにしつかりしており、あまり心配する必要はなさそうだ。

あと欠員である三人さえ揃えば、このプロジェクトは始動する。それまでに仕事に慣れ、プロデューサーらしくなっておかなくては。

笑顔が素敵なお少女に喜ばしい通知です。

桜の花が咲き誇り、麗らかなそして心地よい日差しが空から降り注がれる。少し肌寒い気温は、暖かく変化し、惰眠を貪るにはいい季節になったと思う。

今は四月。僕こと、蒼崎弘弥がプロデューサーになってから一ヶ月弱経つ。今では、デスクワークにも慣れてきて、武内さんからシンデレラプロジェクトの子たちの面倒まで任された身だ。

最初はどうなることかと思ったけど、これが意外にどうにかなるもので、なんとかやってこれた。

そういう僕はというと、ベッドに寝転がり惰眠を貪っていた。今まで慣れないことに悪戦苦闘し、時間ギリギリまで仕事をしてきたせいでろくに眠れていなかったのだ。今日くらいは寝ていいだろう。

「さてと、二度寝二度寝………」

時刻まだ8時ぐらいで、仕事をし始める時間が10時あたりだ。なので、まだ寝ていても問題はない。

プロダクションは家から徒歩で十数分で着くため、ギリギリでもなんとかなる。と思

いっつ、心地よい睡魔に身を委ねー。ー。

ピリリリリリリリリリリ。

……誰だ。人がせつかく気持ちよく寝ようとしているのにそれを邪魔する奴は。

そう恨めしい目でスマホを手に取り、画面を見る。そこには『武内プロデューサー』とあつた。

僕は、面倒くさいと思いつつ電話を取る。

「はい、もしもし?」

『すみません、蒼崎さん。寝てましたか?』

申し訳なさそうな声が耳に響く。……そんな風に言われたら、『二度寝しようと思つてたのに何してくれてんの?』とは言えない。

「……いえ、ついさつき起きたばかりですが。それで、何かあつたんですか?こんな朝早くに」

『朝早くかどうかは分かりませんが、ちよつとした案件をお任せしたいと思ひまして』

「……案件?何ですか?」

『欠員の三人のうちの一人が決まりました』

なんと、と反射的にそう言ってしまふ。決まるのが存外早かったようだ。

『蒼崎さんには、その方に選考に通つたことを伝えてきて欲しいのです。今まで11人もの方達との顔合わせも上手くできてますし』

武内さん、それは違うよ。確かにやってきたけど、上手くはできてない。全くと言っていいほど上手くできていない。敢えて言うならば、混沌またはカオス、他の表現方法で表すならグダグダ。そんな感じだった。

だからと言って慣れていないというわけではない。なので、この案件を断るといふこともない。

「分かりました。場所はどこですか?」

『ありがとうございます。場所は、プロダクションの少し離れたところにある養成所、といえれば分かりますか?』

「ああ、あそこですか……」

なんとなくだが分かる。一度、暇すぎて適当にフラフラ歩いてた時に見つけたことがある。だが、道が入り組んでいたような、そうでないような、と記憶が曖昧である。

『念のため、住所をメールで送りますので』

用意がいいですね武内さん。まあ、それが普通なんだろうけど。

「ありがとうございます。終了したら、346プロに行きますので」

『はい。よろしくお願ひします』

そして電話は切れる。僕は、欠伸を噛み殺し、目を擦ってベッドから立ち上がる。そして伸びをして目を覚まさせようとする。

「さ、てと、それじゃあ本日もお仕事開始といきますかね」

☆♪◇

「ここら辺りのはず、なんだけど……」

僕は、あれからすぐさまスーツではなくパーカーに着替え、家を出た。

なぜ、スーツじゃないのかって？ 部屋になかったから母さんに聞いたたら、クリーニングに出したとのことだった。

一つだけ聞きたい。そんなに毎度毎度クリーニングに出す必要があるのだろうか？ というか、母さんは僕がどれだけスーツ汚してゐるって思ってるの？

「ここら辺りのはずなんだけど……」

スマホが示す目的地あたりまで来た僕は辺りを見渡す。すると、見覚えのある建物が目に映った。

武内さんが言っていた養成所だ。



「いっ、かな……う？」

とりあえず中に入ることにする。入り口のドアを開け、中に入る。

毎日隅々まで掃除されているのか、清潔さがどことなく滲み出ていた。僕は、選考者に会うために中へと進む。

確か、名前は島村卯月さんだったはずだ。顔写真も見たしなんとかなるはずなんだけど……。

と思っていると、近くの扉の奥から、ステップを踏む音とカウントを取る音が聞こえてきた。おそらくそこでレッスンを行っているに違いない。

だけど、どうやって中に入ろう？このまま突入しちゃっていいのかな？武内さん曰く、連絡はしてあるって言ってたし。

よし、と僕は決心をしてドアノブを勢いよく回す。

ガチャン！という音が響く。そして静寂が訪れる。先ほどまで聞こえていたステップ音などは止んでいた。

「とりあえず、中に入ろうかな……」

恐る恐るドアを開けると、そこに見えたのは、レッスン室だった。やはりここでレッスンをしていたのだろうか。

だけど、肝心の島村さんは一体どこに……？

そう思って歩みを進めていると、横から何か飛んでくる。それは、僕の鼻をかすめて地面に落ちた。

飛んできた方向を見ると、そこには怯えて涙目になっている女の子と、警戒心丸出しの女性だった。

「ここに何の用ですか不法侵入者！」

「え、え？」

状況が飲み込めてないので……。てか、不法侵入者って誰のこと？

「あなたですよ！勝手にここに上がり込んで、一体なんのようなんですか!!」

鋭い目つきで僕を睨む女性。なるほど、僕が不法侵入者ね……。……。つてちよつと

待って！また誤解ですか!?

「ちよつと待ってください！誤解です、誤解！僕は不法侵入者でもここに強盗とか犯罪

目的で来た者ではありません!!」

「じゃあ、あなたは一体なんなんですか!？」

「み、346プロのプロデューサーです！武内プロデューサーの代わりに来ました！」

両手を挙げて僕はそう答える。すると、警戒は解いていないが、女性が不思議そうに

こちらを見てくる。

「プロデューサーさん……。？確かに代理を行かせると言ってたけど、あなたどう見ても

子供じゃない」

「だ、大学生です。訳あってプロデューサーすることになったので」

僕は、何よりの証拠である346プロの名刺を渡す。武内さんから、このような時のためにと作ってもらっていたのだ。まさかこんなところで役に立つとは思わなかったよ。

「……………本当みたいね。ごめんなさい、早とちりしちゃって」

「い、いえ、こちら黙って入ってきましたし……」

「それで、今日は何の用ですか？」

「えっと、選考の結果をお伝えに来ました」

僕がそう言うと、先ほどまで涙目だった少女が目を見開いてこちらを見る。

「選、考……………?」

「そう、選考です。この頃、アイドルのオーディション受けましたよね？島村卯月さん」

「は、はい！で、でも、あれ不合格って通知が……」

「それが、辞退した人がいたので繰り上げで合格となりました。おめでとうございます」

僕はそう言いつつ、合格通知の入った封筒を手渡す。すると、少女は感極まったのか、目をうるうるさせる。

「わ、私……………!」

「え、本当なんですか!? 本当に、卯月ちゃんか!」

「ええ、真正銘それが最終結果の通知です。それが覆ることも、はたまた別物に変わることも、そして偽物ということもございません」

すると、島村さんは限界だったのか、涙を流し始めた。

えつと、こういう時つてどうすればいいの……!?

「わ、私……っ! 本当に、アイドルになれるんですか……?」

上目遣いで聞いてくる島村さん。威力は半端ないがここはそういうところではないため自重しないと。

僕は咳払いをして、その疑問に答える。

「ええ、勿論です。まだデビューとかはしてませんが、今日からあなたは、島村さんはアイドルです」

すると、島村さんは隣にいる女性に抱きついた。

「や、やりました先生……! 私、ついに……!」

「ええ、よく頑張ったわね、卯月ちゃん!」

二人で、感動を分かち合っているところ悪いのですが、これって僕邪魔ですかね?

———それから数分後。

「すみません、取り乱してしまつて……」

「いえ、別に構いませんよ」

僕は今、島村さんと二人でいる。さつきまでいた女性は、島村さんの養成所の先生だつたらしい。先ほど、話があるならゆつくりどうぞと言つて出て行つたのだが。とうかいてくれた方が嬉しかったのだが……。

「そ、それで、私は何をすればいいんでしょうか？」

「ええつとですね……」

どうしよう、予想外の質問なんだけど……。プロジェクト名や内容聞かれると思つたのに。

でもまあ、それ全てさつき渡した書類の中に書いてあるけどね！くそっ！詰んでるじゃないか！

「うくん……」

本当に手詰まりだ。武内さんからも、会いに行つてくれとしか言われてないし、それ以上の詳しいことも聞いていない。これでどうしろと……。

そこでふと妙案が浮かんだ。

「そうだ。いつもやつてるようにレッスンを見せてくれませんか？」

「レッスンは……ですか？」

「ええ。どれほどのものか見ておきたいと思ひまして」

「なるほど。分かりました！先生を呼んできますね」

そう言つて、パタパタと走つていく島村さん。それから数分後にレッスンは開始された。

「はい、ワンツーワンツー。そこのターン遅れない！はい次！」

島村さんは、養成所の先生の指導に合わせてステップやターンをする。こうして見ると、やはり他の子達よりかは上手い。アイドルを元から志している人たちはこうなのだろうか？

でも、上手いからこそ失敗した時はかなり目立つ。自分で言つてはなんだけど、暇があれば他のプロジェクトの子達にレッスンを見てほしいと言われているため、どこがどう間違っているのか、曖昧だが分かるようにはなつてきた。

島村さんの苦手なのは、多分さつき注意されてたターンのところだろうな。まあ確証は持てないけど。

「はいっ、一旦休憩」

「はあ………疲れました………」

パンツと柏手が鳴り響く。休憩と言われると同時に島村さんは、床にへたり込む。ま

あ、一時間もぶつ続けでやってたらそうなるよね。

「卯月ちゃんどうでした？」

養成所の先生が僕のところに来て聞いてくる。その目は我が子の受験の合否を問うような顔つきだった。

「今、プロジェクト入りが決まっている子達に比べれば、非常に上出来です」

「おお、結構評価高いんですね」

「僕は褒めて伸ばすタイプですから。まあ、一つだけ言うなら——」

そこでハツとなつて気づく。目の前にいる島村さんが、こちらを凝視していることを。

い、いやそこまで見なくても酷いこととかは言わないって。

「上手いからこそ、ミスをした時には目立っていました。例えて言うなら、あの途中のターンですかね」

僕が言うのと、ああ……と呻きながら床に倒れる島村さん。

「やつぱりそこですよね……。はあ……。どうしてもそこだけ上手いかなくって」

「そればかりは練習あるのみ、としか言えませんね。すみません、的確なアドバイスもできないのに「こんなこと」を」

「あ、いえいえ！指摘してくださいありがとうございます！」

島村さんは、嫌な顔一つせず、満面の笑みで返してくれる。うん、気を抜いたら惚れそうならい笑顔でよろしいですね。眼福眼福……。

「そういえば、いつから卯月ちゃんが所属するプロジェクトの活動が始まるんですか？」

先生……それを聞かれたら詰んじやうじやないですか。

だが、ここで嘘をつくのはよくない。これからのプロデューサーとしての信頼を置かれるためには、真実を話さなくては。と、僕は思うわけです。

「実を言いますと、まだメンバーが揃ってないんです」

「……………え？」

「先ほど申し上げました通り、もともと決まっていたメンバーが辞退してしまつて、欠員が出たため、まだ開始できてないのです」

「その欠員って何人いるんですか……………」

「島村さんは決まったので残り二名ほど、ですかね」

確か三人だったから残り二人でよかったはず。というか、もう欠員でないよね？顔合わせした子達やめないよね!?……………まあないだろう。というか本当にやめてください仕事がバンバン増えるので。

「そうなんですか……………。それまでは何をすればよろしいのでしょうか？」

何を、と聞かれても困る。実を言うと、僕もそこまで具体的なことは教えられていな



い。他の子達のスケジュールは、僕が管理することにはなったのだが、結局レッスンをか入っていないのが現状。

そのため、島村さんにも同じことをしてもらおうしか他にはない。

「レッスン、ですかね」

「レッスン………はいっ！分かりました！私、レッスン好きですから！」

そう言つて笑顔を見せる島村さん。それが心からの笑顔だったのか、それとも作り笑いなのか僕には分からなかった。

でも、その笑顔を見て思った。僕らが早く欠員をどうにかして、彼女達に一步踏み出してもらわなくては。このまま、灰かぶりのままで終わらせるのではかわいそうだ。

「こちらは大急ぎでなんとかしますので。頑張ってください」

僕は頭を下げながらそう言う。すると、島村さんは、

「はいっ！島村卯月、頑張ります！」

そう言つて、笑顔の花を咲かせた。

出会いというのはハプニングと同時にやってきます。

僕は島村さんの通う養成所を出て、プロダクションに向かっていた。

「とは言ったものの、どうすればいいのやら……」

空を見上げてため息を吐く。勢いでああは言ったが、全く策がない。打つ手なしだったものをどうすればいいのだろう。

だからと言って、じっと待つてるとか島村さんに悪いし。と、頭を悩ませていると、泣き声がどこかから聞こえてくる。

「うわあくん！」

「ちよ、ちよつと泣かないでよ」

そこを見やると、人だかりの中に小学生くらいの男の子と高校生と思わしき女の子がいた。

何かあったのかな、と思いつつそこを見ていると騒ぎを聞きつけたのか、警察が女の子の側に来る。

「ちよつと、君何したの？」

「え、いや私は別に……！」

「署まで来てもらうからね」

「人の話を聞いてよ!」

警察まさかの聞く耳持たず。それだと信用されなくなりそうですよ?

見かねたので、女の子に助け舟を出すことにした。格好つけようとかそんなことは思っていないからね?

「すみません、少しは話を聞いてあげたらどうですか?」

「何ですか君は。関係者でないのであれば、早く立ち去りなさい」

お前ら本当に警察か? 僕には別の何かに見えるぞ。

「とりあえず、何一つ聞かないまま、その子に罪をなすりつけるとかよくないと思います」

僕は正論を叩きつけ、警察官を黙らせる。流石にこれには応じたのか、警察官は女の子から事情を聴き始める。

その間に、僕は泣いている男の子に近づいて頭を撫でる。

「どうしたの? どこか痛いのか?」

「うう……ひつぐ……えつとね……おもちゃが……」

「うん? おもちゃ?」

男の子が指差した先には腕が外れているロボットのおもちゃがあった。僕はそれを

拾い上げる。

「あれ？……このネジどこだ……？」

そして気づいた。多分、この子のおもちやのネジが何処かに行つて、それをあの女の子が探すのを手伝おうとしてたんだ。で、探そうとした矢先にこの男の子が泣き出した。

なるほど、と思いつつ、地面を見渡すと、木の植え込みの近くで落としたのか、ネジは木の付近にある草などに紛れてあつた。僕は、それをおもちやにはめて男の子に渡す。

「ほら、直つたよ」

「……………」

僕が手渡すと、それを大事そうに抱える。こういうころ僕にもあつたなあ……。お気に入りのおもちやの部品がなくなつて泣き喚いてたこと。まあそんな時にはいつも助けてくれる人がいたんだだけだね。その人は今も頼れる存在だが。

「お兄ちゃん、ありがとう！」

涙がまだ少しだけ残っているが、笑つてお礼を言つてくれる男の子。僕はニツと笑つて言つた。

「もう失くすんじゃないぞ。あと、あそこにいるお姉さんにもお礼言つてきな」

「うん！」

そう言つて走つていく。女の子の方も誤解が解けたようで、警察官から解放された。うん、これでめでたしめでたし。

そう満足して、そこを去ろうとすると女の子に腕を掴まれる。

「ちよつと待つて」

えつと……何故に？

「助けてくれてありがと。あと、お礼とかしたいんだけど……」

うん。その気持ちはありがたい。ありがたいのだが、お礼は流石に言い過ぎだろう。僕はこれといって何もしていない。ただ、当然のことを言つただけだ。

「いや、気持ちだけでもらつておくよ」

「それじゃあ、私の気が済まない」

「じゃあどうしろと……」

「………何か奢ろうか？」

僕は年下に奢られるほど金欠にはなっていない。それなら僕がおごる方だろう。

「いや、奢らなくて「あそこのファミレスでいいよね」………つて聞いてないし」

僕はされるがまま、ファミレスへと連れて行かれる。やっぱり僕つて女の子に逆らえないのかな………。



ファミレスの角の方の席に座らされた僕は、メニューを見ていた。この子のお金で飲食するわけではない。僕もある程度の所持金はある。なのでどうにかなるはずだ。

「いらつしやいませ。ご注文をお伺いします」

「えつと……、紅茶とサンドイッチ一つ」

淡々と注文を済ませていく女の子をよそに、僕は時間を確認する。十二時を回っている。まあ昼時だからファミレスに来たのはちようど良かったと言える。

今日はあいにく、昼飯を持ってきていない。いつもなら自分で作ったりするのだが、今日は急いでいたためそんな暇がなかったのだ。

「そちらの方は何にしますか？」

店員が僕に聞いてくる。うん、何にしようかな。コーヒーは欠かせないとして、その付け合わせにサンドイッチかまたはまたフレンチトーストか。もしくはがつつり食べるか。うーん、悩む。

「コーヒーとカツサンドお願いします」

「かしこまりました。少々お待ちください」

そう言つて厨房へとかけていく店員さん。悩んだ末、カツサンドをセレクトした。腹持ちがよく、がつつり食べられるので一石二鳥だ。

「改めて言うけど、本当にありがとね。私は渋谷凧。あんたは？」

「蒼崎弘弥だ。よろしく」

「うん、よろしく」

………会話終了。この空気どうしたものか。僕に壊せるなら赤子にだつて壊せるよ。こんなの。逃げたい。どこでもいいから逃げたいよ。

「でさ、あんたあんなどころで何してたの？」

「ん？ああ、仕事に向かう途中だったんだよ」

「……あんたまだ成人してないでしょ」

失敬な。一応今年、または去年度成人したよ。学校の友達とかと会うのが懐かしすぎて少し泣いたけど。

「一応成人はしてるけど、大学生さ」

「大学生が仕事……？一体どこで？」

「346プロつてとところで働いてる」

僕がそう言うと、ギョツとした顔をして驚く渋谷さん。いや、そこまで驚かなくても。

「あんた……もしかしてアイドルとかのプロデューサーつてやつ？」

「一応ね。まあ最初は母さんに無理やりされたんだけど」

あの時を思い出すと今でも少しイラつとする。あれがなければ、もう少し怠けられると思っただが、まあそれはないな。うん、ないない。

「ふーん、そうなんだ……………」

そう呟き、顎に手を当て何かを考える渋谷さん。そこに、注文していたものが運ばれてくる。

「お待たせいたしました。コーヒーと紅茶、あとサンドイッチとカツサンドです。それでは、ごゆっくり」

そう言つて立ち去る店員をよそに、目の前に置かれたコーヒーを啜る。甘いのも良いけど、たまにはブラックも良いよね。

「……………ねえ」

先ほどまで何かを考えていた渋谷さんが、真面目な顔で僕を見る。

「アイドルつて楽しいの…………？」

真面目な顔をするから何かと思えば、僕が全くわからない質問ですか。残念だが、僕はプロデューサーであつてアイドルではないためそんなことは分からない。

でも、プロダクションにいる子達は毎日楽しそうに笑っているのだけは分かる。だつて、僕の仕事部屋、事務所と併設されてるんだもん。いやでも聞こえてくるよ。



だから、ここは僕の感じたままに言うことにした。嘘偽りなく。

「僕はアイドルじゃないから確証は持てない。だけど、僕の所属している部署の子達はみんな楽しそうだよ」

「そう、なんだ……………」

「渋谷さん、一つ提案があるんだけど、いいかな?」

「何?」

「アイドルに、なってみませんか?」

僕は真面目な表情でそう告げた。なぜ、どうして?と思いかもしれない。ただ単に理由は、なんとなく、だ。常日頃思うのだ。なんとなくこの子ならできる気がするだとか、そんな風に思うことがよくある。

渋谷さんもその一人だ。クールな見た目からは感じられない優しさ。そして、時折見せる悩みを抱えたかのような顔。あの顔には心当たりがある。

「え……………私が……………」

「ああ、君が。一つだけ聞きたいんだけど、君は今、楽しいかい?」

「……………どういふこと?」

「渋谷さんが感じたままに答えてくれていいから」

「この質問に意味はないかもしれない。もしここで『楽しい』と返ってくれば、僕の感

じたものは嘘となる。まあ、別に嘘であつてもいいんだけど。僕は預言者とかじゃないし。

「感じたままに……………」

渋谷さんは悩んでいる。別に答えを求めているわけじゃない。感情を聞きたいのだ。今現在が楽しいか、それとも——。

「楽しい……………と思う。けど」

渋谷さんは俯いて言葉を紡ぐ。

「何か、足りない気がする。私、夢中になれたものとかなかったから」

胸の前で拳を握りしめて言った。

「なら、探しませんか？ 渋谷さんが夢中になれる『何か』を」

「……………探すって言ったって」

僕の言葉に困惑する渋谷さん。それもそうだろう。であつて数十分一緒にいただけの人からそんなことを言われれば。だけど、こっちだつて折れるわけにはいかない。

「きつかけでいいんですよ。『アイドルになる』ということを踏み台にして何かを見つけただければそれで」

もし、何かに阻まれて目的のものが見えないのであれば、今いる場所からどこかに乗ったり移動したりだとかしなければその目的のものは見えない。

だから、僕はこんなことを言ったのだ。渋谷さんに踏み出して欲しくて。持っているものを無駄にってしまうようなことがないように。

「で、でも……………」

「別に今決めろっつていうわけありません。時間はありますので、ゆっくり考えてください」

そう言って、僕はカツサンドを口に運ぶ。

他のメンバーを待たせるのは悪いと思う。だけど、僕はどんなことがあっても選択者の意思を尊重したい。それが例え、こちらの意にそぐわなかったとしても。

「……………分かった。考えてみる」

「なら良かった」

渋谷さんは目の前にあるサンドイッチに手を伸ばし、もそもそと食べ始める。

そうして時間は過ぎていき、僕は渋谷さんと連絡の交換をしてプロダクションに向かった。



プロダクションに着くや否や、武内さんとちひろさんに出くわした。

「おはようございます、蒼崎さん」

「おはようございます」

「あ、おはようございます武内さんにちひろさん。どこかへ行かれるんですか？」

僕が聞くと、武内さんは首を振って否定する。

「いえ、蒼崎さんを待ってました」

「僕を？」

どうして僕を待っていたのだろうか。訳が分からな……いや、そうでもなかった。

そういえば、島村さんに会いに行くように言ったの武内さんだったな。

「どうでしたか。島村さんは」

「ええ。真っ直ぐでいい子でしたよ」

「そうですか」

「ということ、上手くいったんですか？」

「……………ええまあ」

行ってすぐに不審者に間違われましたけどね。まあ別にそれは気にしてないからいいでしょう。

「それでは、僕はいつも通りデスクワークしますので」

僕は話を終え、事務所の僕の仕事部屋へと移動しようとしたのだが、

「ちよつと待つてください」

ニコニコと笑うちひろさんに呼び止められる。てかなんで笑顔なんですか？少し怖いからやめていただけるとありがたいんですけど……。

「何ですか？」

「346プロに来るまでに何かありました？」

小首を傾げて聞いてくる。えつと……僕つて監視されてる訳じゃないよね？探知機とか盗聴用の器具を荷物に入れられてるとかないよね!?

「大丈夫ですよ。私、そんなことしませんから」

「さらつと心読むのやめてもらつていいですか？」

ひええ……もう怖いよお……。346プロここのの女性人読心術会得しすぎて怖いよお……。

「で、何かあつたんですか？」

興味津々気に聞いてくるちひろさん。あなた本当に監視してた訳じゃないですよね？

どうにかして切り抜けたかったが、この状態のちひろさんを退かせることができるわけもなく、ここまでであつたことを話した。渋谷さんを助けたことと、スカウトまがいな事をしたことをすべて、包み隠さず。

「ス、スカウトって……女性の方を、ですか？」

「武内さん、考えてもみてください。なんで『シンデレラプロジェクト』って名前の企画なのに男性スカウトしないといけないんですか？女の子達の中にむさい男紛れさせるつもりですか？」

もし、武内さんがそんなことを考えているんだしたら、僕はプロデューサーを降りますよ？

「……確かに、そうですね」

あ、真顔になった。まあ、冷静に考えればそうなりますよね。

武内さんとそうやりとりしていると、ちひろさんがクスクスと笑う。笑うところありましたっけ？

「いやあ、蒼崎さんもプロデューサーっぽくなってきましたね」

……確かにそうかもしれない。以前までこんなことをすることなどなかった。ましてや、女の子をスカウトなど絶対にしなかっただろう。万が一にもありえないことだ。

それほど、普通の『プロデューサー』というものに染まってきたのだろう。

「そりやどうも」

僕はそう返す。この仕事は別に嫌いではない。給料もいいし、仕事も今のところは慣

れれば問題ない。本格的にプロジェクトが始動したらどうなるか分からないけど。それにこの仕事を始める前よりは――

「――楽しいしな」

「何か言いました?」

「いえ、別に」

僕は自然にそう呟いていた。あと、頬も緩んでいた。僕が探していた『何か』とはこういうことなのだろうか?

『誰かの役に立ち、裏から支える』という役割が。

「では、仕事に入りますので。僕はこれで」

「ええ、頑張ってください」

「頑張ってくださいね」

僕はそう言って、二人と別れた。

この後、予想以上に入力する資料の多さに涙したのは別の話だ。



蒼崎弘弥P活動記録⑤

今日は島村さんへの合格通知だった。

不審者に間違われかけたが、なんとかなかったので結果オーライである。

島村卯月。この子は他の子達より笑顔が眩しかった。そして、歌や踊りも上回っている。これからの期待したい。

あと、プロダクションに行くまでにちよつとしたハプニングがあった。

まあそれはどうにかなったのだが、その結果、渋谷凜さんをスカウトまがいなことをすることになった。

その返答は後日、との事だ。僕にはどうにもできないので、返答を待つしかない。

何はともあれ、プロジェクト始動までそう時間はかからないだろう。これから忙しくなりそうだ。



# 春の息吹と共に少女の決心を見守りました。

島村さんへの通知から二日経った。

あ、どうも、二日連続で徹夜をして、現在襲い来る眠気と戦いながら歩道を歩いている蒼崎弘弥です。

なぜ僕がこんなところにいるか、疑問に思い人もいるかもしれない。その理由は、僕の隣にいる、ある人によるものだった。

「あのー……どっちに行けばいいんでしょうか？」

「そこを右ですね」

島村さんが訪ねてきたのを、平然と答える。

なぜ、島村さんが原因なのか、それは数時間前にさかのぼる。

僕は島村さんの通う養成所に来ていた。武内さんから、アイドル達の面倒を任されているためだ。

僕が、養成所のレッスンスターのドアを開けると、島村さんが笑顔で迎えてくれた。

「おはようございますプロデューサーさん！」

「おはようございます。体調は良さそうですね」

「はいっ！前まであまり出来てなかったターンとかもできるようになったんですよ！ほらー！」

そう言ってやってみせる島村さん。いやあ、いいですよ。こうやってひたむきに頑張る人って。……え、僕？まず夢中になれるものから探さないとどうにも、ね？

「凄いじゃないですか。よく頑張りました」

「えへへ〜♪」

僕は多少の労いを込めて頭を撫でる。すると、島村さんは頬を緩ませ、にへらと笑う。普通、女の子の頭など撫ではしないのだが、苦手なものを克服するまで頑張ったのだ。多少は褒めてあげなければ。

「あ、あのっ！よろしいでしょうか……？」

「どうかしたんですか？」

島村さんが上目遣いで聞いてくる。効果は抜群だけど、ここは高鳴る鼓動を抑える。「私の所属するプロジェクトについて始まるんでしょうか……？」

うーん、これは困った。それ、僕も知りたいと思っていた事だったから返答に困るんだけど。

でも、武内さんが二次オーディションを始めたから一人はどうかかなるっていつてた

ような気がする。

あと一人は……、やっぱり渋谷さんしか今のところ候補はいないか……。でも、無理強いするわけにはいかないし……。

「……すみません、まだ決まってくなくて」

「あ、そうですか……」

僕がそう告げると、見るからに落ち込む島村さん。……どうにかしたい。女の子を落ち込ませたまま放置するのは僕のポリシーに反すると思うか、男としてどうかと思う。

「でも、一人とは交渉中です。昨日、連絡が来たので今日会いに行こうかと」

これを言えばどうにかなるだろうと思っただけのことだ。それがそれだった。まあ事実このあと会いに行くわけなのだから、別に話したところでどうにかなるわけではない。

「このあとで、ですか？」

「ええ、まあ」

僕がそう言うと、先ほどまでの暗い顔はどこかに行ったのか、目を輝かせてこちらに迫ってきた。

「あ、あのっ！私、ついて行ってもいいですか!？」

「……………へ？」

そして現在に至る。まあそこで断ることもできた。できたのだが……、断ろうとした時の島村さんの顔は凄まじく悲しそうになり、罪悪感を感じざるを得なかったのだ。で、押し負けてしまいました。本当僕って押しに弱いよなあ……。特に女の子の。

「どんな人なんでしょう……楽しみです！」

まあ僕も本性は知らないし、楽しみではあるけど、断られる可能性だってあるのだ。多少の覚悟を持っていかなければ……。

そうしているうちに目的地へと到着する。そこは、渋谷さんに言われた花屋だった。

「あれ……、ここって……」

島村さんはここに来たことがあるようだ。まあ僕は当然ないけど。だって、花送る相手なんていなし。……ぼっちで悪いか畜生。

「は、ハナコ！お願いだから引つ張らないで！」

花屋から聞こえてくるのは、慌てた声と犬の鳴き声。そして出てきたのは、私服姿の渋谷さんとリードにつながれた犬だった。

「あ、やっぱり！」

……島村さんと渋谷さんって面識あり？

僕は今公園のベンチに座っています。渋谷さんと島村さんというと、島村さんの強い要望で二人きりで話している。渋谷さんが飼っている犬、ハナコは僕が預かっている、僕は時間つぶしのために適当に撫でていた。

「もふもふだな……。ちゃんと手入れされてるし、大切にされてるんだなハナコ」  
「わふっ！」

僕の言葉に返事をするように鳴くハナコ。やっぱり犬ってこういうところがいいよね。

実のところ、僕は動物好きだったりする。特に好きなのが犬だ。ハナコのような小型犬も仕草などが可愛くていいが、大型犬の時折見せる可愛さもたまらない。中型犬はその二つの特徴を兼ね備えている場合があるのでなお良しである。

つと、話が逸れた。まあ今の状況を簡単に言うとな、『話したいから待って』という感じである。

まあ公園に着いてから、30分ぐらいは経っているんだけどね。話すにしても長いとは思うけど、僕は気にしない。それでもし、渋谷さんがOKを出してもらえらばいくらでも待とう。断られたらそれはそれでどうしようもないけど……。

「プ、プロデューサーさん！来てくださーい！」

島村さんがこちらに手を振りながら呼んでくる。話が終わったのだろうか？何はともあれ、僕はハナコを抱えたまま、島村さん達の元へと向かう。

「何ですか？」

「えつと……凜ちゃんが聞きたいことがあるって……」

聞きたいこと？僕に答えられる範囲ならなんでも答えるけど、一体なんだろう？

「あの、さ………私さ、今までやりたい事とかなくて、ただ友達と話したりして、時間が過ぎていくだけだった。でもさ………」

渋谷さんは俯きながらも言葉を紡いだ。

「それが、私にとつては楽しいとは思えなかった……。ねえ、蒼崎さん。アイドルになれば、見つかるの？私が夢中になれる『何か』って」

今にも泣きそうな目でこちらを見てくる。その目は僕には、救いを求めるように見えた。何も無いところから救いを求めるような……。そんな気がした。

「それは………」

嘘偽りなく、ただ正直に、自分の感じたように言うしかない。そうすることしか今の僕にはできないのだから。

「それは僕にも分かりません。僕はアイドルではないのですので」

そう言うとうと渋谷さんは下を向き、暗い表情になる。救いを求めたがそれを拒まれ、絶

望したという風になつてゐるが、ここで話を終わらせるほど僕は薄情じゃない。

どこかの主人公みたいにはいかないけど、助けを求められたなら、完膚なきまでに助けるのが僕の信条だ。それが例え、どんな助けであつても。

「以前は僕もそうでした。プロデューサーになる前は、ただ講義を受けて、友人と駄弁つて、ただそれだけでした。空っぽで何も無い、ただただ平凡な暮らし。でも、あるきっかけで僕の暮らしは一転しました。それが、今の仕事です」

「プロデューサーになつた……つてこと？」

「ええ。最初は勝手に申し込まれて乗り気じゃなかつたんですけど、いざプロデューサーになつてからは景色が変わつた気がするんですよ。まるで、今まで見たこともなかつたものが目の前にあるかのように」

仕事は大変だし、寝る間も惜しんでしなくてはならないこともたくさんある。だが、それら全てが少しでも楽しいと思えてしまう。別に僕がMというわけではない。単にそう言う経験がなかつたからこそその感情なのだ、とそう僕は思つてゐる。

「つまり、どういふことですか？」

「どんなきつかけだつたとしても、『踏み出せば、何か楽しいことが見つかる』つてことです」

「踏み出せば……見つかると……」

「だから」

僕は手を差し出す。未だ迷う渋谷さんに。『平凡』という型にはまった彼女に。

「見つけに行きませんか？君が夢中になれる『何か』を。僕たちと一緒に」

渋谷さんは僕が差し出した手を見て、考える間もなく僕の手を取る。

「渋谷凜、15歳。高校一年。よろしくお願いします」

決心した顔で告げた。その瞬間、風が吹き抜け、桜吹雪が舞う。踏み出したことを、そして彼女達の新たな世界への門出を祝福するかのよう。

☆♪♡◇

僕は二人と別れ、プロダクションの執務室にいた。しかし僕の与えられた部屋ではない。武内さんのだ。

「渋谷凜さんをスカウトに成功しました」

僕はシステムのようにそう告げた。すると、武内さんは驚いたかのように目を見開く。

「本当ですか？」

「ええ。資料も受け取ってもらえましたし」



「……お疲れ様です。それと、ありがとうございます」

「いえいえ、僕もプロデューサーの端くれなんで。少しでもみんなの役に立ちたいですから」

頭を掻きながらそう言う。礼を言われるのは慣れてないから、こういう時に返答に困る。

「そういえば、オーデイションどうなったんですか？」

確か、三人のうちの一人はそれで決めるとか言っていたような気がするんだけど。多分もう終わってるよね。

「本田未央さんに決定いたしました。なので明日、シンデレラプロジェクトの皆さんの宣材写真を撮ろうと思ってます」

「へえ……。新田さん達には伝えてるんですか？」

「はい。ちょうど、今日レッスンがあったものですから」

やはり武内さんは仕事が早い。僕がやっているならもう少し遅くなるだろう。多分、明日か明後日ぐらい。

理由？……だつてさ、カオスになる気しからさないからさ、少しぐらい気を休めたつていいじゃない。今の所、(欠員の三人、新田さんを除く)顔合わせはすべて混沌と化してるのだ。訳が分からないよ……。

とりあえず、僕が島村さんと渋谷さんに連絡するということで話をついた。

「すっかり、染まりましたね」

「へ？」

武内さんが子供を見守るかのように微笑みながらそう言う。えっと、何に染まってるか大体わかるけどどういふことだろうか……？

「いえ、最初の頃は初々しかったのですが、今になってはしつかりと仕事ができるプロデューサーになったなと思ひまして」

嬉しいことを言ってくれますね。でも、少し違う。しつかりとは仕事はできていない。だって、一昨日は入力したデータを再度襲来してきた妹によって削除され、昨日なんて途中寝落ちして、気づいたら画面がすごいことになっていた。訳のわからない文字の羅列で埋め尽くされてた。まあキーボードの上で寝てたらそうなるのも当たり前だよな。あの時心臓止まりそうになったけど。

ということ、僕はしつかりとなんて仕事はできてない。将来的にはできるようになりたいけど。

「まだまだですよ。なのでこれから精進していきます」

「そうですね。私も蒼崎さんを見習わなくてはなりませんし」

「え？」

「皆さんと敬語なしで話せているではありませんか」

「あー……………それですか……………」

違うよ武内さん。あれは僕の意思じゃない。新田さん（悪魔）によつて強制的にタメ口になったんだよ……………」

それから、僕は武内さんの認識を変えた後で自分の仕事に移った。

デスクワーク中にみりあちゃんと莉嘉ちゃんがノックなしに執務室に乱入してきて、驚いてデータ（10ページ分）をすべて消し飛ばして泣いたのはまた別の話。

☆♪◇

### 蒼崎弘弥P活動記録⑥

人生初のスカウトに成功した。いや、断られた時どうしようか本当に悩んだし、心臓に悪い。これ以降はあまりしたくない。

渋谷凜。彼女は今は何も持っていない。だけれど、いつかずば抜けた武器を持つはずだ。多分。

あと一人は資料しか見ていない。

本田未央。一見明るそうな少女だった。武内さんが言うには、明るく、誰かを引っ張っていくような子だったらしい。本当にそうであるならば嬉しい限りだ。

さて、明日から本格的にプロジェクトが開始される。気合を入れていかなければ。

## 三徹からの大ピンチです。

暗い大空が明るくなり始めていた。なぜそんな空を見ているのかというと、

「眠い……………」

はい、三徹です。今までしたことない境地まで達しました。いやあ、もう途中から苦しいことが楽しいことのように思えてきて、「あ、これ末期だな」って思ったぐらいだからね。

現在時刻は五時過ぎ。もうハードワークすぎて泣けてくるね。というか、大学生がしていい仕事じゃないね。まあ、なぜやめないのか？と問われると色んな理由がある。

一つ、給料がいい。これは絶対に捨てがたいことだ。他のバイトよりも数千円ぐらい高いのだ。おかげでお小遣いも大幅に増えている。

二つ、もはやバイトではなく就職している。これが理由になるのかは簡単だ。就活面倒い。

三つ、仕事に慣れてきた。プロデューサーを辞めて他の仕事につくのもいいのかもしれない。でも、その時にまた慣れるのに時間がかかるのは御免だ。そんな時間があるくらいなら、今の仕事のデスクワークをする方がまだマシである。

との三つの理由で僕はこの仕事を辞めずにいた。

だけど、睡眠時間は少しでも取りたいのだ。もう三日もろくに寝ていないため足がふらふらである。父さんが平然としていることを尊敬する日が、こんな形で来ようとは夢にも思つてなかつた。いや、もう本当にお疲れ様です。

そうこうしているうちに、自宅へとたどり着く。おそらく、誰かが起きているだろうがそんなことは御構い無しである。気持ちはただ一つ。寝たい、それだけだ。

「ただいま………」

僕はやる気のない声でそう告げる。誰も起きてないのだろうか、全く物音がしない。僕はとりあえず、リビングに向かう。荷物はいつもここに置いてるからね。

そして、リビングの扉を開けると、

「遅い」

仁王立ちして黒いオーラを纏った母さんと眠そうにソファーに寝転がる花梨の姿があった。

「あ、お兄ちゃんおかえり〜」

「弘弥、今までどこで何してたか言ってくれろ？ちよつとお母さん気になるなあ」

花梨のお気楽なテンションとは裏腹に、言葉の一つ一つに怒りが感じられる母さん。

これ、正直に言つても許してもらえなくね………？

「……仕事してた」

「嘘はいいから。正直に言いなさい」

「どうやら信じていらつしやらないらしい。確認したいならば、ちひろさんに聞いてみてよ。あの人が何かプロジェクトルームで寝てたから。帰る時もいろいろアドバイスとかしてくれたから。」

「いや、本当だって。普通ならこんな時間に帰ってくるわけないでしょ。夜遊びするよ  
うな友達いないし」

「……本当に？」

「誓って嘘は言っておりません」

「だから早く寝かせてください。そろそろ限界が近いのでございますよ。」

「……ならないけど」

「どうやら母さんも渋々納得した様子。これでようやく寝れる。」

「お兄ちゃん大丈夫？物凄い眠そうだけど」

「絶賛三徹中だからな。さすがに眠い」

「なら寝てきなさい。後で起こしてあげるから」

「なら、10時に起こして」

「確か今日の集まりはそれぐらいからだったはずだ。」

僕はそう告げて自室に向かい、ベッドへとダイブする。そこから寝付くまでに数十秒もかからず、僕の視界は暗闇へと落ちていった。



「んあ……………」

どこかから放たれた光が僕の顔に直撃する。それで目が覚めた。

「ふわあ……………」

大きな欠伸と伸びをして起き上がる。顔に当たっていた光は、どうやら窓から差し込んだ太陽の光だったらしい。

そういうばおかしいな。確か、僕の部屋に光が差し込むのはだいたい夕方……………はず……………。

「まさか……………」

そんな悪い予感が当たりませんように、と願いを込めて時計を見るが、その願いは虚しく砕け散った。

武内さんに告げられていた時間は10時だった。それはとうに過ぎており、現在4時過ぎである。6時間も遅れる大遅刻である。



「なあ!?遅刻じゃないか!」

残っていた眠気はすべて吹き飛び、僕は大急ぎで支度を始める。シャワーを浴び、スーツに着替え、リビングに荷物を取りに行く。ここまでで十数分。

リビングには母さんがいた。起きる時間を言っていたはずだが。

「あら、弘弥。どうしたの?そんなに急いで」

「どうしたもこうしたもあるか!起こしてくれって言っじゃないか!」

「それなんだけどねー」

母さんが何か言おうとするが、話が長くなりそうなのでそれを無視して告げる。

「くそつ、まず武内さんに謝らないと……:……:じゃあ行ってくるから!」

僕は家を飛び出した。母さんの言い訳も聞かずに。

「武内君から今日は休んでもいいっていう電話きてたんだけど……」



346プロの近くまで来たところで、武内さんに電話をかける。

『はい。どうかしましたか?』

「あ、あの、申し訳ありません！遅れてしまつて」

『ああ、そのことですか。それなら』

「もうすぐプロダクションに着きますので！」

『……………え？』

間の抜けた声が僕の耳に響く。え？とはどういうことなのか？

『冬華さんから聞いてないのですか？』

冬華とは僕の母さんの名前だ。どうして僕の母さんがそこで出てくるのだろうか？

「何をですか？」

『いえ、このところ毎日大変そうでしたので、今日は休んでくれても構わない、と連絡を入れたのですが、聞いてないのですか？』

え？僕そんなの聞いてないよ？いつそんな話が……………。

そこでここに来る前、家であつたことを思い出す。

『それなんだけどねー』

母さんが何か言おうとしていたことを。

……………僕の早とちり+話聞いていないせいですわはい。

「……………すみません。遅れてしまったという事でテンパつてしまつて。聞く前に家を  
出しました……………」

『いえ、こちらも事前にそう言っておけばよかったものを当日になっていつてしまったので』

武内さんが申し訳なさそうに言う。まあ、終わったことだしそれはいいのだ。問題はこれからどうするのかということである。

「あの、僕はどうすれば……」

『とりあえず、プロダクションまで来てください。エントランスに千川さんを待たせておきますので』

「了解しました」

と言って電話を切り、僕はプロダクションに向かった。



「あ、蒼崎さん。おはようございます」

「おはようございます、ちひろさん。それで、武内さんは？」

「今、シンデレラプロジェクトのアイドルの皆さん宣材写真を撮っているところです。まだ始めたばかりですけど」

ほっと胸をなで下ろす。これで終わっていたとなると僕は今日何しに来たのかわか

らなくなる。

「あら？ 蒼崎さんじゃないですか」

すると、プロダクションの入り口の方から女の人がこちらに来る。僕はその人を知っている。だって、ここに来た当初に挨拶を済ませたからね。

「高垣さん。おはようございます」

「おはようございます。今日もお元氣そうでよかったです」

「あはは……」

迷惑かけてないか心配で、内心パニックってますけどね。

「あ、そうだ。今日飲みに行きませんか？ 皆さんと一緒に」

「えっと皆さんとは？」

「いつも飲んでいる方々ですよ。千川さんもどうですか？」

「わー、いいんですかー？」

「ええ。私梅酒好きなんですよ。皆さんと飲む梅酒はうめー、ですからね」

その瞬間、僕とちひろさんが凍りつく。何を隠そう、目の前にいる高垣楓さんはトッパアイドルなのだが、ダジャレが大好物なのだ。現場を凍りつかせるほどの。

そんなこともつゆ知らず、くすくすと笑う高垣さんは、後で連絡しますねと言って去っていく。

「……ちひろさん、一ついいですか？」

「何ですか？」

「あのダジャレってどうにかならないんですかね？」

「さあ？ 私には分かりません。が、そろそろ行かないといけないというのだけは分かりません」

「ですね。じゃあ行きましょうか」

そう言つて、僕は宣材写真を撮っているスタジオに向かった。

☆♪◇◇

スタジオに着くと、すでに撮影は始まっていた。まだ撮っていない人たちは準備を着々と進めている。終わつてる人たちは、多分あそこで駄弁つている子達だろう。

「プロデューサーさん、連れてきましたよ」

「ありがとうございます」

武内さんはこちらに振り返る。僕を見ると何故か申し訳なさそうに頭を下げる。

「すみません。私のミスで」

「い、いえいえ！元はと言えば僕が話し聞かなかつたせいですし！気にしないでください」

い」

とりあえず、周りに見られるとまずいので武内さんの頭を上げさせて撮影しているところを見る。今撮っているのは島村さんだ。

僕が見た感じでそのまま感想を言う……緊張しすぎじゃない？

「笑顔、引きつってません？」

「です……」

「……………」

ちひろさんは笑顔で僕に同意し、武内さんは首をかいて困ったような表情を浮かべる。

次は渋谷さんなのだが、こちらも緊張しているのか、全然カメラ目線じゃない。

そしてもう一人。あの人が本田未央さんだろう。あの子は緊張はしていない。のだが、無駄にポーズをとりすぎている。あれでは流石に無理だろう。

三人の写真の確認をしていたカメラマンがこちらに来る。

「どうします？ 一旦休憩いれますか？」

「……………お願ひします」

武内さんは渋々、と言った様子でそう言った。取り直しが多かった島村さん達三人は椅子に座って疲れたような表情を浮かべている。

「どうすれば……」

「どうしましよつかねえ」

武内さんとカメラマンさんが悩む中、あることを閃く。

「あの、少しいいですか？」

「お？なんだ？ていうか君は？」

「二ヶ月ほど前にプロデューサーになった蒼崎です。少し提案がありました」

「ほお、なんだ言ってみろ」

カメラマンさんがニヤリと笑ってそう言ってくる。僕は思いついたことをそのまま言った。すると、

「おお、それいいかもしれないね！じゃあそれで行こう！」

そう言ってカメラマンさんは撮影の準備に戻る。

僕の提案は採用、良かったらしい。

「ありがとうございます蒼崎さん」

「いえいえ。ただ思いついたことを言っただけですから」

「それにしても上手いくんでしようか？いつも通りの姿でいいなんて」

そう、僕が提案したのは『いつも通りの彼女達の姿を何かを使って引き出す』というものだった。

確かに、ちひろさんの言う通り、上手くいくかどうかなんてわからない。だけど、そこにかけてみる価値はある。上手くいけば上等、失敗すればまた降り出しに戻るだけだ。最悪後日になるかもしれないが、まあそこら辺は島村さん達に任せるしかない。

そんな心配をよそに、撮影は始まった。カメラマンさんはボールを投げ渡し、自由に動いていいと言った。

で、始まったのはボールの投げ合い。

「ふふふ、私こう見えて選考理由すごいんだよ?」

「へえー、何だったの?」

本田さんが自慢気に胸を張りながらそう言う。その理由ってなんなんだろう? 僕も気になる。

「笑顔」って言われたんだ!」

そう言いながら渋谷さんにボールを投げる。渋谷さんはふーんと素っ気なく返しボールを受け止める。

「そういえば……私、選考理由聞いてないような……」

島村さんが思い出したかのように言った。渋谷さんも確かにと頷いている。

………そういや言っただけだね。ってこれ後で僕に飛び火しないよね?

「今聞く?」



「え……。でも、今日来ないってプロデューサーさんが……」

「あそこにいるよ。さつき入ってきてた」

渋谷さんはこちらを指差す。すると島村さんも僕の存在に気づく。どっちかという、今は気づいて欲しくなかったかなあ……。

「よし、それじゃあ今度は一人ずつ撮ってみようか！」

カメラマンさんが三人に指示する。僕はナイスタイミング！と心の中で親指を立てる。

そのまま撮影はテンポよく進み、宣材写真撮影は終わりを迎えた。



「皆さん、お疲れ様でした」

武内さんが彼女達の前に立ってそう言った。ちひろさんはその隣でニコニコしているが。

何故笑っているのかわからない僕からしたら怖いものでしかないんだけどね。

「そして、本日よりシンデレラプロジェクト始動です。これから忙しくなるかもしれませんが、よろしくお願いします」

淡々と告げる武内さん。その言葉で彼女達は喜ぶ。

そりやそうだ。ようやくプロジェクトが始動するのだ。嬉しいことこの上ないに違いない。

「それと、私から発表があります」

発表………？ 一体何のことだろうか？ 僕は聞いていないのだが。

「このプロジェクトは私ともうと一人、つまり二人のプロデューサーで進めていきます。私は色々と事情がありまして、皆さんとはあまり会わない可能性があります。なので」

武内さんの後ろにいた僕は、武内さんが横にずれることによつてみんなの前に姿を晒すことになる。

「もう一人のプロデューサー、蒼崎弘弥さんに皆さんの面倒を任せることにしました」

………前聞いた気がしますが一応言わせてください。

「聞いてませんよ!？」

「前に言つたはずなんです……」

うん、確かに言つた。だけど、今の今まで完全に忘れてた。だって、大学のレポートが………。

「では、お願いします」

……と言われましても。ってお願いですからことあるごとに頭下げないでください！断れなくなりますから！

「はあ……仕方ないか……」

諦め気味にため息をつき、気を引き締める。

「蒼崎弘弥です。まだまだ未熟ですが、皆さんを引つ張っていけるように精進していきます。よろしくお願いします。よろしくお願いします！」

どのみちこうなるんだらうから決心はしてたけどね。それに、そっちの方が楽しみなのだ。彼女達の成長を間近で見られるのだから。

『よろしく願います！』

皆んなの音が響く。近くにいた僕の耳にも響く。結論を言いましょう。物凄く耳が痛いです。

「そういえば」

思い出したかのように渋谷さんが手を挙げる。なんだろう。何か聞かれるようなことあったっけ？

「私と卯月の選考理由って何？」

……………それ今聞く？

「あ、そうでした！プロデューサーさん、教えていただけませんか？」

島村さんもこちらに注目する。もちろん他の子達も僕に注目している。

とは言われたが、残念ながら、全く思いつかない。そういえば、どうしてこの子達をアイドルにしたんだっけ？

渋谷さんは『何か』を見つげるために。島村さんは……………分からない。だって書類届けただけだし。

これそのまま言ったらマズイかな？ いや確定的にマズイよね？

で、僕が出した結論は、

「……………」

『に？』

「逃げるっ!!」

逃げることである。古今東西偉い人は言いました。『困ったら逃げろ』と。それを実行したままだ。

だって、本当のこと言うところの子たちに何言われるかわかんないんだもん。特に新……………美波さん。

「あ、ちよつと!」

「なんで逃げるんですか!?!」

突然僕が逃げ出したことに困惑する二人。まあそりやそうでしょうね。普通ならま

ともな答えが返ってくるころなんだから。

「だけど、残念だったね。僕はまともじゃないんだ。普通の人間だけど、困ったら目を背ける人なんだ。」

「蒼崎君、ストップ」

「はい、美波（悪魔）さんからお声がかかりました。普通なら止まらない、止まらないけど……ここで止まらないと僕の人生が終わっちゃう。」

「……………何？」

「分かってるわよね？ 蒼崎君」

満面の笑みで言ってくる美波さん。お願い、そんな今まで見たことないような綺麗な笑顔見せないで。考えてることが嫌でも伝わってくるから。そんなのを見ると逃げたくても逃げられなくなるから本当にやめて。

まあ結局、この後逃げられずに根掘り葉掘り言わされて一悶着あったのは別の話。

黒歴史閲覧のあとに待つのは初めての体験です。

「つ、かれた……………」

「お疲れ様です」

島村さんと渋谷さんに解放されて少し経ち、ボヤいているとちひろさんが労ってくれる。この人案外いい人なのかな？

「そーいや、島村さん達は？」

「プロジェクトルームに戻りましたよ。なんか面白いものを見つけたって言ってましたから」

「面白いもの？」

そんなものプロジェクトルームにあったっけ？昨日も一応部屋全体を見渡したが、何か面白いものなんてなかった気がする。というより、業務用以外のものはなかった気がする。

「あの、それどこで見つけたって言ってました？」

「えっと……、確か併設された部屋に入ったらそれが小さな机の上に置いてあった、と言っていましたけど」

部屋に併設？併設されてたのって確か僕の執務部屋じゃ…………。

まさか——

「ちよつとプロジェクトルームに行つてまいります!!」

「あ、ちよつと!」

嫌な予感しかしないが、その予感が外れていることを願つて部屋に向かうしか僕にはできなかった。というかお願い、この予感外れて!

☆♪◇

部屋に着いた時には時すでに遅し。僕の予感は完全無欠に当たつていた。

アイドルの皆さんはソファーに座つて何かの本を見ていた。

「あ、プロデューサーさん。どうかしたんですか?」

「はあ、はあ……島村さん、それ……」

「あ、これですか?その部屋で見つけたんです!」

「やっぱり……!」

僕は肩で息をしながら膝をつく。そして島村さんが持っていたものとは、

「これ誰のアルバムなんでしょう?」

「さあ？見てたらわかるんじゃない？」

「ねえー！早く次見ようよ！」

そう、アルバムである。どうして勤務先にアルバムがあるのか？そう誰もが疑問に思うだろう。

その原因は妹である花梨と母である冬華にあった。

以前、花梨が事務所に突撃してきた次の日、いざ入社してみると花梨の持ってきたバッグが机の上に置かれていた。まあ最初は変なものだとは疑わなかった。ただ単に忘れたんだな、程度に思っていた。

だけど中身を見て尋常なものではないと感じた。

そこにあつたのは、二冊の大きな本と小さなメモ帳のような本が入っていた。僕はそれに見覚えがあつた。いや、見覚えがなくてはならなかった。

女装写真が載ってしまった高校時代の卒業アルバム、無理やり着せられたコスプレを激写され、それが無残にも二、三枚採用されてしまった中学時代のアルバム。そして、友人の適当な一言によって始まった交換日記みたいなものである。主に講義が暇な時などにしているものだ。

あの中には僕らのー主に僕のープライバシーに関わるものが存在する。他人に見られていいというものではない。そして、その三冊共が部屋に設置されてるテーブル



の上にあるのだ。

僕の頭の中にある選択肢はただ一つ。見られる前に取り返す！

「あ、あのさ、それー」

僕の、と言おうとしたところで口を止める。ここでもし、僕のだとばれて仕舞えば結構まずいことに……なり得ない。それだけは何としても阻止したい。でもどうやって……。

「わあ……綺麗な人ですね。この写真の人」

「本当だにいく！でも、ここに女装って書いてあるよぉ？」

「じゃあこれ男の人？凄いわね。ここまで着こなすなんて」

僕の心に見えない剣が突き刺さる。おそらく高校の時のアルバムだ。あれに乗っている女装写真は僕のしかない。前は笑い話で済んだ。でも今は確実な黒歴史である。思い出したくもない、最悪の。

島村さんたちとは別に、おそらく中学時代のアルバムであろうものを見ているであろうみくさんは、おぉ、と感嘆の声をあげていた。

「この人かっこいいにゃ！コスプレみたいだけど」

「でも執事なんてイカしててロックだね」

「でも、誰かに似てるような……」

二本目の剣が心に突き刺さる。渋谷さん、誰かに似てるんじゃないやなくてそれ僕なんです。どうして、あんな写真が載ってしまったんだろう。本当に後悔しかない。

そして極め付けに、かな子さん達がメモ帳を見ていた。

「これ交換日記かな？」

「えつと……『確かお前の元カノって』

「ごめんなさいそれ以上読むのやめてもらつていいですか事情はすべて話すから本当にやめてもらつていいですか一生のお願いですからあ!!」

僕は渾身の土下座を繰り出し、みんなに事情説明して返してもらった。だが、先程智絵里さんが呼んだところに莉嘉ちゃんが反応した。

「ねえねえPくん」

「ん？莉嘉ちゃん？どうしたの？」

「『元カノ』って誰の？」

口元が引き攣る。

答えなくてはダメかな？でもどつちかかとうと答えたくない。正直に答えたとこで僕にメリツトがないのだ。ならここは嘘をつくべき——

「もしかして、プロデューサーさんの!?!」

みりあちゃんの一撃が僕に当たる。クリーンヒット、効果は抜群だ！

とかやってる場合じゃなくて。みりあちゃんの言葉で部屋全員の目線が僕に向いてるんだけど。これ逃げ道あるのかな？

「「「ない」」」

「お願いだから心読まないで」

このプロジェクトにも読心術の使い手が四人もいるなんて………下手なこと考えられないじゃないか！

だからそうじゃなくて、ここをどうやって切り抜けよう？ 選択肢は二つあるんだけど。

一つ目、嘘をついたのがバレて真実を吐かされる。二つ目、正直に話す。

どうしよう、まともな選択肢が存在しない。ていうかどっちとも暴露することになっているじゃないか。

うまく切り抜ける方法がないか模索していると、ポケットに入っているスマホが震える。メールだろうか？

スマホを取り出し、メールを見るとそこには高垣さんからのメールがあった。

『From 高垣さん

To 蒼崎弘弥

件名 飲み会の場所と時間

三時間ぐらい前に約束したの覚えてますよね？今からでしたら、みんな揃って行けるのでどうでしょうか？

エントランスにいますので、仕事が終わっていたら来てください。それでは」

ナイスタイミング！と心中で親指を立てる。今、先ほどの黒歴史書物は僕のカバンの中にある。なら取る行動はただ一つ。

「ごめんね用事が入ったから僕はこれで！」

「あ！」

僕はで口に向かった走り始める。すると、僕を追ってきたのか、ちひろさんが肩で息をしながらプロジェクトルームに入ってくる。

「ちよつと、蒼崎さん……早すぎ、ですよ……！」

確かちひろさんも誘われていたはずだ。ちよつとよかった。探す手間が省けるし、そしてこの場から逃走できる。一石二鳥とはこの事を言うのだろう。

とりあえず、ちひろさんの腕を掴んでエントランスまで急ぐ事にする。

「という事で行きますよちひろさん！」

「どういう事なんですか？！」

後でなんでも奢るので許してください、と心の中で謝りつつ、僕はエントランスまで急いだ。



「それでは乾杯〜♪」

「乾杯！」

「か、乾杯……」

あれから、高垣さんと高垣さんが誘った十時さんと合流して現在居酒屋である。エントランスに着いた後、ちひろさんがものすごい笑顔で迫ってきたけど、後日ご飯を奢るという事で許しを得た。いや、もう本当に怖かった。

その後に僕を見た十時さんが抱きついてくるわとかで時間は取られたが、まあ気にする必要はないだろう。え？十時さんに抱きつかれた感想？……一言で言うなら凄かった、としか言いようがないよねあれは。一瞬意識が飛びそうになった。

まあそんな事は置いておいて、実は僕は居酒屋に初めて来た。そして、お酒を飲むのも今日が初めてである。成人式？友人に飲まされそうになったけど、逆に無理やり飲ませてやって僕は飲んでない。

「あれ？どうかしたんですか〜？」

「あ、いや、なんでも……」

「もしかして、お酒飲むの初めてだったりしますか？」

ちひろさんがニコニコしながら聞いてくる。というかこの人酒飲むの早っ！もうジョッキの中身ないじゃん！

「まあ、そうですね……………」

「そうだったんですか。ならこっちのスカツシユ飲みますか？気分がスカツシユしますよ？ふ、ふふ……………」

空気が凍った気がした。というより時が止まった気がした。なんか本当にこの人すごいよなあ。会う前は高嶺の花っていう印象があったのに、今じゃダジャレ好きの25歳児みたいな印象が…………。本当に346プロ大丈夫か？

「とりえず飲んでみたらどうですか？以外に美味しいかも」  
「で、では……………」

僕は一気にジョッキの中身のビールを煽る。しゅわしゅわとしたのは炭酸みたいだが、そこまで甘くはない。というより想像した事もない味だった。お世辞にも非常に美味しいとは言えないが、これがなぜか飲むのがやめられない。というか普通に美味しい。そして僕はジョッキの中身を全て飲み干した。

「おお、いい飲みっぷりですね」

「蒼崎さんは意外といけるんですね」

「これなら誘った甲斐がありましたね」

確かに、誘ってくれなければ酒を飲むこともなかったし、高垣さんに感謝感激雨嵐だね。

「それにしても意外ですね。高垣さんが十時さんと飲んでるなんて」

「実は、十時さんを誘うのは初めてなんですよ。彼女はまだ未成年ですし」

「えっ!? そうなんですか!」

「はい、そうですよ。それと、私は何もなかったから来たんです。それにしても、プロデューサーさんと飲むとは思いませんでした。他の部署の人でも、プロデューサーさんとご飯に行く、なんて経験今までほとんどありませんでしたから」

「僕もです。まさかプロデューサーになってアイドルのお二人とちひろさんと飲むなんて思いもしませんでしたし」

「そういえば、蒼崎さんがプロデューサーになった理由ってなんでしたっけ?」

ちひろさんが思い出したかのように僕に聞いてくる。プロデューサーになった理由か……。一つしかないよね。

「母さんに勝手に申し込まれた、ですね」

「それはそれで凄いですね……」

「よくそれで続けようという気になりましたね。辞めようとは思わなかったんですか

？」

高垣さんが普通なら誰もが思う事を聞いてきた。多分、僕の友人に聞いてもそうなるだろう。どうして辞めないの？だとか、自分がやりたい事やりやいいじゃんとか。言われそうな気がする。いや、割と本気で。

「辞めようとは思いましたよ。でも、それまで別段したいと思つた事ありませんし、それに、いいきっかけだったんですよ。『普通』っていう柵に囚われているんじゃないかと、少しぐらい冒険してみようって。今までそういう事なかったものですから」

僕は苦笑しながら言う。確かにいいきっかけだったとは思ってる。何もしないし、ただ一つだけ夢を抱えたただけでのうのうと暮らすのは、なんというか……嫌だと思つただ。

自分の才能や実力がそこだけで発揮されるものなのか、それとも……まだ見ぬ可能性があるのか。そのきっかけが『勝手に応募』だったのだ。

まあ最初は嫌だった。正直言つて面倒くさかった。でも、今思うとあそこで耐えたのは正解だと思うのだ。今日始動したプロジェクトで、彼女達がアイドルとして輝くのを間近で見られるのだから。しかもその支えになれるのだから。万年裏方をやってきた僕にとってはこの上ない仕事なのだ。

と言つても僕の夢は捨てる気はないんだけど。



「なるほどく……。確かにそうですね。私も、自分の可能性つてものがアイドルだけつていうのはちよつと……」

「蒼崎さんの言う通りですね。私も思つた事ありましたよ。私は事務員のままでいいのかーつて」

「いや、ちひろさんは事務員が一番合つてると思います」

「なんでですかーっ！」

「まあまあ。それにしてもいいですね、そういうの。私もそんな頃があつたなあ……」

「いや、十時さんそこまで年取つてないでしょう？」

「私はー……どうだつたかしら？」

「聞かないでくださいよ」

僕はビールを煽りながら言つた。つていうか十時さんつて何歳なんだ？大学生つて言われたら普通に信じちやうよ？でも、未成年つて高垣さんが言つてたし……本当に何歳なの？

すると、ちひろさんが何かに気づく。

「なら、蒼崎さんつて元はと言えば何になりたかつたんですか？」

……：そーいや言つてなかつたね。まあわざわざ言う必要もないしね。というか言う機会なんて今までほとんどなかつたし。

高垣さんと十時さんも何なのか気になるのか、こつちを見ている。だけどなあ、ここで馬鹿正直にいつてもね……。ぶっちゃけ、話すのが恥ずかしい。

「恥ずかしいので言いません」

「「ええ……………」」

「残念そうな声出しても言いませんからね」

「「……………」」

「な、泣きそうな顔でこつち見ても言いませんからね!？」

「まったく、その手にいつでも乗ると思ったら大間違いですよ。残念ですが、こつちも色々と学習してきてるんです。そう簡単にかつ何回も引つかかたてたまりますか。」

「その後も僕ら四人は談笑しながら晩餐を楽しんだ。」

「帰宅後に酔いが回ってきて、花梨が酔いを覚まさせるために僕を蹴飛ばしたのは別の話。」

## 頑張りすぎには注意が必要です。

どうも、女性にはどうも生涯勝てそうにないと自負している蒼崎弘弥です。本当どうしてこうなったんだらうね……。

そう思う僕ですが、今は平穏な時を過ごしております。机に向かいながら、気分転換にと思つて買った紅茶を飲みつつ過ごす昼下がり。これ以上の平和がないと思う。大学では友人に弄られ、事務所にあの子達がいれば……まあうん、言い方を変えれば賑やかなのだが。

僕も少しぐらいは静かに過ごしたい時があるのだ。かといって、仕事が捗っているかというところというわけでもなく、

「はあ……全然進まない」

ということで、本日一文字たりとも文字を入力しておりません。なぜか今日は頭痛や目眩がして体がだるい。何か温かいものを飲んで少し休憩すればどうにかなると思つていたけど、少しマシになつたぐらいだ。

今日は家で休めば良かっただろうか？ いやでも今は頑張らなくては。

先日武内さんから聞いた話によると、美嘉さんから卯月、凜、未央の三人を貸してほ

しいと言われたらしい。次のライブのバックダンサーとして起用したいらしい。

そのため、その三人は美嘉さんと今日もレッスン中である。他のみんなはその見学と  
いったところだ。

僕としては、三人に限ったことではないが、他のみんなが頑張っているというのに  
心のはどうかと思うわけだが、どうも体が言うことを聞かない。今でも気を抜けば倒れ  
そうなくらいだ。

「風邪、だろろうな多分……」

と眩きながらだるい体を無理やり動かす。今日は今入力している資料が終わったら  
帰ろう。このままだとみんなに迷惑をかけてしまう可能性がある。

そう思った矢先、視界が揺らぐ。ヤバイと思つた瞬間には時すでに遅し、机に突つ伏  
してくれればいいものを体が横に傾き、床に倒れ伏す。

頭がボーツとする。今までにないくらいに視界がぼやける。立とうとするが、まあ立  
てるわけもなく腕を動かすだけでも精一杯である。

鞭を打ってきた身体が限界を迎えたのか、僕の意識は自らの意思に関係なく、暗闇へ  
と消えていった。

side 神崎蘭子

我は……じゃなかった。私は神崎蘭子です。さっきまで卯月ちゃん達のレッスンを見ていましたが、自分が情けなくなつて出てきました。

卯月ちゃん、凜ちゃん、未央ちゃんの三人は私達より遅く来たのに生き生きしていて、私の遙か先を走っているように思えました。城ヶ崎さんに選ばれなかったみんなも、それを見て自分も頑張ろうとしていて、なんとというか置いていかれている気がしました。

自分にはあんなことはできない、身の丈に合つてない、などいろいろな考えが浮かんでくるんです。その度に自信をなくして……。

「こんな時、プロデューサーさんならなんて言つてくれるかな……」

武内さんは頑張りましたよと言います。ただ、蒼崎さんは……何言つてくれるのかな。

あの人は何故か私の中二口調あの中二口調の時の言葉もわかつてくれるし、妙に私達を氣遣つて元氣付けてくれる。あの人は何を考えてそうしているのか、いつもそう思うけど口にはできない。

そんなことを思っていると、私はいつの間にかプロジェクトルームの前にいた。プロデューサーいるかな……？

「し、失礼しまーす……………」

中はしんと静まり返っており、物音一つしていないかった。蒼崎さんがいる時は微かにパソコンのキーボードを打つ音が聞こえてくるはずなのだけれど、聞こえないということはないの、かな……………?

そんなことを思いながら併設されている執務室のドアの前に立つ。いつもは勝手に入るなど言われているけれど、大丈夫、だよな。

そーつとドアを開いて中を確かめると誰もいない、けどパソコンの電源は付いているし椅子も倒れている。何があつたんだろう…………。乱闘、は蒼崎さんの事だからないよね。

ふと、荒い息づかいが聞こえてきた。誰もいないはずなのに……………もしかして……………幽霊っ!?!こんな真昼に!?!

恐る恐る音がする方を見ると、そこにはスーツを着た特に特徴がない人が横たわつて……………

「あ、蒼崎さん!?!」

そこには苦しそうな表情の蒼崎さんでした。健康的ではなくひどく赤くなつた顔、苦しそうにしかめている眉、それを見るだけで蒼崎さんの今の状態が良くない事はわかる。近寄つて額を触ると、物凄い熱だった。風邪だということはすぐに分かった。で

も、どうしよう。

誰かに伝えられたらいいのだけど、携帯はいつもの服に入れたままでジャージのポケットに入れてこなかったし、このまま放っておくのは絶対に良くないし……ああもうどうしたら……！

「と、とりあえず寝かせないと……！」

私は急いで行動に移した。

side 神崎蘭子 out

☆♪  
♡◇

後頭部に感じた柔らかい何かによつて僕の意識は覚醒した。確か、さつきまで執務室でデスクワークをしていて、そこから……そうだ、倒れたんだった。

それにしたつて後頭部に柔らかい何かがあるのは間違っているような気がする。あるとしても硬く冷たい床だろう。ならこの感覚はなんなのか、それを確かめるために重く閉じた瞼を開ける。

そこに見えたのは、天井と銀髪ツインテールのジャージを着た蘭子だった。

「目醒めたか『瞳』の持ち主よ」

「らん、こか……?何して………ツ!」

起き上がろうとしたところで凄まじい頭痛が襲う。こんな酷い風邪は初めてだ。それに上半身を起こそうとするけど、それさえも満足にできない。

「ね、寝ている『瞳』の持ち主よ!まだ時ではないぞ!」

「で、も……」

「ふつ、私はそんなことには屈しはしない。そんな脆弱な魂はこの身に宿していない!」

「ん………じゃあ、ごめん」

頭痛と同時に襲ってくる気だるさが考えることを放棄させる。どうも脳が全く働かない。そのため、蘭子が言ったことを鵜呑みにしてしまう。

「蘭子………どうしてここに?」

「ふえ!いや、その……」

「別に、中二口調じゃなくてもいい、ぞ。それで話されると、多分今じゃ理解できないから」

いつもなら分かった蘭子語が分かるのだけれど、この状態ではほとんど理解できない。さっきの言葉で分かったの『『瞳』の持ち主』ぐらいだ。



「う……………うん……………」

「で、何が、あつた？」

僕が聞くと、暗い表情になり目を潤ませる。確か、この時間はレッスンだったような気が。それに、蘭子の服装ジャージだし。

これらを視野に入れて考察すると、脳が正常に機能していない僕でもわかる。途中で抜けてきた、それで大方あつているだろう。

「……………自身が、ないんです」

「え……………」

「レッスンしてる卯月ちゃん達を見てみると、何も目標がなくて頑張る理由すら見つからない私なんかがいいのかなって……………」

ああ、なるほど。そういうことか。あの三人は、先輩アイドルに選出されてその挙句レッスン風景に圧倒され、あんな風になれるか、そして、そんな風に思っている自分が情けなく、同じように並んで立っていていいのか。そう思ってしまったのだろう。

「ちよ、プロデューサーさん!？」

僕は無理やり起き上がりソファーに座りなおし、蘭子を見る。不安からか目には涙がたまっている。……………多分僕を心配しているとこもあるかもしれないけど。

頭を襲う痛みを振り払い、脳を無理やり働かせて言葉を紡ぐ。

「確かに、今は何の目標がなくて頑張る理由がなくて情けなく思う時があるかもしれない。でもね、そう思うのは仕方がないことなんだよ」

「仕方が、ない……?」

「人は他人を見て自分とどっちが優れているか、なんて勝手に勝手に決めつける。まあ例外もいるけどね。まさに今の蘭子の状態さ」

僕の言うことに一理あるのか、真剣に聞き入っている蘭子。とりあえず僕はそのまま続ける。

「それは少なからず蘭子だけが思っていることじゃない。他の選ばれなかったみんなも思っているよ。『自分で自分が選ばれなかったのか、どうしてあの子達なのか』って。僕もその立場なら絶対に思ってるだろうし」

「みんな、も?」

「そう、みんなも。レッスンス室に残っている子達はそれを受け止めた上でレッスンス風景を見ている、と僕は思う。というか思いたい。まあ、受け止められないというのが真実なんだけどね。だからといって、焦らなくていいんだ。目標は頑張りながら見つければいい。頑張る理由なんて今はいらぬ。がむしゃらに頑張ればいいんだ。そうしていれば、見えてくるよ。確証はないけどね」

苦笑いしながら言う。蘭子は思うところあったのか、呆気にとられた感じで呆然とし

ている。うーん、そんな表情になること言ったかな？

「承諾し……いや、分かりました！とりあえず、頑張ってみます！」

「うん。それと、キヤラは保った方がいいよ。けど、僕の前では中二キヤラじゃなくてもいいからね」

「うっ……承諾」

って言ったそばから中二キヤラに戻ってません？まあこの際そんなことはいいか。そう安堵していると、先ほどまで感じなかった頭痛が一気に襲ってくる。堪えきれずに頭を押さえると心配そうに蘭子が声を上げる。

「だ、大丈夫ですか……？」

「あ、うん。多分少し横になれば大丈夫、なはず……。だから、今からでも遅くないからレッスンに戻ったら？時間はまだあっただろうし」

「……………はい」

ものすごく間が長いなあ……。多分僕のことを心配してくれているからなんだろうけど、流石に二十歳になってまで年下に心配されるような男ではない。

渋々了承した蘭子は、所々こつちを振り返りながらプロジェクタールームを出て行った。僕は重い足取りで執務室まで毛布（プロダクションに泊まり用）を取りに行き、部屋を中心近くにあるソファーに横たわる。疲労と熱による気だるさが有頂天を迎えた

のか、横になった途端すぐさま睡魔が襲ってきた。

そのまま僕は、本日二度目になるが意識を手放した。

☆  
♪  
◇

卯月達はレッスンを終え、プロジェクトルームに戻っているとところだった。

「蘭子ちゃん、顔怖いよ?」

「え……っ!?!」

各々会話を交わしていたのだが、俯いていた蘭子にみりあが心配そうに見上げる。その言葉を聞いた他のメンバーも蘭子を見る。

蘭子は慌てる心を奥に追いやり、平穏を装い決めポーズをとる。

「ふっ、そんなことがあるわけにやいだらう」

「……………今猫語になったにや」

「ふえ!?!」

「何かあったの?」

全員蘭子を心配するが、心配無用といった風に胸を張る。

「さ、先程のは私の前世の過ちである。故にこの現世に因果に関係などない!」

「う、うん、大丈夫ならいいけど……」

「無理はしないでよ?」

「う、うむ」

そう話しているうちに一行はプロジェクトルームの前まで来ていた。蘭子は、レッスンを抜け出していた時のことを思い出してギョツとするが、それを知らない他のメンバーは何の躊躇いもなくドアを開ける。

蘭子はもう起きているだろうかと思うが、部屋の中からは何も聞こえてこなかった。ということはなく、静かな寝息だけが聞こえてきた。

「……誰か寝てるのかな?」

美波は疑問符を浮かべながら呟く。蘭子は寝かせたはずのソファアを確認するため、早足で部屋に入る。

ソファアには部屋を出る前みたいに青白くなく、血色のいい顔色をした弘弥が寝ていた。気持ちよさそうに寝息を立てているのを見て、蘭子は安堵のため息を吐く。

「ん? プロデューサーさん寝ているんですか?」

「わーお、これは気持ちよさそうに寝てるねえ」

「ダー、私も、眠たくなってきました」

「なんか安堵のため息ついてたけど、蘭子は何か知ってるの?」

勘のいい凜は気付いたのか、何か知っていそうな蘭子に問う。蘭子はレッズンを抜け出した後のことを話した。執務室で弘弥が高熱を出して倒れていたこと、それをソファーに寝かせていたことを。

「うえ〜!? Pちゃん風邪ひいてたによ〜!?」

「まあ、二徹三徹を余裕な顔でするような人だからね。仕方ないんじゃない?」

きらりのようにとは言わなくても杏以外は驚くが、杏は眠そうな顔で平然に言っただけだ。

「に、二徹……?」

「二日徹夜のこと。目の下のクマを見る限り、プロデューサーろくに寝てなかったんじゃない? ね、プロデューサー」

「……………なんだ、気づいてたのか」

弘弥は杏に指摘され、気まずそうに上半身を起こす。蘭子は目を向いて驚き、声を荒げて弘弥に問いかける。

「プ、プロ……『瞳』を持ち主、もう平気なのか!」

「まあ、なんとかね。流石に平均睡眠時間減らしすぎたかな……」

弘弥はバツが悪そうに頭を掻く。未央は気になったのか、

「して、その平均睡眠時間は?」

「……………三時間ぐらい?」

『や、三時間!』

弘弥の言葉にその場の全員が声を上げて驚く。社会人の睡眠時間は、通常ならば六、七時間が妥当だろう。だが、弘弥は学生にもかかわらずその三、四時間も少ないのだ。驚くのも無理はない。

「まあ大丈夫だって。さて仕事仕事——」

『寝ろっ!!』

シンデレラプロジェクトのアイドル達がこれまでにないといった風に声をそろえて叫ぶ。弘弥は聞こえないふりをして執務室へと足を進めるが、凜、アナスタシア、みりあ、李衣菜が制止する。

「行かせないよ」

「ダー! ムリ、ダメです!」

「プロデューサー、休んでなきやダメだよ!」

「流石にそこで無理するってのはあんまりロックじゃないよね」

相手が女子なため、無理やり引き剥がすことは憚られ、身動きが取れなくなる弘弥。そんな弘弥に美波とみくは執務室にあつた弘弥の荷物を突き出す。

「今日は帰って休んでください」

「適度な休息も大事にや」

「えー……」

あからさまに嫌な顔を見ると、弘弥の前に智絵里が携帯電話の画面を弘弥に見えるように前に差し出す。

「えつと……花梨ちゃんに迎え頼んでありますから、大丈夫です、よね」

「一番大丈夫じゃない人に連絡しちゃってるじゃないか！ということはすぐに「お兄ちゃん!!」うわあ……早い事雷光の如きだね……」

弘弥の言葉を遮ってプロジェクトルームのドアをバンツと勢いよく開けられる。そこにいるのは茶髪のサイドテールの弘弥の妹、花梨だった。

「げっ、花梨!」

「げって何よ!迎えに来てあげたんだから」

「いやもう熱も下がったし……」

「お姉ちゃんとお兄ちゃんも早急に帰ってこいって言うてるの!それに、美那萌も泣きじゃくってるんだから早く動く!」

「ええ……」

花梨は弘弥の腕を鷲掴み引きずっていく。まだ全快ではないため力が思ったように出ていないのか、なすがままである。



「プロデューサーさんには私が伝えておきますから！」

「ちゃんと直してくださいね〜」

「や、闇に飲まれよ！」

アイドル達に見送られながら、弘弥は実の妹に引きずられながらプロジェクトルームを退出した。

この後、帰宅後に花梨によって強制的に（物理的に）眠らされたのは別の話。

☆♪  
◇

蒼崎弘弥P活動報告⑦

妹は……強し………ガクッ

## CDデビューの件で一波乱です。

「……………どうしたものか」

僕こと蒼崎弘弥は現在ちよつとした壁にぶつかっています。その壁というのが結構厄介なもので。

「デビュー順を考えるとこうなる。でもそれだとストレス溜めたり不満が出たり……どうすりゃいいのこれ」

風邪なら十分な休暇を取れ、と自宅に強制送還された後に武内さんとちひろさんからそう電話で言われた。そのため、卯月、凜、未央のローバックダンサーとしてだがロー初ステージを見逃してしまった。武内さんに聞くと、上々の出来だったという高評価だった。

そして、それに合わせてCDデビューということになったのだが、これがこれで問題があつた。

まず、数段階に分けてのデビュー。第一陣、第二陣などデビューするのをずらしていく。だが、結構リスクが高い。これだとぶつ倒れた時に蘭子が言っていたように、劣等感を覚えて『周りのみんなはデビューしていくのに、どうして私だけ?』と思う可能性

がある。それが万一にでもレッスンなどに反映してもらっては元も子もない。

次に、組み合わせである。武内さん達がユニットを組んでくれているので、僕はそれを伝えるのが役目なのだが、いかんせんユニットメンバーに問題があるのだ。

今回は第一陣として、アナスタシアと美波の二人、卯月と凜と未央の三人といった感じでユニットを組んでもらうことにする。美嘉さんのコンサートで勢いづいているため、このタイミングで間違いはないと思う。のだが、

「これだと余計に反感を買うんだよな……」

おそらく、これを発表した際に不満の声が出るだろう。『なぜあの三人だけ優先されるの?』とか。大いにあり得る。この件を全面的に任せられてる僕としてはどうにかしたいのだが……。

だが、予想できるからといって解決策を練っているが、思い浮かばない。まだ風邪治ってない……事はしないな。一週間休めば嫌という程でも治る。

「とりあえず様子見しかないねこれだと」

解決策を保留にし、僕は執務室をあとにする。だが、この保留が後の事件を招く事をこの時の僕は知らない。

『し、CDデビュー!?!』

アイドル達をプロジェクトルームに集め、例の件の事について告げると声を揃えて驚かれた。いや、なんでそこまで団結してんのさ……。

「ええ、まあ……」

んでなぜ僕は圧倒されてんのさ。自分で情けなく思うよ。………うんこれ結構堪えるね。やめよう、自分で自分を貶すのは。ダメージが大きすぎる。

「今回は美波とアナスタシアの二人、卯月と凜と未央の三人でユニットを組んでもらい、CDデビューという事になる」

僕が伝えると、アナスタシアは美波の手を取り喜び、満更でもないのか美波も顔を緩ませる。卯月達三人は、まあいうまでもないよね。

でもここからが本題。おそらく不満が出てくる。おそらくじゃない。僕の経験上からいって必ずだ。

「ねえ、みくたちはどうなるの?」

その瞬間、浮かれた空気は消え失せ、重い空気が流れ始める。デビューが決まった五人も『しまった』というふうな表情が暗くなる。

「Pくん、私達はどうなるの?」

「どうなるのプロデューサー？」

「みくたちもデビュールできるの？」

「……………」

理解はしていた。こうなる事も、それで空気が重くなる事も。だが、実際にそうなつてしまうと頭が真つ白になり、思うような解答が浮かんでこない。

結局、僕が出した答えは——、

「今は検討中なんだ。……………ごめん」

謝罪と保留だった。悩んだ末に出てきた答えが最も最悪な答えだった。

「そう、なんだ……………」

「だけど、デビュールを前提に企画を進めていくつもりだから、あまり気を落とさないでほしい」

とは言いつつも内心では無理だとわかっている。ただでさえ、先輩アイドルに選ばれなかったのに、この仕打ちだ。気を落とすなという方が無理だ。

とりあえず僕は全員に今日の予定を伝えて、最初の予定であるレッスンへと行かせる。たちまち、部屋にはいるのは僕一人だけになる。

「……………逃げてばっかだなあ、僕は」

ソファアに座り込み、頭を掻く。こんな自分が嫌になる。でも、その後悔したとして

も、言ってしまったものら変わらない。落ち込んであすればよかった、ではなく、これからどうするか考えるのが先決だ。

「よしつ、気合い入れ直して仕事だ仕事！」

頬を叩いて気合を入れ、執務室へと向かった。

☆  
♪  
◇

CDデビューへと順調に事が進み、ユニット名も『ラブライカ』と『ニュージエネレーションズ』というふうに決まり、歌の収録へと順調に歩み続けていたはずだった。でも、それは突然起きた。予想できていたはずの最悪の展開が。

「プロデューサーがみく達の要求を呑んでくれるまで、ここから動かないにゃー……!!!!」

突然聞こえたみくの声に何事かと思っただけで急いで来てみると、そこには346プロのカフェを占領したみく、莉嘉、杏の姿があった。

「あ、プロデューサーさん！」

「ちよつと、これ一体どういう事？」

「これは……ヤバいんじゃないかな……」

ニュージエネレーションズの三人は心配そうに立て籠もっている三人を見ている。「……………くそつたれが」

僕はというと、小さな声でそう呟いていた。分かっていたのに行動しなかった。そんな自分に腸が煮えくり返るような怒りを感じた。

最低だ。分かっていたのになぜ行動しなかったんだよ僕は……………!

「みく達もデビュ―させろにゃー……!!」

「そうだそうだー!」

「え、杏はそんなの聞いてないよ……………?」

……………最後の今は放っておこう。今はあの二人の説得が先だ。

「なんで、みく達じゃないの……………?」

大声で叫んでいたはずの抗議の声が途端に小さく涙ぐんだものになる。

「なんで、なんでいつも頑張ってるみく達じゃないの?なんで卯月ちゃん達なの?私達だっけいつかそういう日が来るんだって思った。思ったのに、なんで!」

みくの頬から光る粒がこぼれ落ちる。涙。顔を歪め、涙を流していた。今まで押しとどめていた感情を全て吐き出すかのように。

「卯月ちゃん達より先に来て、頑張って、辛い事も苦手な事にもチャレンジして乗り越えようとして、なのはどうして!?!なんでなの!?!」

みくの声が僕の心に突き刺さっていく。僕は知らず知らずのうちに俯き、齒を食いしばっていた。この言葉を受け止める責任が僕にはあるのだから。

「こんなんじや、今までやってきた事はなんだったの……？？意味なんてなかったの……？」

悲痛な声が辺りに響く。僕以外は悲しく感じるかもしれない。でも、僕は激烈な痛みと共に体を蝕んでいく。後悔と嫌悪が自分を満たしていくのが分かる。

「みくだって……デビューしたいよ……」

みくは泣きじやくりながら小さい声で言った。それは先程までの言葉よりも深く、僕の心に突き刺さる。

これが逃げた代償。僕にはそう受け止めるしかなかった。どうすれば……僕はどうしたら……

その時、耳元で誰かが囁いた。

「逃げんなよ」

その声でハツとする。何をしていたのか。後悔しないようにって決めたのに真っ先に自分がそうしてどうするのか。否、今する事はそんな事じゃない。



僕は一步前に出て、みくの顔を見ながら告げる。

「何にや……………Pチャン」

「……………すみませんでしたっ!!」

僕は地面に頭がつくんじやないか、という勢いで頭を下げる。

「現在、みんなのデビューも視野に入れて企画を進めているんだ。第一陣、第二陣といった風に分けてデビューさせていく」

「……………本当なの?」

今まで沈黙していた莉嘉が顔をひよこつと出して僕に問う。

「ああ。だから遅くなるかもしれない。でも、絶対に、必ず全員デビューさせる。だから、待っていてくれないか?」

僕が問いかけると、返答の代わりに嗚咽が聞こえてくる。

「それを先に言つてにや……………」

枷が外れたのか、大粒の涙を流すみく。とりあえず、難所を越えたことで安堵のため息を吐く。生きた心地がしないよ……………。

「よ、良かったです……………」

「一時はどうなることかと思つたよ……………」

「というかそれを先に言いなよ」

「面目ない……」

全くだ。どうして思いつかなかったのだろう。最初から言っていればこんなことはならなかったのに。

「やれば出来んじゃないか」

と、後ろの方から男の声が届いてくる。さつき耳元で囁いていた声と同じ声だ。というかこの声は……！

僕は振り返って声の主を探す。だがいない。周りを見渡すと、その声の主は白衣を着ていて、プロダクションに背を向けて歩いていた。

「どうかしたんですか？」

「あの人……確かプロデューサーに何か囁いてたよね？誰なの？」

ニュージエネレーションズの三人は気づいていたのか、僕に聞いてくる。まさかここにいるとは思わなかったけど、というかどうしてここにいたのだろうか。謎である。

「いや、気にしなくていいよ」

説明するのも面倒なので、はぐらかす。あとで何故ここにいたのか追求しよう、この件を頭の片隅に追いやり、僕はこのあとに待つ謝罪と説教を予想して天を仰ぐのだった。

案の定、カフェの従業員さん達に謝罪し、武内さんから注意を受け、ちひろさんから笑顔で説教を受けた（僕だけ）のは別の話。

☆♪  
♡◇

### 蒼崎弘弥P活動報告⑧

今日は僕のせいで大変なことになった。

忘れないように今後の注意点と目標を記しておこう。

注意点：アイドル達を不安にさせないこと、決定事項はその企画が協議中でも伝える

こと et c.

目標：全員をアイドルとして輝かせる！

これからは人一倍頑張ろう。適度に休息を取りながら。

## 白衣の男襲来です。

みく達の立て籠もり騒動があり、一足早く日記を書き終えた僕は執務室でいつものようにデスクワークに励んでいた——はずのだが……………、

「あー……………集中できない……………」

全く集中できず、仕事が全くと言っていいほど進まなかった。原因は、自分でも分かっていた。

みくの言葉に狼狽え、逃げようとしていた僕に囁いた声の主。どうしてあの人がここにいるのか、理解できなかった。そもそもそんなに暇な人ではないだろう。いつもならどこぞの施設に籠り、「俺の聖域はここだ。ここからは出ない」とか言いそうな重度な引きこもりなのに……………。

そのこと気になって全く集中できない。でもしなければ仕事が溜まる。どうすればいいの!?

そんな葛藤を抱きつつ頭を掻きむしっていると、ドアがノックされる。

「はい、どうぞ」

「失礼しますね」

入ってきたのは、ちひろさんだった。予想外もいいところである。さつき説教されたばかりなのに……。もしかして言い忘れたことでもあったのかな？

「蒼崎さんにお客様が来ていますよ」

「お客様……？」

誰だろう。花梨だろうか。いや、花梨なら何も言わずに激突してくるし、ちひろさんにわざわざ言うわけがない。というか、頻繁に来すぎて、346プロに勤務している人にさえ顔パスで通ってしまう。ここはあなたの遊び場じゃないんですけどね……。

となると、候補が見当たらない。友人にはプロデューサーになったことは伝えていないし、親戚なんて以ての外だ。

ならば、兄貴か姉さんか？……あり得ないね。引きこもり中毒者に完璧（ブラコン）主義者だ。ここに來ること自体、確率ゼロ……

「お兄様がお見えですよ」

「……………はい？」

固まり凍りつく。えっと、嘘ですよね？あの引きこもりが……いや絶対にない。どうせちひろさんのいたずらに違いはない。きつとそうだ。

だが、この時の僕は脳内からあることを排除していた。僕が他人に家族構成を話していないことを。

「よお、弘弥。久しぶりに顔見せに来たぞー」

ボサボサの短髪にメガネをかけているのだが、疲れているのか、全く覇気が感じられない顔の科学者っぽい白衣を着ている青年がそこにいた。

僕はその人を見た途端、無意識に大声を張り上げて叫んだ。

「なんであんたがここにいるっ!？」

何故だ、何故こんなことになった?というかどうしてここにいるんだ!?

「なんでとはご挨拶だな。一年ぶりの感動の再会だろう?」

「感動の再会が勤務先ってどうかしてるだろ!家で待つてろよ家で!」

「ほら、一刻も早く会いたかったっていうか」

「黙れ引きこもりが!」

僕と白衣の奴が言い合っていると、ルームにいたのか、みんなが集まってくる。

ちひろさんによってクールダウンさせられ、落ち着きを取り戻した僕は白衣を着込んだ奴に向き直る。

「で、本当に何の用だよ兄貴」

「いやいや、会いに来たんだって我が弟よ」

そう言い合った途端、その場にいた全員が驚愕の叫び声をあげたのは言うまでもない。



「どうも、弘弥の兄の蒼崎拓真たくまです。どうぞよろしく」

蒼崎拓真、僕の兄貴はみんなに頭を下げながらかつ笑顔で告げる。これにはみんなも驚いたみたいで、

「プロデューサーさんの……お兄さん……？」

「いや、これは驚いたね。まさかプロデューサーにお兄さんがいたとは」

「でもでも、Pちゃんと結構似てる気がすりゅよ〜」

「確かに……似てるかも」

「三者三様の感想を述べていく。うーん、似ているってところは否定したいんだけど……。」

「それにしてもどうして今日なんだよ……？」

「さつき言ったじゃねえか。一刻も早く会いたかったって」

「……………キモッ！」

「沈黙長いしその言葉を実の弟から言われるときつついな……」

嫌悪を込めた表情で最も拒絶を示す言葉を放つと、見るからに落ち込む兄貴。それも

そうだろう。物心ついた頃から顔をあわせることが少なく、親しいと言える仲間でもなかった兄貴にそんなことを言われると気持ち悪いことこの上ない。

「さ、さすがに言い過ぎでは」

「いや、このぐらいでいいんですよ。こんな研究引きこもり中毒者は」

「さつきからえらく辛辣だなおい!？」

「五月蠅いマッドサイエンティスト」

「わあ、弟の言葉が俺の心にグサグサと……」

僕の言葉が兄貴の心にクリーンヒット!効果は抜群というか瀕死まで追いやったよ  
うだ!

「ここまで心を折ればいいだろう、と抱えていたストレスのほとんどを吐き出して話を切り出す。

「まあ鬱憤を晴らすのはこれぐらいでいいとして、本当に何しに来たんだ?」

「この男が何のメリットもなしに動くとは思えない。僕が一番気になるのはそこだ。」

「だから一刻も早くー」

「茶番はもういいから」

「……………成長したなあお前も」

メガネの奥から値踏みしたような目線が僕を貫く。先程より少しだけ目つきが鋭く



なっていた。

兄貴はソファーに深く腰をかけ、真剣な眼差しで僕を見る。僕はその目つきに覚えがあつた。それは真面目な話の時しか見ないものだった。

「実はな……」

「実は？」

「……………家への帰り方忘れたからつれていつてくれない？」

「この愚兄が！自宅への帰り方ぐらい覚えときなよ！というかなんでここまで来れたの！？それが不思議で仕方ないんだけど！」

「いや、弘弥の声が聞こえた気がしたから」

「彷徨つてたのかよ！ていうか携帯は？」

「研究所……」

「これから兄貴つて呼ばずにダメ兄つて呼ぼうかな……」

忘れてた。兄貴が自分の興味あること以外は全くダメなことを。一年あつてないところなことまで忘れるのか。いや、今はそんなことはどうでもいい。それよりも、この愚兄をどうするかが先だろう。

「ちひろさん、仕事終わるまで兄をここに置いていいですか？」

「俺は置物じゃないんだが「黙つてて」……………はい」

僕が問うと、ちひろさんは少しだけ考えるようなそぶりを見せ、すぐに笑顔になって了承してくれた。

……その笑顔にはどんな思惑が含まれているかなんて全くわからないけど。という  
か分かりたくもないけど。

とりあえず兄貴をルームに放置して僕は執務室に戻った。

☆♪  
◇◇

side 蒼崎拓真

ども、弘弥の兄の拓真だ。

弘弥は仕事に戻ると言って執務室というところに入っていった。「仕事終わるまで待  
て」ということらしい。

まあ別にそれは気にしない。携帯忘れたり帰宅するための道を忘れたりした俺が悪  
いのだから。

でもなあ、周囲から感じるこの視線はなんなのか。さつきから黙りこくってこつち見  
てるし。

346プロダクションっていうんだからアイドルなんだろうけど、でもこの視線を感

じ続けるのは居心地が悪い。弘弥のいう通り、引きこもりがちな俺は人の視線には慣れていない。

かといって初対面の女の子にどう接していいかわからない。詰みましたわこれ。

そう思っていると、黒髪のツインテールのちっちゃい子が隣まで歩いてくる。初対面なのに怖くないのね。

「白衣のお兄さん、一つ聞いてもいい？」

上目遣いで見上げてくるツインテールっ子。かわいい。でもな、俺がそんなこと口にしてみる。科学者から通報待った無しのロリコンに成り下がることになる。それだけは避けたい。

「なんだい？」

とりあえず、紳士的な対応を笑顔でする。多分これであつてるはず。

「私ってプロデューサーさんに嫌われてるのかな？」

「うん？ どういうことだ？」

嫌われてる？ 弘弥がこの女の子を？

絶対にはない、と脳内で肯定する。あの弟に限ってそれはない。あれは基本的に誰かを嫌うことはない。よっぽどタイプが合わない人は例外だが。

それにも関わらず、こんな人当たりの良さそうな子が嫌われるなんてことはない。

ということはどういうことだ？何故嫌われてるなんて思ってるのか。そう思っていると、見上げていた顔をうつむかせて悲しそうな顔をして言った。

「だって、この頃お話ししたくてもできないし、私たちを避けてる気がするし。それに、話しかけても知らんぷりするんだもん！」

徐々に大声になって声を荒げて言った。その次の瞬間、何処かからガタツと何か倒れる音がした。まあ気にせんでいいだろう。

それにしてもあいつが無視ね……。何の間違いだろうか。というかこの一年であいつに何があつた？

「あー、それ思った！Pくん話しかけても無視するんだもん！前なんて服を引つ張つても気づかなかつたもん！」

お次は金髪の快活な子がソファアの背もたれあたりから乗り出して口を尖らせて言った。服を引つ張つたのに無視？うーん、ますます分からん。

「ダー、目の前に立つても、ズプスチエノスツ、無視、されましたね」

今度は銀髪碧眼の容姿端麗なハーフだ。こんな子もアイドルにいるんだな、と思いつつ、こんな子も無視したのかよ。いかん、そろそろ執務室とやらという場所に殴り込みたくなってきた。

銀髪の子が発言した後再度何かが倒れる音がした。さつきから一体なんなんだ？

どんな怪奇現象だよ全く。

「うん、話は分かった。とりあえず弘弥あのかぶん殴つてくるな」

「いやいや、流石に飛躍しすぎでしょ」

ほら言うじゃん。拳で（一方的に）語り合えば通じることもあるって。

黒髪長髪の制服を着た子の言葉により思いとどまり、真剣に考察する。

あの弟が人を無視するなんてことは滅多にない。ならば考えられるのは、余程嫌っている、もしくは話できるような状況じゃなかったか。前者はこの子達の性格上あり得ない。無視されたことを気にして悲しそうな顔をするような人に悪い人はいない、と思う。それに、こんな可愛い女の子を嫌う弟なんて俺は信じない。

となると後者の話ができるような状況じゃなかったか。話ができるような状況じゃないってどういうことだ？音楽聴きながら歩いてたとか、それとも寝ながら歩いて……た……………。

なるほどね。そういうことか。母さんから聞いてた話を含めると思いあたりがある。

「一つ聞いていいか？」

「何〜？」

「その時弘弥の足取りはどうだった？」

「足取り？そんなのが関係あるのかにや？」

関係はある。というかそれによって何が原因か判断することができる。

「ミナミ、覚えてますか？」

「うーん、そうだったようなそうでなかったような……。どうだったかな蘭子ちゃん」

「うむ。混乱しており、力を秘めし瞳は封印されておったぞ」

「えつと……………」

「なるほど、おぼつかない足取りで目はほとんど閉じていたと」

『え、今ので分かったの!?!』

周囲から驚きの声上がるが気にしないことにする。よし、結論は出た。

「無視した理由は、多分寝ながら歩いてたんだろうあいつ」

「寝ながら歩いてた？」

「杏子ちゃんみたいだにいく」

「杏子は寝ながら歩かないよ。寝る時は寝転がる」

それが普通なんだけどなあ。頭を掻きながら俺は執務室のドアへと向かい、ノックせず

に開け放つ。するとそこには地面に倒れ伏す弘弥の姿があった。

「の、ノックぐらいしないと……………ってプロデューサーさん!?!」

「い、一体何、が……………?」

「大丈夫ですか?!?!」

女の子達は驚いているが、これも想定内。さっきまで聞こえていた何かが倒れる音は、こいつが椅子ごと倒れる音だったというわけだ。

それを察したのか、先ほどの黒髪長髪の子はため息をついている。

「はあ、またか」

「またなのか。というか名前聞いてなかったな」

「そうだったね。私は渋谷凜。よろしく」

「年上にも物怖じしないその性格、大物とみだが敬語ぐらいは使おうな」

本当にこの頃の若者は……まあ俺も若者だけど。

そんなことを思いつつ、弘弥の元に寄り添う女の子達を見ながら俺は笑みを浮かべるのだった。

その後、仕事は早めに終わったが帰路に着いたところで弘弥が力尽きて少しだけ迷って苦労したのは別の話。

考えは脳内に止めておくことが重要です。

昨日、気がついたら全く知らない場所で兄貴におんぶされていたという奇妙体験をした蒼崎弘弥です。あの時は夢かと思つて目を閉じたけど、二度寝しなくてよかつたと思つてる。してたら、おそらく次に目を覚ます時は真つ暗な暗闇の中だろう。それは御免だ。

ということがあつた翌日、僕はプロダクションであることに励んでいた。そのあることとは、

「えつと……ここにxの値をはめ込んで、連立方程式を解けば……」

数学の問題集だった。学年的には高校二年生レベル。何故しているのか。それは大学の課題だからだ。やらなきや単位が落ちるし、印象も下がる。それだけは免れたい。それに、僕が通う学部にもこの勉強は直結するのだ。

「蒼崎さん、何、やってるんですか……？」

後ろから控えめに聞いてくるのは緒方智絵里ちゃん。シンデレラプロジェクトのメンバーだ。

「ちよつと勉強」



僕は短く言うと計算に戻る。本日の執務は全て終わらせているため、武内さんやちひろさんに何か言われるという事はない。

智絵里ちゃんは、僕が解いている問題を見て顔を青ざめる。確か智絵里ちゃんは高校一年だったはず。まあ数学が苦手ならこれを見た瞬間青ざめるのも無理はないよね。

「分からないなら教えてあげよつか？」

「え……？い、いえ……別に……」

「遠慮する事ないって。その方が僕にも勉強になるし」

「……………？じゃ、じゃあ、よろしくお願い、します……」

智絵里ちゃんは俯きながらそう言うと、僕の隣に腰をかける。向かい側でもよかったんだけど……。まあ教えやすいからいいか。

と、なんやかんやで時間は進んでいき、一通り智絵里ちゃんの分からないと言っていた問題は解決する事ができた。

教え終わった時に、智絵里ちゃんのまるで桜が一瞬で満開になったかのような笑顔は強烈だった。もう少しで理性が持って行かれるところだった。

耐え切った理性に心の中で敬礼しつつ、解答を再開しようとする、事務所の扉が勢いよく開かれた。

入ってきたのは、未央、卯月、アナスタシアの三人だった。

意外な組み合わせだね。お兄さん、未央、卯月ときた時点で次は凜が来ると思ってたよ。そしたらまさかのアナスタシアだよ。不意を突かれたね。

まあ、だからと言って問題があるわけではないのだけでも。

「おっはようございませーす！」

「お、おはようございませーす！」

「ドヴロイーエ ウトラ。おはようございませす、です」

「お、おはようございませす……」

「ああ、おはよう」

明るく挨拶する三人だが、僕は彼女らの方向を見る事もなく手を振って応じる。今、僕にとっては鬼門の確率をしているから気を配るとかできない。

「ぶー、プロデューサーの反応が冷たい」

「何やってるんですか？」

「チト ヴィ デライエーテ？」

仕事以外の事で何をしているのか気になるのか、先程の智絵里ちゃんのように覗き込む三人。そしてそれを見るや否や、卯月と未央は凍りつく。アナスタシアは……まだ習ってないから分かんないよね流石に。

「どうした二人とも」

「プ、プロデューサーさんが……………」

「あんな難敵をスラスラと解いていくなんて……………」

「裏切ったね（りましたね）プロデューサー（さん）!!」

「いや、何をどう裏切ったのか教えてくれないかな?」

さつきから話が見えないんだけど。まあそれはさておき。

後で気付いたが、おかしい。この時間、ラブライカとNGはレッスンのはず。どうしてここにいるんだ?というかどうして僕は彼女らがジャージを着ている事に気づかなかったんだ?

あ、そうか。これもそれも数学の所為なのか。って、僕は何処ぞの古代から伝わる怪物の所為ばかりにする時計ではない。

「というか、お前達三人レッスンじゃないの?どうしてここに?」

「あ、そうでした!トレーナーさんにプロデューサーさんを呼んでくるように言われてたんです!」

「はっ。」

卯月が思い出したかのように手を叩く。未央とアナスタシアも思い出したのか、ああ、と頷いている。

一つ言わせて。どういう事?



僕は、この後智絵里ちゃんやんはレッスンがあるため別れ、三人に連れて行かれる事数分、辿り着いたのは衣装室だった。

何故衣装室なのか、と思ったがその疑問は一瞬で消え去った。

何故なら、

「じゃっじゃーん！ユニット衣装を着たしぶりんに、ミナミンだよ！」

そこにはNGの衣装を着た凜とラブライカの衣装を着た美波さんがいた。どうして未央が自慢げに紹介するのは分からないけど。

「あ、蒼崎さん。お久しぶりですね」

声をかけてきたのは黄緑と白の明るい色をあしらったジャージを着ていたトレナーさんだ。トレナー青木四姉妹の末っ子、青木悠ゆうさんだ。僕と同じ境遇（＝平凡）で、最も好感が持て、たまにお昼と一緒に食べたりする仲だ。あの四姉妹、というより僕がこのプロダクションで一番仲がいいと言っても過言ではない。

「お久しぶりです、青木さん」

「青木さんって……。いつもみたいに悠で構いませんよ」

その瞬間、卯月と凜と美波さんの視線が僕に突き刺さる。えっと、何故睨むんですかね？

未央に三人の真意を問おうにも、僕と悠さんを交互に見てるし、アナスタシアなんてポケーっとしてるし。

後で質問攻めにされるのはわかってるし、ここはこの事はスルーでいいと思う。

それにしてもどうして僕をここに連れてきたのだろう。まさか、「私達の衣装の感想を言つて欲しい」とか言うんじゃないよね？そんな事聞かれた時には逃亡待った無しだよ。

「で、何か言う事は？」

凜はこちらを向いて問いかけてくる。言う事？言う事って言われても…………。

「えー、本日はお日柄もよく？」

「だ、れ、が、そんなお世辞みたいな事言えって言ったの？」

凜の怒りのオーラが目に見えるほどブワツと増す。君は何なの、新手のスタンド使いですか？え、違う？

とまあ、そんな事はさておき、流石に僕もそこまで鈍感ではない。女の子が真新しい服を着て「何か言う事は？」と聞かれれば十中八九感想を求めている、と僕は経験則から推測する。なんの経験則かって……………ご想像にお任せするよ。

でもね僕ね、洒落た感想言えないの。というか感じた事でさえ言葉にするのが難しい。

「で、言う事は？」

凜はジト目でこちらを見ながら再度問いかけてくる。

と云われてもね、凜はいつもは落ち着いた服を着ていてクールに見えるけど、今着ている服は可愛らしいという方が合っていて、凜にはあまり似合っていないと思われたが、これはこれでありだろう。フリフリのスカートにシルクハットのような帽子がマッチしてなんととも女の子らしい可愛さが醸し出されている。アイドルの新ニュージエネレーション世代を築き上げるには相応しい可憐な服装だろう。

一方、美波さんはいえ、シンデレラプロジェクトで一番年上だからだろうか。大人っぽさが大いに感じられる。単純に言うところ、体のラインが扇情的で、薄い青色というのもまた美波さんの良さが感じられる。可愛いとは違ったもの、綺麗と言った方がいいだろう。

さて、これら感じた事を纏めて要約すると、

「似合ってるよ」

僕が笑顔でそう言つて凜と美波さんを見ると、二人共顔を朱色に染め俯いていた。隣にいる悠さんと僕の隣にいる未央はあちゃーといった風に額に手を当てて天井を仰ぎ

見てるし、卯月も二人と同じように顔赤くしてるし。アナスタシアは頷いてるし。何この三者三様な反応。

「あのさ……、全部声に出てるんだけど……」

「ん？」

「……蒼崎君のエッチ」

「へ？」

「ぶ、プロデューサーさん……流石にそれは……」

「はい？」

「ダー、確かにミナミは大人っぽいデス」

「んん？」

「プロデューサー、終わったね」

「え？」

これまた三者三様の返答に困惑する。それを解決させるかのように、悠さんが現実を叩きつける。

「考えてる事口からただ漏れでしたよ？」

「はいいい!!？」

なん、だど……!!?まさか、まさかそんなはずはない、はずなんだけど。

まあこの反応をされたという事は声に出していたという事で間違いないと思う。

よくよく考えてみれば、口に出していたとすれば結構アウトな事を言っていたような気がするんだけど。時すでに遅し、とはこういう事を言うんだね。身を以て知るなんて思わなかったよ。

「いめん」

僕の口から出たのは謝罪だった。というかそれしかなかった。だって変態紛いな事言っておいて何食わぬ顔で「あ、そうなんだ」なんて言えるわけないじゃない。というかそんなメンタル僕は持ち合わせてないからしようとしてもできないよ。

「……………貸しーね」

「……………命令権一つだけもらうからね」

どうしてだろう。僕が了承してすらいらないのに勝手に権利が奪われていつているような気がする。でもまあ、ここでこのことをプロジェクトのメンバー全員に言いふらす、と言われるよりはマシだろう。

僕はこれから何を命令されるのか不安になりつつ、悠さんに一つ聞きたいことがあるので聞いておくことにする。

「ねえ、悠さん」

「何ですか？」



「レッスンって……何時からでしたっけ？」

衣裳室を沈黙が制する。その時間約三十秒程度。始めに動き出したのは、悠さんだった。

携帯を取り出し、誰かに電話をかける。多分忍さんあたりだと思っただけ。

「ね、姉さん、ニュージエネとラブライカのレッスンって何時からだっけ……？」

『……………もう既に時間は過ぎているんだが』

スピーカーの音が大きいのか、忍さんのトーンの落ちた声がちちらまで聞こえてくる。電話越しではあるが、怒っているのがひしひしと分かる。

これはあれだ。レッスン室に入った途端、忍さんの説教が始まるパターンだ。あと追加特典として、レッスン内容が苛烈なものになる。

でも、一概に彼女達を責められるわけではない。ちゃんと確認していなかった僕の責任でもある。謝りに行くしかないよね……………。

僕は、美波さん達が着替えるため衣裳室から退出し、重い足取りでレッスン室へと向かう。衣裳室からレッスン室まではそう遠くないため、ものの数分で着いた。

着いたのはいいのだが、何故だろう。ドアから黒い空気が漏れ出ているような気がするんだけど気のせいかな？ 気のせいであってほしい。

恐る恐るその扉を開くと、そこには忍さん……否、修羅がいた。

「さて、じっくり語り合おうじゃないか蒼崎」

あ、僕のせいだってことは知ってるんですね。話が早くて助かります。

僕はこの後に待つ説教に涙しつつ、頭を下げるのであった。

☆♪  
◇◇

「ひ、酷い目に遭った……………」

説教開始から数十分後、卯月達の到着と同時に僕への説教は終わりを告げた。忍さんはまだ絞り足りないとか言ってたけど、正直言うと僕もう限界でした。あそこで終わってくれて感謝感激雨嵐ですよ。

そんなことはさておき、プロジェクトルームに戻ってきた僕はさつきやっていた問題集の続きをやらうとするが、何故か問題集が見当たらない。開きっぱなしで机の上に置いていたはずなんだが、一体どこに……………？

ルーム内をくまなく探していると、入り口のドアがガチャリと音を立てて開いた。

「蒼崎さん、ここにいたんですか」

そこには巨大な大男で無愛想な顔つきの僕より立場の高いプロデューサーの武内さんがいた。脇に何抱えているけど、ここからじゃよく見えない。

「何か用でも?」

「あ、いえ、大した用ではありませんので」

武内さんは無表情で事務的に言う。もうちよつと表情が変われば、いいんだろうけどなあ……。

大した用ではない、ということとは少なからず用があったわけだから、このルームに一度入つてることになるよね。ということは何か知っているかもしれない。

「ところで武内さん、この机の上にあつた問題集知りませんか? 数学の」

僕は部屋を出る前、開きっぱなしで放置していた机を差しながら問いかける。すると、武内さんは脇に抱えてあつた本をこちらに差し出してきた。それはまさしく僕が探しているもので、僕は今、おそらく訝しんだ目つきで武内さんを見ていることだろう。

というか何故この人が持つているんだ。

「えつと……島村さん達の高校生組が置いて帰つたと思ひ、それで蒼崎さんに渡しておこうと思ひまして」

「あ、あの……」

うんまあ表紙と中身見たらそう思つてしまうのも仕方ないよね。なんせ問題集のタイトルが『改訂版 基礎数学Ⅰ・A・Ⅱ・B』である。基礎数学なんて高校生の一年か二年の序盤で使うものだ。

これを一回見ただけで僕のだと分かるにはさすがに無理があるだろう。

「それ、僕のです」

「……………え？」

おっと、無表情だった武内さんの表情が崩れた。困惑、疑問が完全に現れている。まあそりやそうでしょうよ。現役、それも今年度は三年生の大学生だ。そんな人が高校数学の基本、『基礎数学』という問題集なんてとかないと思う。僕もこれがしなくていいならしない。

だけど、これが僕には必要なことなのだ。自分を追うためには。

「で、でもこれ、高校生の……………」

「まあそうなんですけど、それ僕のなんですよ。僕を、僕の夢を追うためには必要なことなんです」

僕がそう言うと、目を見開く武内さん。 ” 夢を追う ” という単語に反応したんだろう。

「蒼崎さんの夢、ですか…………？」

「はい。ここで隠してもしょうがないんで言うておきます」

僕は口角が釣り上げるのが自分でも分かる。誰かに自分の夢の話をしたのはいつ以来だろう。忘れた、ということは、結構前のことなんだろう。

何故釣り上るか。夢は、他人に知ってもらえることで追いやすくなる、と僕は思っている。自分の仕様として知っていることを知ってもらい、理解してもらおうのも必要だ。

だとしても、もし行き詰まったとき、そんな時進めなくなってしまうかどうか。と言つてもそんなこと、夢を追う身としては考えたくはないんだけど。

でも万一、そんな時のために客観的な意見を求めたいのだ。その為に僕は他人に理解してもらふことは必要だと考えてる。

僕は深呼吸して肺に取り込んだ空気とともに吐き出した。

「……教師です。僕は教師になりたいんです」

その瞬間、誰かが無用心にも開け放していた扉から一陣の風が吹き抜けた。

タイミング良すぎだろう、と思つてみると、武内さんが優しそうに微笑み、そうですかと呟く。

「頑張ってください。応援してます」

その微笑みが、その言葉一つ一つの重みが、何故かある時を思い出させた。

僕が教師になるとか言い出した時のことだった。確か、小学五年くらいかな。そう思うと自然に笑みがこぼれてくる。

僕はあれから約十年も夢を追っていると思うと笑みがこぼれずにはいられなかったのだ。

「でも、プロデューサーは続けますから。あの子達を任された以上、その仕事ぐらいはやり遂げないと、です」

「はい、お願いします蒼崎さん」

そんなこんなで僕の夢暴露が終了し、与太話が終わって問題集に再度取り掛かろうとした時には、既に七時を過ぎており、やる気をなくして帰宅した。

帰宅直後、「テストがあるから勉強教えて！」と花梨に泣きつかれたが、まあそれは別の話。

☆♪  
♡◇

蒼崎弘弥P活動報告、改め本日の一言感想

正直言つてこれからはあまり活動報告を書く時間が取れそうにない為、手短にかつ分  
かりやすくしようと思う。

よって、その日にあつたことを一言でまとめてこのノートに記す。

今日はこんな感じだろう。

『思考は脳内に止め、夢は表にさらけ出せ』

よし、明日からも頑張るとしよう。

寝落ちの後には不運なことしか待っていないようです。

朝、それは一日の始めであり、仕事への活力を養うものである。

僕の場合、自室のベッドで十分睡眠をとるのが一番いいのだ。

ベッドでとる睡眠は格別にいい。その日の疲れを完全に癒し、体に入った力を抜いていつてしまう。いわゆるダメ人間製造機（僕命名）だ。

まあそれはさておき、現在僕は今まで想像だにしなかった所で朝を迎えた。

その場所は――

「……………まさかの寝落ちっすか」

346プロダクション、シンデレラプロジェクトルームに併設された執務室だった。

なぜ？そんなの決まっている。

僕は深夜二時までデスクワークに励んでいた。だが、大学のテスト勉強やらメンバーの対応やらで疲れていたのだろう。いつの間にか寝てしまっていた。

そうして今に至るのだけれど。

「じゅしゅ……………」

目を擦りながら呆然とする。

前まで朝帰りはあったけど、連絡はしていた。最初のほうはしてなかったけれど。

そのため、今現在の家の状況が手に取るようにわかる。

おそらく、リビングには修羅と化した母さんが仁王立ちで……

「……仕方ない、よね？」

僕はできるだけそのことを考えず、急いで帰り支度を進めた。

☆♪  
◇◇

家に着いてからというものの、僕は誰の顔も見えていない。なぜならずっと床を見ているから。

なぜ床を見ているかって？……土下座しているからだよ。

「本当に申し訳ございませんでした」

「本当に反省してる……？」

ちなみに、修羅と化してたのは妹の花梨だった。母さんは慣れたので気にしてない、むしろお金稼いでくれるなら構わないと言っていたらしい。

自分の子の心配よりも、お金をとる我が母親のことが不安でなりません。まあ、その原因は僕にあるわけですが。



「まったく、心配したんだよ？いつまで経っても帰ってこないから」

「言い返す言葉もありません……」

「こんなに可愛い妹を心配させた罰として、今週末、どこか一緒に遊びに行くこと」

「え、ええ………？」

どうしてそうなる？と聞きたいがここはぐつと堪える。

「いやいや、心配させたのは悪かったけど、僕がなんでそんなこと……」

「承諾しなかったら自作した関節技をお見舞いすることになるけど」

「は、はいっ！分かりました行きます行かせてくださいお願いしますー！」

「なら許す」

その脅し方は卑怯じゃないですかね？いやまあ、不安がらせた僕のせいでもあるんですけどね。だからと言ってその選択肢はあんまりじゃないでしょうか。

せつかく今週末は仕事休みなのに……。

今頃どうこう言った所で、花梨は心変わりするとは思えない。

俺が言うのもなんだけど、ブラコン気味だからなあ、うちの妹は。

僕は深くため息を吐いて、痺れた足に鞭を打って立ち上がり、シャワーを浴びてから朝食を取り、大学へと向かった。



時間が過ぎるのが早い。それは誰もが感じたことがあるだろう。

追い込まれて長期休みの宿題を一日で終わらせようとしたり、ゲームなどのひとつのことにのめり込んだり、睡眠をとるだつたりと、まあこんなことをしていれば何時の間にかこんなにならぬ……、という風に感じることもあるだろう。

ちなみに場所が変わって、僕は今朝寝落ちしたことに気づいた執務室にいる。

昨日、終わらなかつた書類とは別の、武内さんに手渡された封筒を手に取る。

「何の書類なんだろう……。不安で仕方がないんだけど」

僕は背もたれに全体重をかけて天井を見上げる。

何故か封筒の中にくつもの書類が入っているような重厚感があり、なおかつ手渡されるたびに深々と頭下げられて「お願いします」何て言われたんだから不信感と不安でいっぱいいっぱいですよ。

とやかく言っている暇ないので、僕はさっさと封を切って中身を取り出して目を通す。

『新規アイドル採

「見なかつた、僕は何も見なかつた……」

一番上にあつた書類の見出しにあつた数文字を見た瞬間に僕は目をそらす。

今新規アイドルとか見えた気がするけど気のせいだよ。ついでに言うとか採って字が見えた気がするんだけど、採用じゃないよね採取とかだよ。……それだったら、全く意味わからない文になるけど。

そう心の中で無駄な暗示をしながら、僕は書類に目線を戻す。

『新規アイドル採用について』

現在、346プロには多くのアイドル達が所属している。シンデレラプロジェクトも問題はありますが順調に進んでいると思える。

だがしかし、ここで満足してはならない。私達は他の皆様方に大変満足していただかなければいけない。そのためには様々な個性的なアイドル達を育てていかなければならないと思う。

それ故に、今回の企画が成り立った。

新規アイドルを採用するにあたって、一つ問題点があつた。それはプロデューサーだ。

我が社に勤務しているプロデューサーは皆、どこかの部署に所属しており、とても新たなアイドルをプロデュースできるとは思えない。そのため、所属してそこまで月日は経っていないが、新人の蒼崎弘弥にそのアイドルを一任しようと思う』

「これ書類というより報告書じゃない……？」

僕はそんな疑問を抱きつつ、頬杖をつく。多分微妙な顔をしているに違いない。

「新規アイドル、か……。まあ確かに、シンデレラプロジェクトの子達は武内さんがプロデュースしてるもんね。僕はあくまで補佐だし。まあいいかもしれないけど」

そこで僕はハツとなって気づく。

もし、新規アイドルを僕がプロデュースすることになったとして、そうした場合、シンデレラプロジェクトの方はどうなるのだろうか。

僕は、報告書と言う名の書類を読み進めていく。

『蒼崎弘弥は現在、シンデレラプロジェクトの補佐の役割をしている。例え新規アイドルを起用したとしてもそれを変化することはないだろう』

どうやら僕の仕事量が増えるだけのようです。

一応、僕大学生なんですけど。まだ学生なんですけど、そこら辺わかってますかね？  
「とりあえず、今はCDデビューの第一陣のことだけ……」

僕はペラペラとページをめくりながら呟いていると、目を疑うような内容が目につきました。

『募集期限 4月4日～4月12日（10：30まで）

オーディション日程 4月13日

募集人数 10名

採用人数 1名

採用審査員 蒼崎弘弥』

ちよつと待っていたきたいたい。募集期限が明日までなのはいいでしょう。オーデイションが明後日なのもいいだろう。文句が言いたいのはそこではない。

「書類渡すの遅すぎでしょ……」

僕は項垂れてボヤク。

ボヤきたくもなるよ、だって審査員僕だし10人も審査しなきゃだし、それにオーデイションの次の日、卯月達のCDデビューの日だし、もう悪いことづくしですね！泣きたい。

「というか、募集されたアイドル候補達の資料っていつもらうんだろう……」

なんか不安しかないなあ、と心の中で涙を流しながら僕は渋々、他の資料も読み進めるのだった。

☆♪  
♡◇

場所は変わってプロジェクトルーム。

僕は、アイドル達に囲まれていた。

「あの……教えてください、プロデューサーさん……」

「無理だつて……僕には教えられない……」

「プロデューサー、あんたなら分かるでしょ、この気持ち」

「そ、そんなこと言われたつて……」

「教えて、ください……。プロデューサーさんに教わりたいんです」

「いや、そんなこと言われても……」

僕は目の前に迫る女の子達に目を向けて叫ぶ。

「英語だけは分からないんだつて!!」

なぜ?とみなさんは思うかもしれない。いやまあ、何故ということもないのだが、ただ単に勉強を教えてくださいとみんなに頼まれたのだ。

数学、理科、社会をしているみる、かな子、アナスタシア、美波さんは大人しく座って勉強しているのだが、いかんせん他の高校生組と中学生、小学生がどうにも静かに机には向かってくれない。

特に残りの高校生組。

「英語……分かんないです……」

「授業でやったことならいけるけど、応用というか、長文になると、ね」

「もう勘でいいんじゃない？ 私いつつもそうしてる」

「それは未央（ちゃん）だけであって私たちは違うんです」

ニュージエネの三人は仲良く三人並んで座っているのだが、さつきからずつとこの調子だ。集中力がなさすぎてさすがの僕も手を焼いている。

「うう………」

「ち、智絵里ちゃん、大丈夫だよお！ きらりだつてできないことあるよお。でも気にしてないにいく♪」

「う、うん………」

一方、きらりは智絵里の浮かない顔をどうにかしようとして励ましていた。

先ほど、前に教えたこととそれを応用する問題を解かせたのだが、ほとんど答えがあつておらず、現在に至るのだ。

人間忘れることは多々あるし、苦手なものは苦手なのだ。できる時もあるしできない時もある。そう割り切つて欲しいのだが、この状態じゃ無理だよね……。

「……………」

見ろ、李衣菜なんて問題見たままフリーズしてるぞ。質問もせず、ただ固まっている。

それよりは智絵里の方がマシに思えるんだけど、言っても無駄かなあ……………。

「ねえ、P君！遊ぼうよ〜」

「莉嘉ちゃん、宿題どうするの〜？」

「んー、放置！」

いやダメだろ。

「分かった〜♪」

お願い、分からないで。というか今ので何が分かったのさ。

「宿題は終わらせなさい。お兄さん、サボりは許しませんよ」

「ええ〜…………」

だんだんとやる気がなくなっていく二人。それは周りも同じなのか、ほとんどが手が止まっている。杏だけは何故か未だに机に向かっているが。

でもどうしようか。これでは困った。

このあとレッスンあるし、それやっていると帰りが遅くなる。帰宅後は自由にして欲しいから宿題がある人はさせてるんだけど。

どうしようか、と唸りながら悩んでいると、一つの方法を思いついた。やる気をなかなか出さなかった花梨に使った方法だ。

「なら、全員が課題やらを終わらせたら〜褒美をあげよう」



その瞬間、時間が止まったかのような静けさがルームを包む。あれ、何かまずかったかな、と思いつながらにも言葉をつぐ。

「その代わり終わらなかつたらなしという方向でー」

言い終わる前に、全員が机に向かう。そんなに欲しいの、ご褒美。

僕はその光景に苦笑いしつつ、ルームを退出してご褒美を買いに行った。

ルームに戻ってきたときには、全員が課題やらを終わらせていて、ご褒美をねだられたのは言うまでもない。

☆ ♪ ♡ ◇

蒼崎弘弥 P 一言報告

明後日が不安で不安で仕方がありません。

とりあえず、死ぬ気で頑張ります。

## 新規アイドル採用オーディションです。

どこにでも売っていいそうな長机とその付近にあるデスクワーク用の椅子。その目の前には一つのパイプ椅子が置いてある。

ここ、多目的室もといオーディション会場で僕こと蒼崎弘弥は項垂れていた。

その理由はいつものごとく簡単なものだった。

「……はあ、寝たい」

昨日、オーディションを受けるアイドル候補たちの資料を受け取り、それを翌日まで覚えるというトライアスロンに参加したため、圧倒的に睡眠時間が足りない。

基本、僕は六、七時間程度は寝るのだが、今日は三時間しか寝ていない。まあ、いつものことなのだけど。

「よし、それじゃあ頑張ろうか」

僕は気合を入れ直す。

僕が未来のアイドルを決めるのだ。気を引き締めて誠心誠意頑張らなくては。

☆♪♡◇

「最中恵利です。よろしくお願ひします」

最初は……なんと云えばいいだろうか。典型的なクラスの委員長みたいな人と言え  
ばいいのだろうか。

髪を肩辺りまで伸ばしており、黒縁のメガネをつけている。

どこことなく清楚な感じと威厳があるように感じられるけど。

「はい、それでは、いくつか質問していきますので、それに答えてください」  
「分かりました」

僕は、オーディションでも結構重要な質疑応答に移った。

Q. どうしてアイドルを志したのか。

A. 私の意思じゃありません。友人が無理やりしたことなので、志した理由などあり  
ません。

Q. なぜ、いくつもあるプロダクションから346プロダクションを選んだのか。

A. 私を知るわけないでしょう。

Q. ……好きな食べ物は。

A. それ必要あるんですか？

Q. ……特技は何かありますか。

A. これといってありません。

結論、判断などする必要もなく不合格だと僕は判断します。

「……………ありがとうございます。結果は後ほど郵送しますので」

「ありがとうございます」

お辞儀して部屋を出て行く最中さん。

もうなんかね初っ端からやらかしてくれましたよ本当。あそこまで合否が完璧に分かるなんてそうそうないと思う。

ダメだ、一人目から心折れそう……。

「……………僕、最後まで保つよね？」

僕の不安そうな問いかけは、誰に届くわけでもなく、虚空に響くのでした。

☆♪♡◇

オーディション午前の部が終了した。

最中さんに始まり、そこから他の四人とオーディションをしたのだが、これといってしつくりくる人はいなかった。

なんと言えはいいのだろう。印象が残らなかった、と言えはいいのだろうか。……最

中さんはある意味印象に残ったけどね。

「ふい〜……………疲れた」

慣れないことをやっていたせいで、普段の疲労が倍になって溜まっているのかもしれない。今朝までにたまっていた疲労と足し合わせると、二徹をした時に感じる疲労感と同じぐらいになってきている。

「ふふ、大丈夫ですか、蒼崎さん」

いつものように疲労に浸っていると、突然ドアが開き、そこから黄緑色のスーツを着て微笑んでいる千川ちひろさんがいた。

「ちひろさん、どうしてここに？」

「あれ、聞いてないんですか？蒼崎さんがプロデューサーとなっていく『プロジェクト・エヴォルヴ』のサポート、私がするんですよ？」

「……………本当ですか？というか『プロジェクト・エヴォルヴ』って…………」

「確か、『シンデレラプロジェクト』の妹プロジェクトとして始動することになったんですよ。で、まずは仕事に慣れさせるためにアイドル一人だけをプロデュースしようというところらしいです」

「……………僕知らなかったんですけど」

「それを伝えたら、絶対に拒否されると思われたからじゃないでしょうか。蒼崎さん、絶

対に辞退しますよね？」

「ええ、ノータイムで首横に振りますよ」

「だからですよ、多分ですが」

ちひろさんからの真実を聞き、頭を抱える。というかそこまで予想しやすいですかね、僕って。

そんなことよりも、まさかこんな若輩の自立できてなくて親の脛かじっている大学生風情が一端のプロデューサーみたいにプロジェクトを持ってもいいのかな。

そんな一抹の不安を抱いていると、ちひろさんが何かはこのようなものを机の上に置く。

「それと、差し入れです。残りも頑張ってくださいね」

ちひろさんはそう言って微笑むと、背を向けて部屋を出て行った。

ちひろさんが置いていったものを見ると、そこには可愛らしい弁当箱があった。

そういうや、今昼休みだった。というか今日僕、弁当持ってきてないや。

「まさか、僕が弁当を持ってきてないこと知ってたのかな……？」

どこまで把握してるんだ、と疑問に思うが、弁当を渡してくれたというのにそれは野暮だろう。

なお、それがちひろさんの手作りだったことは、蓋を開けた瞬間に理解できたのだが、それは別の話。

……結構美味しかった。

☆♪  
◇◇

「うーん……………」

午後16時、僕は頭を悩ませていた。

10人中9人のオーディションが終わったのだが、誰にしようか決めかねているのだ。というより、じっくりきた人がいなかった。

なんとというか、全員が全員、特徴がなさすぎて印象にの頃なかつたのが理由のほとんどだ。

例えて言うなら、学校でクラス一緒になつたけど、一度も話さない奴の存在を忘れてしまふとか。

現場はそんな感じなのだ。346プロの個性的なアイドル達を見てきたからだろうか、どう考えてもあの人たちよりは霞んでしまうのだ。346プロのアイドルとしてなら、あの人たちのように個性の面で張り合えなければ。

……あれ？なんか違う方向に行っているような……まあいいか。

その時、コンコンという音がオーディション会場の部屋に響く。

最後のオーディション応募者だろう。

「(気を引き締めて……よしっ!)」

僕は気合いを入れ直し、本日最後の仕事に挑むのだった。

☆♪  
◇◇

「え、ええつと……ええつと……!」

「落ち着いて落ち着いて」

最後に入ってきた女の子は、異様におどおどしており、入ってきてからずっとこんな

感じだ。自己紹介もままならないという感じだ。

「わ、わた、わたたたたたたたたた」

「待って落ち着いて!どこぞの世紀末に生きている人みたいになってますから!」

涙目でガクガク震えて顔も青ざめている。

僕は席を立て落ち着けるように背中をさすってあげる。

女の子はビクツと震えるが、僕の腕を振り払わず、深呼吸を始める。



それをするに数分、落ち着いたのか、女の子は立ち上がり頭を下げてくる。

「あ、ありがとう、ごさいました。落ち着けるように、していただいて」

「いえいえ、当然のことをしたままでですよ」

「で、では……失礼します」

女の子は、落ち込んだ様子で部屋を出て行くこうとする。

って待つて待つて、どこに行くつもりなんだ。

「ちよつと待つてください。オーデイションはまだ終わってませんよ」

「……こんなことで上がっている私なんか、アイドルなんて無理です。やっぱり、届かない夢だったんですよ」

「夢……？」

「……私、アイドルになりたかったんです。テレビで見えて、この人達すごいなーって思つて、でいつの間にか養成所に通つて、でも、養成所では一番才能ないって……言われて……」

輝く何か床に落ち、弾ける。女の子は肩を震わせて、鼻をすすする。

泣いてる、のか……。

「で、でも、諦めきれなくて……、だから、今回申し込んだんですけど……無理、ですよ。私なんて……無理ですよ……分かってたんです、そんなことぐらい」

「……………すみません、お名前まだ伺っていませんでしたよね？」

「……………あ、すみません。そんなことも忘れてしまつて。私は……………信堂しんどう風です」

振り返りざまに女の子、信堂さんは自己紹介をする。頬に涙が残っているが、おそらく信堂さんの今できる笑顔で。

その瞬間、僕の中で何か弾けた。卯月の時や凜の時とは違う、何かが。

僕はその笑顔に吸い込まれそうになる。今の信堂さんの笑顔を超える笑顔なら、今日のオーディション応募者の中にできる人はいるだろう。

でも、多分だけど、この感情は信堂さんだから感じたものだろう。

頬を伝う涙と吸い込まれそうな笑顔が相まって、僕はより魅せられた。

僕はそこである一つの仮定が思い浮かんできた。信堂さんは、下手をしなくても、順を追って育てていけば、高垣さん達みたいなアイドルになることができるかもしれないと。

「僕は蒼崎弘弥。よろしく、信堂さん」

「……………はい。でも、もう会うことなんて」

「会うことありますよ。だって、貴女はもう346プロの人だから」

「……………え？」

信堂さんは惚けた表情をする。そんな顔をするのも無理はないだろう。だって、僕が

言おうとしていることは、信堂さんの最も望んだことであり、諦めかけていたことでもあるから。

「合格です。そこまでいい」笑顔が出来たら、不合格にする理由はありません」  
僕が笑顔で告げると、感極まったのか、信堂さんは本格的に泣き始めた。

「……すみません、みつともなところを」

「お気になさらず。では、改めて。僕は君のプロデューサーで君の所属する『プロジェクト・エヴォルヴ』のプロデューサーでもある蒼崎弘弥です」

「え、ええっと……わた、私は、信堂風です……。臆病者で何の取り柄もないダメ人間中のダメ人間ですが、よろしくお願いしますっ!!」

こうして、極度の臆病少女とのプロジェクトは始まることとなった。

☆♪  
♡◇

蒼崎弘弥Pの一言報告

信堂さんがどう『進化』<sup>エヴォルヴ</sup>していくか、プロデューサーとして暖かく見守ってほしいと思う。

正しい道に引き戻してあげることがプロデューサーの仕事です。

「また遅刻なのか……!?!」

僕は現在は全力疾走しています。あ、申し遅れました。どうも皆さん、蒼崎弘弥です。なぜ走っているかと問われれば、答えはCDデビューと言えはわかるでしょう。

そう、本日は卯月たちのユニット『ニュージエネレーションズ』と美波さんたちのユニット『ラブライカ』のCDデビューのイベントがある日なのだ。

だというのに、僕は相変わらず遅刻しそうなんです。……馬鹿じゃないのか僕は。

ちなみに、先日僕が合格とつげたことにより、正式にアイドルとなった信堂さんも今回呼んである。

卯月たちも日は浅いが、信堂さんからしてみれば先輩なのだ。後学のためにも見せておいても無駄なことはないだろう。

そうこうしているうちに、会場であるデパートに到着する。デパートの入り口には、辺りをキョロキョロと見る亜麻色のセミロングの少女、信堂さんがいた。

「ごめん……ちよつと遅れた……」

「あ、いえー私も今来たところなので……その、気にしないで、ください」

やはり昨日の今日では人は変われない。あの後世間話とかしたのだが、まだ人と話すことに慣れていない信堂さんはおどおどしている。

まあ、僕と話すだけが理由じゃないと思うけど。

「それじゃあ行こうか」

「は、はい……！」

☆♪  
◇

僕らが会場の裏に着いた時には、すでに二組がスタンバイしている様子だった。武内さんは僕が来たのに気づいて、首の後ろに手を回して困ったような表情を浮かべる。

……はい、そんな顔する理由はわかってます。

「……毎度毎度、遅れてすみません」

「以後気をつけてください。時間は、基本厳守です」

「以後気をつけます……」

本当に頭が上がらない。同じプロジェクトにいるとはいえ、流石に情けなく思えてきた。

「だ、大丈夫、ですよ！私なんてしょっちゅうドジして遅れてます、から……」  
フロローしようとしたのか、信堂さんは自分で言ったことにダメージを受けてズウンと空気を重くする。

自虐ネタもほどほどに、ね？

「……………？プロデューサーさん、その人は？」

凛は真つ先に信堂さんに気づいたのか、首を傾げながら聞いてくる。

凛の言及で他の全員も信堂さんに視線を向ける。

信堂さんは、ビクツと体を震わせてその視線から逃げるように僕の後ろに隠れる。

「……………」

「し、信堂さん？」

「む、無理、ですう……………」

すでに涙目である。昨日の途中退出した時みたいになってるけど、大丈夫かな？

その刹那、ゾワリと悪寒が背筋を撫でる。それと共に何か殺気のこもったような視線を感じる。

みんながいる方を見ると、その半数がこつちを睨んでいる。ちよつと待つて、僕が何をしたの……………？

「あ、もしかして、新規プロジェクトの子ですか？昨日オーディションしたやつ」

ちひろさんが助け舟を出してくれる。多分、意図してやってはいないだろうけど。でも助かった。これですぐにかこの場だけはしのげる。

「ええ。信堂さん、自己紹介を……」

そうやって振り返って信堂さんを見るが、自己紹介は無理だとすぐに理解する。

信堂さんはガクガクと震えており、涙目で「怖くない怖くない」と連続で呟いている。それを見た僕の方が呟きたかったよ。その言葉。

兎も角、この状態での自己紹介はさすがに酷だろう。

「……すみません。自己紹介は後でいいでしょうか？ 本人が（精神的に）死にそうになつてるんで」

「は、はあ……」

何はともあれ、今日は五人の晴れ舞台だ。何も起こらなければいいのだけど、と僕は願うのだった。

☆♪  
♡◇

CDデビューは何の支障もなく進んでいく。美波さんとアナスタシアは、レッスンの時よりも美しく、なおかつ新人とは思えないほどのパフォーマンスを見せてくれた。



それにより、集まっていた人たちは笑顔になり自然と拍手で満たされる。

二人は、息を切らしながらも笑顔でそれに答えて見せた。

そんな中、未央は会場の方を見てなぜ不安そうな顔をしている。

「未央、どうかしたのか？」

「あ、プロデューサー。いやさ、なんかお客さん少なくなない？」

「はえ？」

僕は未央が見ていたところから会場の方を見るが、そこにはデパートでライブをやるには十分すぎる人がいた。

……どうしてこれが少ないと言えるのだろうか。

「いや、十分だと思っけど」

「え、でも私友達結構呼んじやったよ？」

彼女が何を言っているのかわからない。

どこか違う気がする。ラブライカの二人とは違うものを彼女は見ている気がする。

「うーん、まあいいや。それじゃ、準備してくる！」

「あ、ああ……………」

何だろう、このどうとも言えない違和感は。

一抹の不安が僕を襲う。疑問が徐々に膨れ上がり、やがてそれは嫌な予感へと変換さ

れる。

「プ、プロデューサー……さん……」

いつの間にか隣に来ている信堂さんが不安そうにこちらを見上げている。

……ダメだな。自分が感じてる不安や嫌な予感のせいで他人を心配させるなんて。

「大丈夫だよ」

僕はそう一言だけ言つて信堂さんの頭を撫でる。信堂さんは最初は戸惑っていたが、少しすると気持ちよさそうに目を細めていた。

「それと、プロデューサーつて無理に呼ばなくていいからね」

「……………わ、分かりました蒼……………弘弥さん」

なぜ名前呼びなのかという疑問は奥にしまっておこう。それよりも、彼女たちのことが不安で仕方ない。

何も、怒らなければいいのだが。

☆♪  
◇

あれから少しして、ステージは始まった。僕はレッスンよりも完成度が高いものが見れるのでは、という期待を少々持っていた。

だが、その期待は完膚なきまでに砕かれた。

確かに、三人は一生懸命踊っている。踊っているのだが……………

「……………おかしい。なんで————」

————君達はそんなにやり辛そうなんだ？

踊っている三人の顔に、プロダクションで見せるような笑顔はなく、あるのは不安そう  
うな、やり辛そうな表情だ。

彼女たちと触れ合っているものならわかる。

何か違和感がある、と。

「……………ひ、弘弥さん……………？」

信堂さんは依然として不安そうな顔でこつちを見てくるが、今回は構っている余裕が  
僕にはない。

みくがカフェを占拠した後、自分達は恵まれてるだとか言っ  
ていたのに。レツスンにも力を入れ

計算外というよりも信じられないという思いが大きかった。

ほどなくしてステージは終わる。終わったと同時に拍手が響き渡る  
が、ステージにい

る三人は、ぼう然とそこに立ち尽くすだけだった。

☆♪♡◇

「何が……どういうことなんだ……!?!」

僕は困惑していた。彼女たちなら、笑顔で成功してくれるだろうと思っていたのに。結果は、まあお客さんには楽しんでもらえていた。だが、肝心の本人たちが楽しんではいかなかった。

美嘉さんのバックダンサーの時は大成功で、新人にしてはいいライブだったと武内さんから聞いた。

なら、今回のあれはなんなのだろうか。バックダンサーの時も今回みたいになっていたのだろうか。

仮定がまた新たな仮定を生み、堂々巡りを続けてしまう。

埒があかないと判断した僕は、武内さんに詰め寄る。

「武内さん、これどういうことですか!?!」

「わ、私にもさっぱりで……!?!」

どうやら武内さんも僕と同じらしい。信じられないようだった。今さつき見た景色

が、彼女たちの表情が、何より、自分達の感じている喪失感が。

その時、すぐ隣を何かが通り抜ける。視線を向けると、俯いて走っている未央だった。

「未央っ!」

僕は何も考えなしに走り出す。

未央が何を思っているかはわからない。だが、ここで追いかける必要なければ絶対に後悔すると勘が告げているのだ。

未央は、階下へと続く階段の前で立ち止まる。僕や他のメンバー!武内さんとちひろさん、そして信堂さんも追いつく。後から追ってきた卯月と凜は僕の後ろまでやってきて未央を心配そうに見ている。

「……………信じてたのに」

未央が重々しい声音で呟く。

何を、と問いそうになったが喉元でグツと抑え込む。

「バックダンサーやった時、すごく楽しかった。サイリウムが光の海みたいで綺麗だった。なのに、なのに……………何あれ!」

僕はそこで未央が何を言おうとしているのか、すぐさま分かった。

つまり、あの時は大人数だったのに、今回なぜあんなに少なかったのか、と言いたいのだろう。

僕はこれにどう返答すればいいか分かっていない。だが、これに答えるということとは、未央を少なからず傷つけることになる。

「あんなの、あんまりじゃん！あの時みたいに楽しめると思ったのに、笑顔で頑張ろうって思ったのに、あんなの……あんなのつてないよ！」

「未央」

「来ないで!!」

完全な拒絶。裏切られたという負の感情。それが未央の声音からひしひしと伝わってきた。

だが、未央は勘違いをしている。ここで正さなければ、必ず彼女は間違った道を通ってしまう。その行き着く先は、必ず闇だ。

なら、そこに行き着く前に引き戻さなくてはならない。おそらく、それが僕の仕事だから。

「……未央、それは違うよ」

「違う？何が!？」

「確かに、武内さんに聞いたとおりなら美嘉さんのステージでバックダンサーをやった時は人も多くて楽しかったかもしれない。でも、それはあくまで美嘉さんのステージだ。君ら単体のステージではない」

「……………っ!!」

「だから、遠慮なく言わせてもらおうよ。僕は、今回の結果は当然だと思ってる。でも、こうじゃなきゃダメだと思うんだ」

未央を真正面から見据えて静かに告げる。未央は僕の言葉を聞いて泣き出しそうになるが、それを堪えてこっちを見ている。

「確かにあのステージは集まった人は少なかった。でも、君らはそこに集まっていた人達の顔を見たのか？ 応援しに来てくれた友人を見たか？ 見てないなら……………ちひろさん、あれ渡してあげてください」

僕が頼むと、やろうとしていることがわかったらしく、ちひろさんは首にかけたカメラを未央に手渡す。

それにはちひろさんがステージの様子を激写していた。

あのステージを見ている時に視界の端の方に見えたのだ。不安そうな顔をしながらカメラで激写するちひろさんが。

多分、ちひろさんが撮った写真には写っているだろう。楽しそうに笑う観客と全く笑えていない卯月、凜、未央の顔が。

「あ……………」

「足を止めてくれていた人達はみんな笑顔で見えてくれた。なのに君達はどうか？ 笑

顔じゃない、楽しそうじゃない。それはそこにある写真が物語っているだろう。バックダンサーをやった時はそんな顔で踊っていたのか？」

「で、でも……」

「でもじゃない！君達は言っていただろう！先回しにしてもらっていた分、みんなの分まで頑張ってくる。あれは嘘だったのか？あれは他の人達を抑え込むために出た嘘か？違うだろう！君達の顔は真剣そのものだった。なのにあのザマだ！恥ずかしくないのか!？」

僕は傷つけると分かっているとも言う。そうでなくては、彼女たちはまた同じ間違いを犯してしまうから。

「悔しいと思ったんだろう、不満だと思ったんだろう!?!ならそれを次に活かそうとはしないのか!?!一人でも多くの人に楽しんでもらおうとしないのか!?!君達は……君達の夢は、人数が少なく楽しくなかっただけで諦められるようなちっぽけなものなのか??!ならそんなもの早めに止めた方が身の為だ」

僕は強めに言い聞かす。未央は目を見開き、僕を黙って見ている。後ろにいる他のみんなもそうだろう。

僕がこんなには思っていないだろうから、多分びつくりしているだろうけど。

「それが嫌なら、次どうしたらみんなを笑顔にできるか、自分たちが笑顔になれるか考え



ろ。それができないなら、アイドルなんてやめた方がいい」

僕はそう告げて、未央の横を通り抜けて階段を下りていく。それからみんながどうしたかは、僕は知らない。

☆♪  
♡◇

やってしまった……。

僕は後悔の念を抱いて階段を下りて少し歩いたところにある物陰で小さく蹲っていた。

先ほど、仮にも自分が担当するアイドルに止めてしまえなんて、できなければ止めた方がいいなんて言ってしまうとは。

しかもあんなキツイ言い方。もう罪悪感と後悔しかありません。

てか本当に止めてしまったらどうしよう。僕のせいだからよければ謹慎処分、悪ければ即解雇ということもある。どうしよう、ただ少しお説教するだけがものすごいことになってきたような……。

思考を巡らせている時、タンと音が響く。

それは断続的に続き、徐々に近づいてきている。

そしてそれは、僕の近くまで来てー

「あの」

「ギャアアアアアア!!」

「キヤアアアアア!!」

突然声をかけられ、大声を出して驚いてしまう。声が出た隣を見ると、腰を抜かしたのか、ペタンと床に座り込み目に涙を浮かべた信堂さんがいた。

そこで状況を理解する。あのあと追ってきたのか、と。

「ご、ごめん信堂さん。大丈夫?」

「だ、だだだ大丈夫です。こ、こここつちもいきなり話しかけてしまいましたし」

「……じゃあ、お互い様ってことで。それで、他のみんなは?」

「今、あの大きな男の人と話しています。私は、あの黄緑色のスーツを着た女の人に『追いかけてあげて』って言われたので」

「あの人……」

こうなっているのはお見通しでも言いたいのだろうか。ちひろさん、どこまでも見えない人である。

「あ、あの。少しいいでしょうか……?」

「うん?」

「私は、弘弥さんが間違っていたとは思いません」

「……………え？」

おどおどした様子はなく、真つ直ぐと僕を見据えて信堂さんは言った。だけど、すぐにおどおどし始める。

「あ、いや、えっと、こんな私が偉そうに言つてすみません……。でも、なんとなくですけど、間違つてはいないと思うんです。何か優しいものが感じられたので」

羨ましそうに笑いながら信堂さんは言う。

「でも、言い方が、ちよつと……。ほんのちよつとですよ……。？キツイような気がしました」

「……………」

僕は未だおどおどしながら言う信堂さんを呆然と見る。

そうしていると、さっきの罪悪感や後悔が馬鹿馬鹿しく思えてきた。

「ふ、ふふ……」

「な、なんですか……？」

「あははははははは！」

「ほ、本当になんなんですか……?!」

そうなつてくると自然と笑いがこみ上げてきた。さっきまで僕は何に悩んでいたの

だろう。謹慎処分？解雇？だったっけ。そんなのは、信堂さんの言葉で全てどうでもよくなった。正確に言うのと、言葉というよりおどおどしている姿によってだけ。

「ふふ、ありがとね。心配してくれてたんでしょ？」

「え……あ、は、はい……」

「アイドルになっての初日から、なんかごめんね」

「い、いいえ！私はとても勉強になりました！こんな経験できてね嬉しいと思えるくらいです！つてまた偉そうに言っでごめんなさい！」

自分で言っておきながら何言っているんだ、とツツコんでやりたいが、ここはスルーしておこう。

僕は、信堂さんの頭をポンポンと叩き、デパートの口を目指す。

ニュージエネレーションズのこと、明日決着をつけられればいいだろう。後回しにするように気分はよくないけど、でも今日ケリをつけるにはさすがに間が悪すぎる。

僕は、振り返り信堂さんに微笑みかける。

「それじゃ、少し早いけど夕飯食べに行こうか。吹っ切れさせてくれたお礼として奢るからさ」

「ほ、ほほほ本当ですか!?!行きます！」

奢るといふ単語に敏感に反応した信堂さんは飛びつかんとする勢いでこっちに走っ

てくる。

こうして波乱に満ちた第一段のデビューは終わった。

翌日、ニュージエネレーションズの三人が僕のところへ謝りに来て、次こそは！と決意するのだが、それはまた別の話。

☆♪  
♡◇

蒼崎弘弥Pの一言報告

……………信堂さんが大食い漢ならぬ大食い少女だなんて聞いてないよ。

臆病な少女は少しだけ殻を破り、平凡な青年は疲れ果てるそうです。

ニュージエネ、ラブライカのCDデビューから一週間が経った。

僕はあれからいつも通りに職務を全うしている。といっても資料作りやら入力作業やらのデスクワークだけなんだけどね。正直言つてほとんど何もない感じですよ。

CDデビューの時は荒れていたはずの未央達もレッスンに励み、それに触発されるかのように他のメンバーも相当努力しているらしい。

そして僕が主な主導者となって進めるプロジェクト・エヴォルヴは未だ活動の目処は立っていない。上層の方々が判断するに、まずは個人のレベルアップが必要ということだ。

単純に言うなら、個人スキルを上げるまではデビューなんて出来やしない、ということだろう。

「はあ……………」

僕はため息をつき眉間を抑える。

少し疲れが溜まってきたかな？と疑問に思うが、首を振つてその考えを振り切る。

彼女達は来るべき日のために努力しているのだ。ならば、僕のすべきことは一体なんなのだろうか。

簡単なことだ。彼女達が万全の状態でステージに立てるように心のケアなどをしつかりするなどの裏で支えていくことだ。

よし、と僕は意気込み、パソコンに向かう。

本日のお仕事も、いつも通りで何よりだ。

☆♪  
♡◇

信堂 風side

どうも皆様、私は信堂風と言う者です。私は先日、以前からの夢であったアイドルのオーディションを受け、それになぜか受かりました。

その時の審査員が、私のプロデューサーの蒼崎弘弥さんです。

あの方は私が小心者で臆病であがり症なのに全く臆せず、手を差し伸べてきました。その手をつかんだのは私自身ですが、私はその行動が果たして正しかったかどうか、未だ見当が付きません。

そもそも、私なんかが本当にアイドルなんかには……

「おい、信堂！動きが鈍ってきてるぞ！テンポを合わせろ！」

「は、はいいい……」

よそ事を考えていたら、トレーナーさんに怒られました。

………これからは、考え事する時はTPOをわきまえることにしましょう。

それから数十分後、レッスンは終了しました。私は床に寝そべって荒い息を吐いていました。

「信堂さん、大丈夫……？」

突然、目の前に揺れるツイントールと顔が現れました。確か、レッスン前に自己紹介した時に私と同じように上がっていた………そう、

「お、緒方……さん……？」

「あ、え、うん………、大丈夫？」

「あつ、は、はい！これぐらいならああ………」

とりあえず大丈夫だと示そうと勢いよく立ち上がろうとしますが、若いはずなのに足腰にガタがきていて、よろめき、床に顔面ダイブします。

ガンツというなんとも酷い音に相応した痛みが襲ってきます。正直言つて泣きたい



です。

「だ、大丈夫……!?」

「はい……平気です」

私はなんとカッコ悪いという気持ちと痛みからかくる涙を抑えつつ、とりあえず起き上がります。

ですが、すぐに立てるようになるわけでもなく、立ち上がれずにそのまま座り込んでしまいます。

「あはは………、私のことはいいので、緒方さんは着替えに行ってください。私は後で少し回復したら行きますから」

「だ、ダメだよ！一人だったらまたさつきみたいに」

「そうならないように十分回復してから動きます」

「でも、ダメ。だって、信堂さんはもう私たちの仲間なんだよ？仲間なら助け合わないと……って誰かが言っていました」

自分の主張なのに他人が言ったことにする小心ぶり、私と何か似ているような気がします。同じ穴の貉とはこういうことを言うのでしょうか。

「……………では、お言葉に甘えます」

私はふうと息を吐き、私は脱力します。緒方さんは私の隣に座ってきました。

「……………なんかね、信堂さんを見ると私みたいに思えてきて。つい、助けたくなくなっちゃったの」

「え？」

「え、ええつと……………だから、ね……………私と友達になって欲しいなあって……………」

最後の方は小さくて聞き取りづらかったのですが、かろうじて聞こえました。

私の人生の中、「友達になって」など一度たりとも言われたことはありませんでした。

中学の入学式の日、私は隣に座っていた女の子に話しかけました。なんとか会話は出来て、私は友達だと思ってました。

でも、それは単なる決めつけでした。

後日、私はその子に話しかけました。その子は数人の女の子たちに囲まれて楽しく談笑しているところでした。そのグループの一人が、その子友達？と聞くと、私が話しかけた女の子は、微笑みながらこう言いました。

『違う違う。誰がこんな奴の友達になるのよ』

それを聞いた途端、私の中で何かが崩れ去りました。今まで抑えていた何かが溢れてきて、それを制御できず吞まれました。

それからは……………ご想像通りの生活でした。

そんなことを思い出しているとふいに頬をツーツと何かが伝っていきます。

「し、信堂さん、どうして泣いてるの……？」

「えっ!? あ、いえ、なんでもありません、気にしないでください」

私は頬を拭い、目元を裾でこすります。

「あの……そんなに、嫌だった……？」

すると緒方さんが今にも泣き出しそうな表情でこちらを見ってきます。

嫌? 滅相も無いです。というより話しかけてくれてるだけで土下座して感謝の言葉を連ねることすらしますよ私は。

私は、今出来る精一杯の笑顔で緒方さんに告げました。一握りあるかわからない勇気を振り絞って。

「じゃ、じゃあ……よろしくお願いします、智絵里ちゃん!」

信堂 風side out



「……………もう駄目だ、おしまいだ」

呆然と天井を眺めながら僕はそう呟いた。

なぜ、そうなっているのか。理由は三つあった。

一つ、武内さんが途中乱入してきて「蒼崎さんが担当する企画が来ました。その草案をお願いします」と白紙の企画書を置いて、詳細はなんの説明もなしに出て行ったこと。白紙で説明なしなのはいささかどうかと思つたが、武内さんもどこか急いでいるような感じがあつたし、説明ならちひろさんに聞くのでもいいし後で武内さんに聞くのでもいい。というか基本的に後回しにしてもいいのだろう、多分。

二つ、いきなりのレッスンへの強制参加決定。

どうしてそうなつた、と言いたい。だってそうでしょう。

僕ってプロデューサーのはずですよ？なのになんでレッスンするんだろう…………。

でも、了承しちゃつたしなあ…………。引き下がることはできないな、こればかりは。

そして三つ、デスクワーク途中に妹から「前の貸しの件、今週末デートね」というラブコール。

まさかの週末。しかも今週末は何もなくゆっくり眠れると思つていた矢先にこれだ。疲れない訳がない。

しかも金額は全部僕持ちらしい。……………まあいいけどね。

そんなこんなで、現在僕のライフは0を通り越してマイナスです。地面を0とするならマントルあたりまで陥没することになります。

はあ、と溜息をつき時刻を確認する。掛け時計に記されていたのは5時半。そこまで遅くないことに驚きつつも机の上を片付けていく。

机が綺麗になったところで今日の業務は終わり、と決めて僕は散らかっている机の上を片付けていくのだった。

☆♪  
♡◇

蒼崎弘弥 P 一言報告

『企画書＋謎のレッスン参加通告＋デート（妹と） Ⅱ心の疲労（大）＋残り体力0』

プロデューサーがレッスンというのはおかしいと思います。  
す。

どうも、先日仕事増加という宣告と休日返上という地獄を突きつけられた蒼崎弘弥で  
ございます。なんでこんな不幸なことばかり起こるんだらう……。

そして今日は、武内さんに言われたうちの一つの仕事、レッスンに強制参加だ。

一つだけ言わせてもらいたい。なんでプロデューサーがレッスンに参加するんですか  
かね？そこがわからない。

でも、言い渡されてそれを了承してしまったので、参加しないわけにはいかない。こ  
れでボイコットなんてしたら完全に事故放棄だもんね。

そうと決まればまずは着替えだ。スポーツウェア？なんてものはないが、大学の体育  
の時間で使う用を買ってあるジャージがあったので、それを着用することにした。

でも、このプロダクションって基本的に女性のアイドルばかりだから男性用の更衣  
室ってないんだよね……。

………執務室で着替えるしかないか。こんな時に誰かが訪ねてくるなんて、下手な  
イベント起きるわけがないし。

僕はそう心の中で笑いながら上着とワイシャツを脱ぎ、上半身がシャツ一枚になる。さて、と。ジャージの上は確か今日持ってきたバックの中にあつたはずなただけ……。

その時、ガチャつと背後から音がした。次いで、バラバラとおそらく持っていたであろう書類を落とす音も。

錆びたロボットののように首を回すと、そこには驚きで目が見開き、脳の処理が追いついてないちひろさんだった。

………一番見られたくない人に見られたー！ー！！

「いや、あの、ちひろさん、違うんですこれはー！ー」

「わ、わわわかってます着替えようとしたことは。だつて更衣室なんですもんねそうですよね、それでは失礼しますのでごゆっくりどうぞ！」

「ちよつと待つてごゆっくりってー！というか何勘違いして……つてもういない！」

執務室から飛び出て廊下に首だけ出して周囲を見渡すが、すでにちひろさんの姿はなく、誰もいない廊下がただ広がっていた。

そんな状況で、僕は散らばった書類はどうすれば？やら後で謝らないという考えより先に、頼むから変な噂は流さないください……と祈るのであった。

これ以上不名誉な噂が立つのはこつちとしても嫌だからね……。本当に。

そんな祈りを込めつつ、僕は次は誰も入ってこないように執務室の鍵を閉めてジャー  
ジに着替えた。

最初から鍵閉めとけばよかった……。

☆  
♪  
♡  
◇

「おお、来たか蒼崎」

レッスン室に入ると、そこにはニヤリと意地悪そうに笑う忍さんと僕が入ってきたこ  
とを驚いた様子で見ると、シンデレラプロジェクトの面々がいた。

「プロデューサーさん、どうかしたんですか？」

「……まあ、ちよつと野暮用で」

「レッスンルームに野暮用で来る人なんてそうそういないと思うけど」

「確かにそうだにや。で、本当は何しに来たのPちゃん？」

「いや、それが……」

僕の訪れで疑問符を浮かべているメンバーに説明しようとした途端、忍さんがパンツ



と手を叩き、それを遮る。

「はい注目！今回、蒼崎にはお前らのお手本役として来てもらった！」

『……………お手本？』

「ちよつと待つてください一言も聞いてないですよそんなこと」

「だって言ってるじゃないし」

「……………それ酷くないですか？」

「失礼な。策士と言ってくれ」

「そうだとしたらあなた相当横暴な策士だよ」

僕がジト目で返すも、全く気にしない風に振る舞う忍さん。この人、反省する気と謝る気ゼロだな…………。

こうなった忍さんはどうやったとしても止まることはない。以前、信堂さんをレッスンに連れて来たのだが、その時もこんな感じだった。

一度信堂さんを踊らせて、それを見て何か感じるものがあつたのか、一曲丸々完璧に踊れるようになるまで鬼のような特訓を強いられたのだ。あれ終わった後、信堂さんがチ泣きしてたしね。

まあ、結局はというと、

「……………僕レッスンに参加しなくてもいいですか？」

「却下」

「うんまあ、忍さんはわかってましたけどどうして貴女が拒否するんですかね。美波さん?」

分かりきった質問をしたが、まさかプロジェクトのメンバーのうちの一人、新田美波さんに拒否されるとは思っていなかった。

そして、その美波さんは、それはもう清々しい笑顔で言い放った。

「だって、蒼崎君の踊ってるどころ見て見たいんだもの♪」

そんなことだろうとは思いましたけどね! 本当に予想を裏切ってくれませんね君達は……。

その美波さんの発言により、他のメンバーの子達もそういえばそうかも、と美波さんの発言に賛同する。

ここには僕の味方はいないのか。

「「「いない(でしょ)」「」」」

「久々だけどき、心読むのやめてくれていいですかね?」

もう本当この子ら怖い……(涙)

特に、美波さん、凜、みく、杏の四人。この人達、何の気なしに人の心読んでくるからね。

「さて、それじゃあシンデレラプロジェクトの奴らのレッスンもひと段落したところだし、やるぞ蒼崎」

「……………やりたくないなあ」

「なんか言ったか？」

「いえ何も」

最早やらないという選択肢がないんですが。というか、いつもどうしてこう厄介ごとに巻き込まれるんでしょうか。

トラブル体質じゃなかったはずなんだけど……。

でも、今更どうこう思ったところで仕方ない。これ以降、しないという選択肢が出てくるわけじゃないし。

「今回お前にやってもらうのはこの曲だ」

忍さんはCDプレイヤーにCDを差し込み再生する。

そこから流れてくるのは346プロを知る者なら必ず知っているだろうという曲、『お願いシンデレラ』だった。

……………まさか、あれを踊れと？

「さて、これを踊ってもらうわけだが。なにか質問はあるか？」

「もっとほかの曲はなかったんですか」

「ない。というより、これ以外の曲を踊らせて、こいつらのためになると思うか？」

忍さんは端っこで休んでいる卯月達を指さしてジト目で告げる。いや、それは正論なんだけど素人に踊らせるというのもどうなのかと思うのですが。

「ということで、腹を決めてもらうぞ」

「……………先に聞きます。拒否権はありま「ない」せめて言葉が終わるまで待つてくれませんかね……………」

ため息をついて楓さんたちが踊っていた姿を思い出す。華やかな女の子だから映える踊りであり、可愛らしく見える振り付けのはずだ。それを僕のような男が踊ったらどうなるかは一目瞭然なんだけど……………。

拒否権ないから踊らないなんてできないけどね！

「振り付けの確認はいるか？」

「……………いえ、多分大丈夫だと思えます。高垣さん達のを見たことがありますから」

「へえ、大した自信じゃないか。見ただけで踊れるかも、とは。それじゃあ練習なしのぶつつけ本番といこうじゃないか」

忍さんは不敵に笑いながら、プレイヤーの再生ボタンを押し曲を流し始めた。



「ぜえ……はあ……」

「まあ、素人にしては頑張った方じゃないか？」

あれから『お願いシンデレラ』を3回、ダンス向けの曲を3曲ぶっ続けで踊った。僕は足やら腕やらにガタが来始めて息も絶え絶えにもかかわらず、忍さんは荒い息を一つも吐いておらず、全然平気そうだ。

流石トレーナーというだけはあると思う。やっぱり体力はかなりあるよね。

片や僕は一般大学生であり、多くの体力とか持ち合わせていない。加えて日頃はデスクワークなのだ。体力が増えるどころか衰える一方なのに、6曲分も踊れるとは……。

その代償としてかなりの体力と両手両足を犠牲にしたけどね……。さつきからブルブルと震えが止まらなくてつらい……。

当分は踊りたくないなあ。忍さんのあの様子だとその願いも叶いそうにないけど。

「さてと……。さつきのを見てもらってわかった通り、お前らの技術はまだまだ。最低でもこいつレベルになってもらわなくちゃ困る」

両手両膝をついて息を整えていると、忍さんは見学していたプロジェクトメンバーに

話をし始めた。

僕、そんなに上手くないんだけどなあ……。見様見真似だったし。

おそらく今からあの子達のレッスンを再開するはずだろう。となると、ここに僕がいるのは流石に邪魔なような気がする。

というか、レッスン中の女の子をまじまじと見る男つてのも絵面的にまずいだろうし。

加えて、多分だけど忍さんは踊つてるところを見せたいだけだったようだし。ここに  
いる必要はないよね！

未だプルプルと震える両足に鞭を打ち、僕は静かに、そして速やかにレッスンルーム  
を後にした。

☆♪  
◇◇

「仕事が……手につかない……！」

震える足を動かして事務室まで戻って来たのはいいのだけど、駄目だこれは。

指が……動かないっ!

「事後の仕事のことまで考えてなかった……っていか仕事増えてないですかね!」  
事務室を出た時にはそのになかったはずの紙束が、なぜかそこに置かれていた。無言で置くとか酷くないですかね……しかも書き置きもないし。

これ今日も遅くまで残業だよ、きつと。

「無駄な体力使ったから早く帰って寝たいんだけど……無理だよねこればかりは」

早々に諦めながら、僕は天井を仰いだ。

誰か、睡眠時間と休息をください……。

その後、レッスンが終わった卯月達に褒めちぎられたり、どうやったらああなれるのかと質問責めにあつたのは、また別の話。



蒼崎弘弥 P 一言報告

質問責めによつて結局残業が決定し、帰りが遅くなったという理由で花梨に軽い関節技を決められて腕が数分動かなくなつた。

一つだけ言わせてほしい……今日厄日すぎない……？